

広島市の文化財 第21集

広島市安佐北区高陽町所在

# 高陽台遺跡群発掘調査報告

1982.3

広島市教育委員会

# 序 文

近年、広島市の太田川周辺丘陵地は次々と大規模な宅地開発がすすみ、新しい街並みに生まれかわっています。

これら開発地域の中には、祖先の生活の歴史を物語る数多くの埋蔵文化財が包蔵されており、高陽台遺跡群もこのような開発予定地内から発見されたもののひとつです。

この発掘調査は、記録保存のため、昭和56年8月から12月までの間実施いたしました。その結果、古代住居跡や墳墓などの遺構とそれに伴う多くの遺物を発掘し、この地域の歴史を明らかにするうえで貴重な資料を得ることができました。また、この遺跡から発見された石棺1基は落合小学校の校庭に復元・保存し、子どもたちの生きた教材として、郷土史への理解を深めるうえで役立てることといたしました。

本報告書が、広く市民各位の地域の歴史研究や郷土理解を深めていただくうえでご活用願えれば、まことに幸いです。

おわりに、この調査にあたり、ご指導を賜りました諸先生ならびに、連日発掘作業に御協力していただいた地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

昭和57年3月

広島市教育長 藤 井 尚

## 例 言

1. 本書は、広島市安佐北区高陽町矢口における宅地造成工事に伴い、昭和56年8月20日から昭和56年12月7日までの間、実施した高陽台遺跡群の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、広島市高陽台土地区画整理組合から委託を受けて、広島市教育委員会が実施した。
3. 今回発掘調査を実施した遺跡は、A地点・B地点・C地点であるが、本書は、A地点・B地点についての発掘調査報告である。
4. 本書は、中村眞哉と橋本義和が分担して執筆し、石田彰紀が編集した。
5. 出土遺物、遺構の実測・製図等は、石田、桧垣栄次、幸田淳が行い、遺物写真は、石田が担当した。
6. 本書掲載の航空写真は、はにわ会会員井手三千男氏から提供を受けた。
7. 第1図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1、広島・海田の地形図を複製したものである。

# 目 次

I	はじめに .....	1
II	位置と環境 .....	3
III	A地点遺跡の概要 .....	5
	1. 第1号竪穴式住居跡 .....	6
	2. 第2号竪穴式住居跡 .....	9
	3. 溝状遺構 .....	10
	4. 第3号土壇 .....	11
	5. 第4号土壇 .....	13
	6. 第3号竪穴式住居跡 .....	13
	7. 第8号土壇 .....	18
	8. 第4号竪穴式住居跡 .....	19
IV	B地点遺跡の概要 .....	23
	1. 第1・2号竪穴式住居跡 .....	23
	2. 第3号高床式住居跡 .....	26
	3. 墳 丘 墓 .....	27
	4. 第1号古墳 .....	32
	5. 第2号古墳 .....	35
	6. 第3号古墳 .....	36
	7. 第4号古墳 .....	38
V	まとめ .....	41

## 図 版 目 次

- PL. 1 a. A地点全景（調査前，南から）  
b. 同上（調査後，ク）
- PL. 2 a. A地点第1号住居跡（北東から）  
b. A地点第2号住居跡（ク）
- PL. 3 a. A地点第3号住居跡（北から）  
b. A地点第4号住居跡（南東から）
- PL. 4 a. A地点第1号土壙  
b. 同上（完掘後）
- PL. 5 a. A地点第2号土壙  
b. A地点溝状遺構（南から）
- PL. 6 a. A地点第3号土壙  
b. 同上（完掘後）
- PL. 7 a. A地点第4号土壙  
b. A地点第5号土壙
- PL. 8 a. A地点第6号土壙  
b. A地点第6号土壙内
- PL. 9 a. A地点第7号土壙  
b. A地点第8号土壙
- PL. 10 a. A地点第9号土壙（南から）  
b. A地点鉄斧出土状態
- PL. 11 a. B地点近景（調査前、東から）  
b. 同上（調査後、東から）
- PL. 12 a. B地点全景（航空写真）  
b. B地点遠景（航空写真－東から）
- PL. 13 a. B地点第1・2号住居跡（北から）  
b. B地点第1号土壙
- PL. 14 a. B地点第3号住居跡（北東から）  
b. 同上 柱穴内遺物出土状態
- PL. 15 a. B地点墳丘墓及び第1号古墳内部主体（南西から）  
b. B地点墳丘墓内部主体（上：A主体，下：B主体）
- PL. 16 a. B地点第1号古墳内部主体（粘土郭）  
b. 同上（完掘後）
- PL. 17 a. B地点墳丘墓近景（東から）  
b. B地点墳丘墓東側溝状遺構遺物出土状態
- PL. 18 a. B地点第2号古墳（北西から）  
b. 同上 内部主体（北西から）
- PL. 19 a. B地点第3号古墳（北から）  
b. 同上 内部主体 西から）
- PL. 20 a. B地点第4号古墳（東から）  
b. 同上 内部主体（南から）
- PL. 21 a. B地点第4号古墳遺物出土状態  
b. B地点第4号古墳周溝内遺物出土状態
- PL. 22 A地点出土土器
- PL. 23 A地点出土土器
- PL. 24 B地点出土土器
- PL. 25 B地点出土遺物

# 挿 図 目 次

第1図	高陽台遺跡群の位置と周辺の主要遺跡	2	第26図	第4号住居跡周辺出土土器実測図	2 1
第2図	高陽台遺跡群遺跡配置図	4	第27図	B地点遺構配置図	2 2
第3図	A地点遺構配置図	5	第28図	B地点第1・2号住居跡実測図	2 3
第4図	A地点第1号住居跡実測図	6	第29図	B地点第1号土壙実測図	2 4
第5図	A地点第1号土壙実測図	7	第30図	B地点第1・2号住居跡・第1号土壙内出土土器実測図	2 5
第6図	第1号住居跡・第1号土壙出土土器実測図	8	第31図	B地点第3号	2 6
第7図	鈿実測図	9	第32図	B地点第3号住居跡北東隅柱穴内出土土器実測図	2 7
第8図	A地点第2号住居跡・溝状遺構実測図	9	第33図	B地点墳丘墓A主体実測図	2 8
第9図	A地点第2号土壙実測図	1 0	第34図	B地点墳丘墓B主体実測図	2 9
第10図	第2号土壙内出土土器実測図	1 0	第35図	B地点墳丘墓C主体実測図	3 0
第11図	溝状遺構周辺出土土器実測	1 1	第36図	墳丘墓東側墳丘裾出土土器実測図	3 0
第12図	A地点第3号土壙実測図	1 2	第37図	墳丘墓南側墳丘裾出土遺物実測図	3 1
第13図	第3号土壙周辺出土土器実測図	1 3	第38図	墳丘墓溝状遺構出土土器実測図	3 2
第14図	A地点第4号土壙実測図	1 3	第39図	B地点第1号古墳粘土槨実測図	3 3
第15図	A地点第3号住居跡実測図	1 4	第40図	B地点第1号古墳土壙実測図	3 4
第16図	A地点第5号土壙実測図	1 5	第41図	ガラス小玉実測図	3 5
第17図	A地点第6号土壙実測図	1 6	第42図	B地点第2号古墳内部主体実測図	3 5
第18図	A地点第7号土壙実測図	1 6	第43図	B地点第3号古墳内部主体実測図	3 7
第19図	第3号住居跡関係出土土器実測図	1 7	第44図	鉄製品実測図	3 8
第20図	第3号住居跡周辺出土土器実測図	1 7	第45図	B地点第4号古墳周溝断面実測図	3 8
第21図	A地点出土鉄斧実測図	1 8	第46図	B地点第4号古墳内部主体実測図	3 9
第22図	A地点第8号土壙実測図	1 8	第47図	第4号古墳出土遺物実測図	4 0
第23図	A地点第4号住居跡実測図	1 9			
第24図	A地点第9号土壙実測図	1 9			
第25図	第4号住居跡及び第9号土壙周辺出土土器実測図	2 0			

# I はじめに

広島市教育委員会では、昭和55年5月、広島市安佐北区高陽町矢口字城前・道川地区の丘陵の造成計画を知り、分布調査を行なった結果、埋蔵文化財の存在の可能性があることがわかった。そこで、造成主である広島市高陽台土地区画整理組合（以下組合とする。）と協議を行い、これと平行して組合の協力を得て、昭和55年10月試掘調査を実施した。その結果、3カ所の埋蔵文化財包蔵地を確認した。その後、埋蔵文化財の取り扱いについて再三の協議を重ねたが、地形的条件等から設計変更は不可能であり、記録保存もやむなしとの結論を出すに至った。これをうけて、広島市教育委員会は、昭和56年度に発掘調査を実施することとなった。

昭和56年8月から発掘調査の準備にかかり、8月20日に調査を開始し、12月7日に終了した。

なお、調査の実施に係る関係者は下記のとおりである。

調査委託者 広島市高陽台土地区画整理組合

調査主体 広島市教育委員会

調査担当係 広島市教養委員会事務局社会教育部社会教育課文化財係

調査関係者 森 脇 昭 之（社会教育部長）

川 崎 良 馬（ 〃 課長）

佐 藤 普 門（ 〃 主監）

出 羽 宏 道（ 〃 文化財係長）

桧 垣 栄 次（ 〃 文化財係主事）

幸 田 淳（ 〃 〃 〃 ）

池 水 公 二（ 〃 〃 〃 ）

調 査 者 石 田 彰 紀（ 〃 〃 〃 ， 調査担当）

中 村 眞 哉（ 〃 〃 ， 調査担当A地点主任）

橋 本 義 和（ 〃 〃 主事補， 調査担当B地点主任）

植 田 由 美 子（ 〃 〃 嘱託， 整理担当）

調査補助員（順不同）

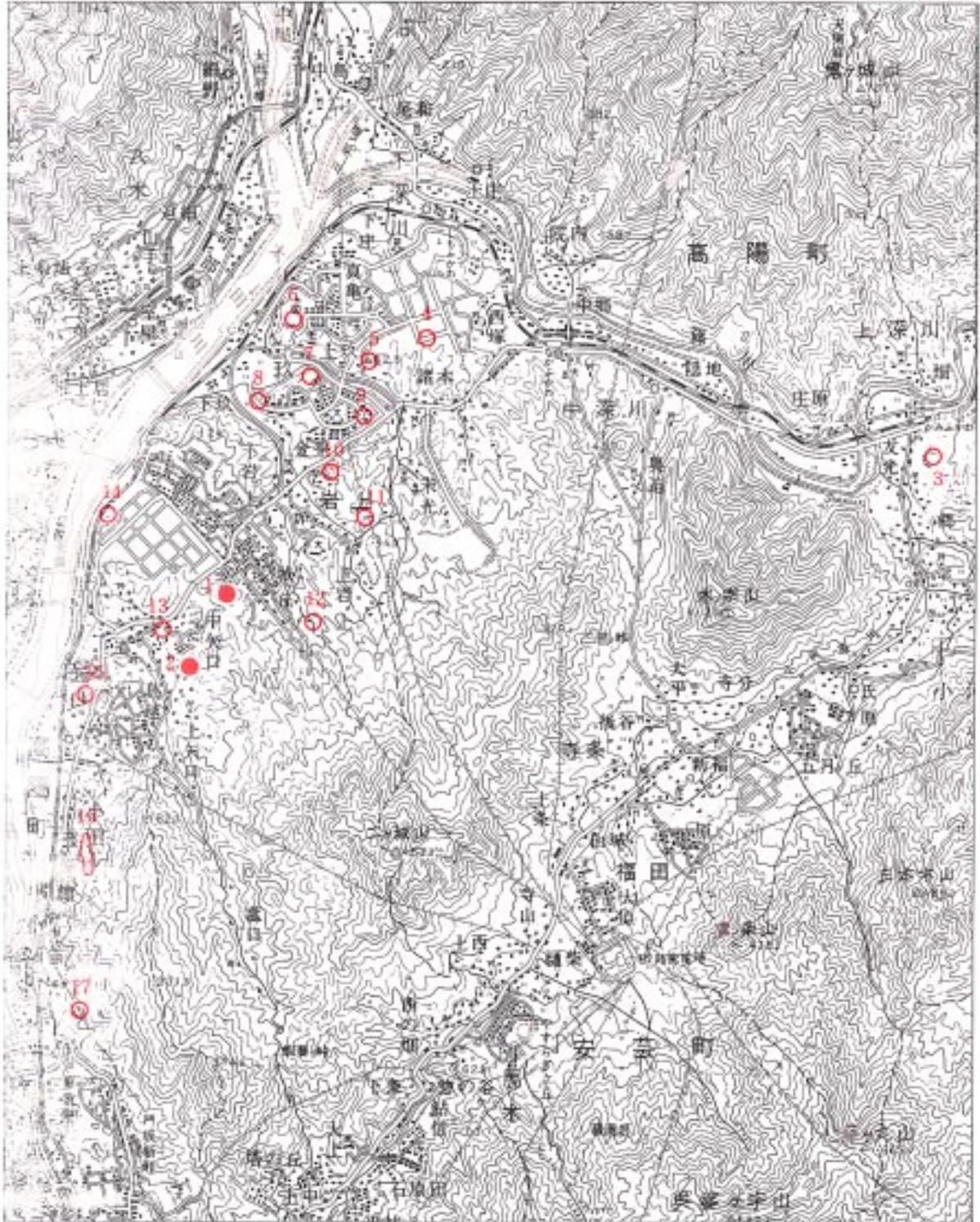
発掘作業

上道真二，住川努，沖川義登，瀬垣昭義，中藤喜代子，住川幸恵，住川香代子，西村雄太郎，坂本七五登，坂本二信，三浦君子，河合淳子，橋本礼子，河合五十鈴，土井勝子，河田キミエ，山村久登，織田恵子，上林陽子，岡原節子，倉本芳人，倉本節枝，城山志信，城山ヨシ子，城山正則

整理作業

平連佐知子，平連高通，住川幸恵，住川香代子，河合淳子，土井勝子

また、広島市高陽台土地区画整理組合，中電技術コンサルタント株式会社，松本・青木合同企業体及び可部郷土史研究会三野丈一氏，小出一義氏，はにわ会会員井手三千男氏，保存科学研究会理事宇野栄氏，県立安西高校教諭加藤光臣氏，高陽公民館新本静昭館長ほか職員の方々には，調査を円滑に進めるため多大なご配慮を頂いた。ここに記して謝意を表したい。（橋木）



1. 高陽台遺跡群A地点, 2. 同B地点, 3. 上深川遺跡, 4. 西山・北山遺跡群,
5. 寺迫遺跡, 6. 真亀遺跡群, 7. 山手遺跡, 8. 地藏堂山遺跡, 9. 大井遺跡,
10. 末光遺跡群A地点, 11. 同B地点, 12. 城前遺跡, 13. 中矢口遺跡,
14. 西願寺遺跡群, 15. 上小田古墳, 16. 中小田古墳, 17. 禅昌寺西遺跡

第1図 高陽台遺跡群の位置と周辺的主要遺跡

## Ⅱ 位置と環境

高陽台遺跡群は、広州市安佐北区高陽町矢口字城前・道川にまたがるもので、標高483.2mのニカ城山から北西に派生した丘陵の尾根上にある。太田川の左岸、中央部を矢口川が流れる湾入部の縁辺に位置し、目前には太田川の後背地が広がっている。太田川は、往古より氾濫をくりかえしており、治水技術の発達していなかった原始・古代においては、その後背地は、必ずしも安定した可耕地とはいえなかったと考えられる。したがって、太田川流域における弥生・古墳時代の諸遺跡の多くは、小河川の流れる谷あいをはさむ丘陵上に見出される。ここで報告する高陽台遺跡群もまたそうした遺跡のひとつである。

高陽台遺跡群はA・B・Cの3地点からなるもので、A地点は竪穴式住居跡を中心とした遺跡であり、B地点は古墳及び住居跡からなる遺跡である、また、C地点は工事中に偶然発見された貝塚である。

以下、高陽台遺跡群の周辺に所在する主要な遺跡を概観してみよう。

上深川遺跡は標高30mの丘陵上にあり、その出土土器は弥生時代後期太田川下流域の標識とされている。(注1) また、高陽ニュータウン造成時に発見されたものに、大井B地点遺跡・山手A地点遺跡・真亀遺跡群・寺迫遺跡・西山遺跡・北山遺跡等がある。これらはいずれも標高50～80mの低丘陵上に位置し、弥生時代後期から古墳時代初頭に比定される竪穴式住居跡からなっている。(注2)

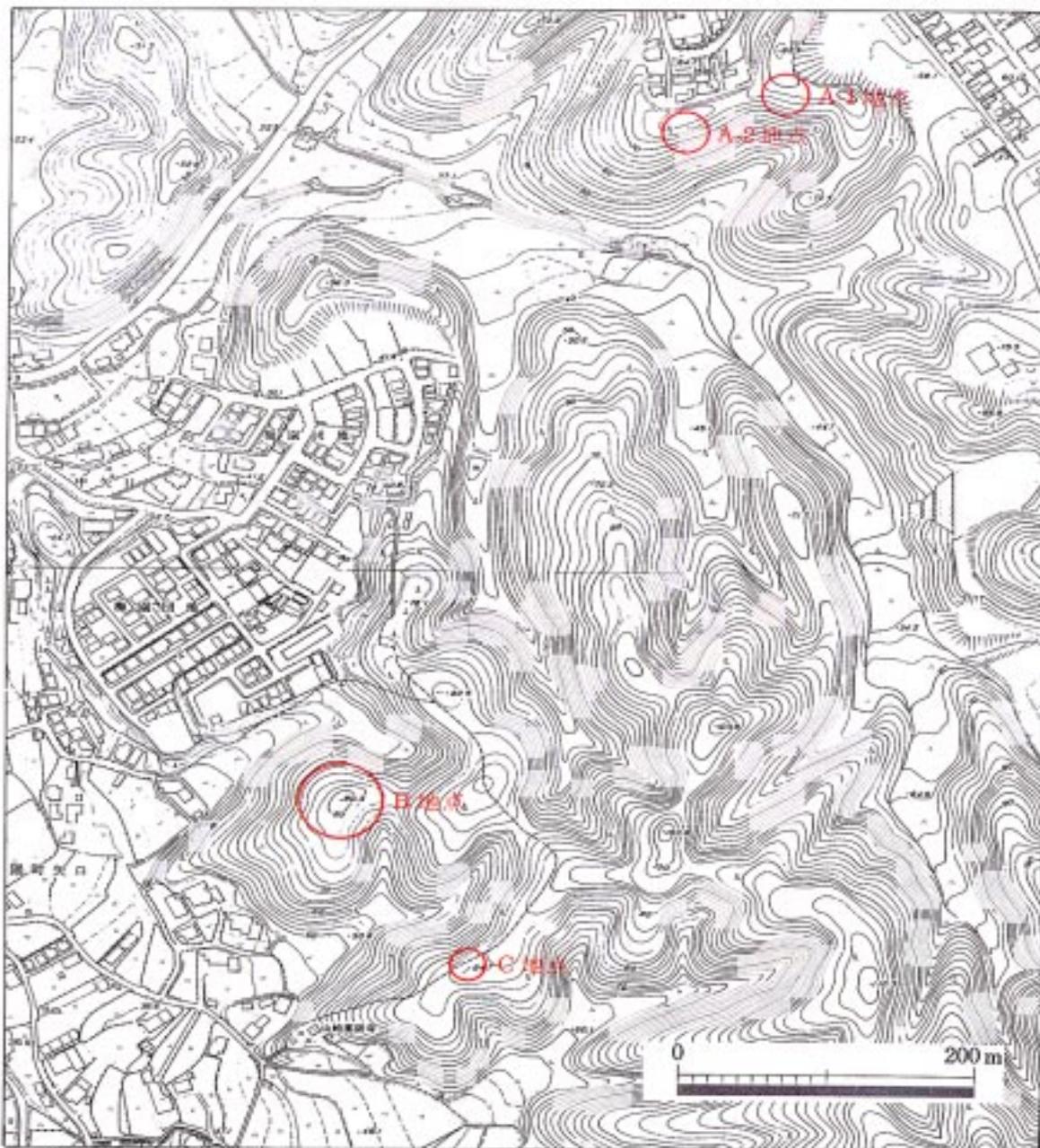
このほか、本遺跡A・B地点と同様に住居跡を伴う遺跡としては、末光遺跡群・城前遺跡・中矢口遺跡等がある。末光遺跡群は、A地点において、5基の竪穴式住居跡が検出され、出土土器は上深川Ⅲ類またはそれに近い特徴を示している。(注3) 城前遺跡は弥生時代末から古墳時代初頭にかけての竪穴式住居跡とされ、10×8mにおよぶ大型の方形プランを有する住居跡2基が含まれていることは注目される。(注4) 中矢口遺跡は竪穴式住居跡4基と古城1基からなっており、古式土師器の範疇に入ると考えられる土器が出土している。(注5)

墳墓の遺跡としては、弥生時代から古墳時代前半にかけて営まれた西願寺遺跡群があり、竪穴式石室をはじめとして、箱式石棺、土壙墓などが発見されている。(注6) また、中小田古墳群は太田川下流域を代表する古墳群であり、第1号古墳からは三角縁神獣鏡・車輪石などが出土している。(注7)

このほか、本遺跡B地点から発見された古墳との類似性が認められるものとして、真亀第1号古墳・地藏堂山第1号古墳・上小田古墳・禅昌寺西遺跡があげられよう。このうち、真亀第1号古墳は割竹形木棺を据えたものと考えられる粘土床を内部主体にもつ方墳であり、5世紀代のものとされている。(注8) 地藏堂山第1号古墳は、木棺直葬の内部主体より素環頭太刀・鉄刀ばとが出土し、5世紀中葉から後半にかけてのものとされている。(注9) 上小田古墳は、組合せ式石棺を内部主体とする円墳であり、5世紀中葉のものとされている。なお、棺内には枕石と考えられる自然石が置かれている。(注10) 禅昌寺西遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前半期にかけて営まれた墳墓群であり、箱式石棺・土壙墓・壺棺墓で構成され、また箱式石棺の蓋石の上部が大小の割石で覆われている点などはB地点第3号古墳と共通している。(注11)

このように高陽町一帯には、旧石器・縄文時代の遺跡はみられないものの、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は数多くみられる。高陽台遺跡群においても、太田川下流域初見の粘土槨を内部主体とする古墳・高床式住居跡などの遺構が検出され、当地域の古代の社会構造を知る一資料となるものである。(中村)

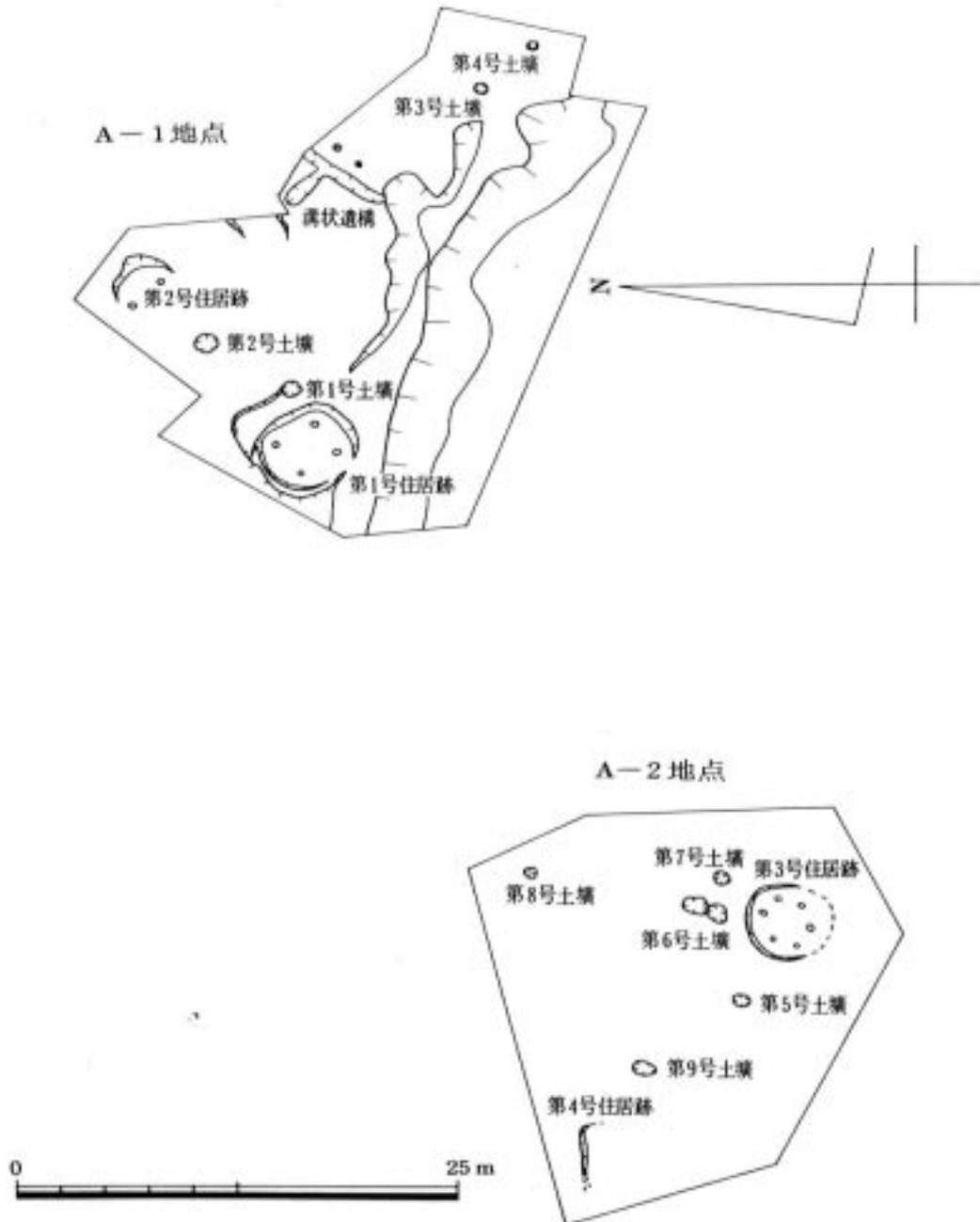
- 注 1 松崎寿和・潮見浩「先史時代の広島地方」『新修広島市史第1巻』1961
- 注 2 広島県教育委員会「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」1977
- 注 3 広島市教育委員会「末光遺跡群A地点発掘調査略報」1981
- 注 4 広島市教育委員会「中矢口追跡発掘調査報告」198お
- 注 5 同上
- 注 6 広島県教育委員会「西願寺遺跡群発掘調査報告」1974
- 注 7 広島市教育委員会「中小田古墳群」1980
- 注 8 注2に同じ
- 注 9 注2に同じ
- 注10 本村豪章「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」『広島考古研究2』1950
- 注11 禅昌寺西遺跡発掘調査団「禅昌寺西遺跡発掘調査報告」1980



第2図 高陽台遺跡群配置図

### Ⅲ A地点遺跡の概要

A地点は遺跡群の北端にあって、南西にのびる小丘陵の南斜面に位置している。試掘の成果に基づいて2カ所の調査区を設定し、東寄りをA-1地点、西寄りをA-2地点とした。調査の結果、A-1地点においては、竪穴式住居跡2基、土壙4基及び溝状遺構、A-2地点においては、竪穴式住居跡2基、土壙5基を検出した。なお、住居跡及び土壙の呼称は検出の順次によった。(第3図)

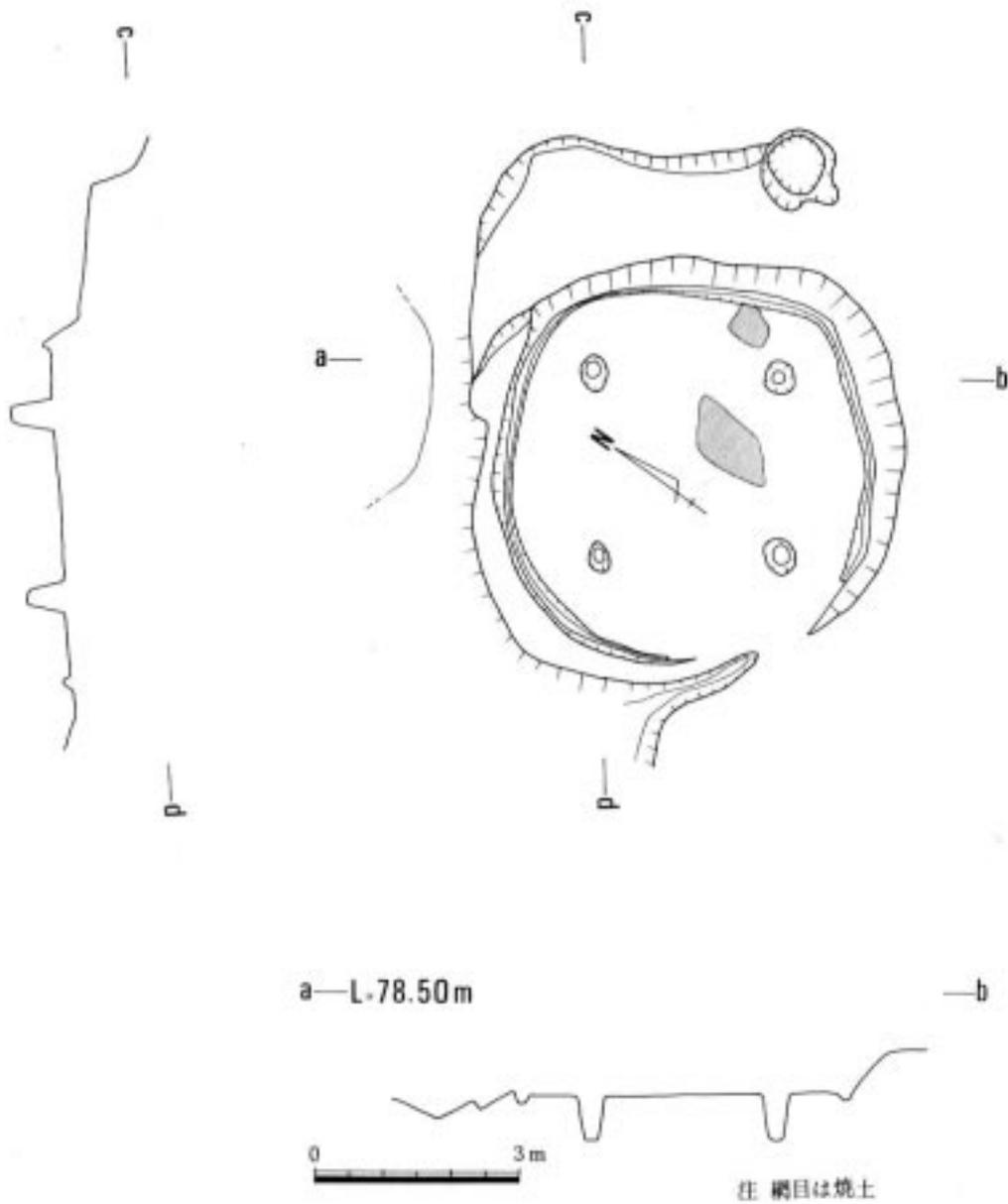


第3図 A地点遺構配置図

# 1. 第1号竖穴式住居跡

## 遺 構 (第4図)

第1号住居跡は、A-1地点の西側、南西方向にのびる尾根の傾斜面に位置する。長軸を北西-南東方向にもち、6.1×5.5mを測る住居跡であり、平面プランは隅丸方形を呈している。壁高は、北東付近において最高55cmを測るが、住居跡の立地の関係上、南西側に向かうに従って低くなる。この結果、西壁では、ほぼ一定して10cmを測り、南側では壁のみられない平坦な部分もある。また、住居跡内には、南側の一部を除いて幅10~20cm、深さ10cmあまりの壁溝がめぐらされている。柱穴は4カ所あり、径30~45cm、深さ55~60cmを測る。なお、住居跡内中央やや東寄りと、北東隅から不整形の焼土が検出された。



第4図 A地点第1号住居跡実測図

第1号住居跡北東壁に連なって、幅150cmほどのテラス状の平坦面が認められる。このテラス状遺構の東寄りからは、第1号住居跡に伴う貯蔵穴と考えられる袋状の第1号土壙（第5図）が検出されている。上縁は不整形で東西110cm、南北110cm、底面は平坦で径140cmの円形のプランを呈しており、深さは157～107cmを測る。また、第1号住居跡の北西には、排水溝とも考えられる溝状の遺構が認められたが、傾斜面に位置するため、その全体のプランは確認できなかった。

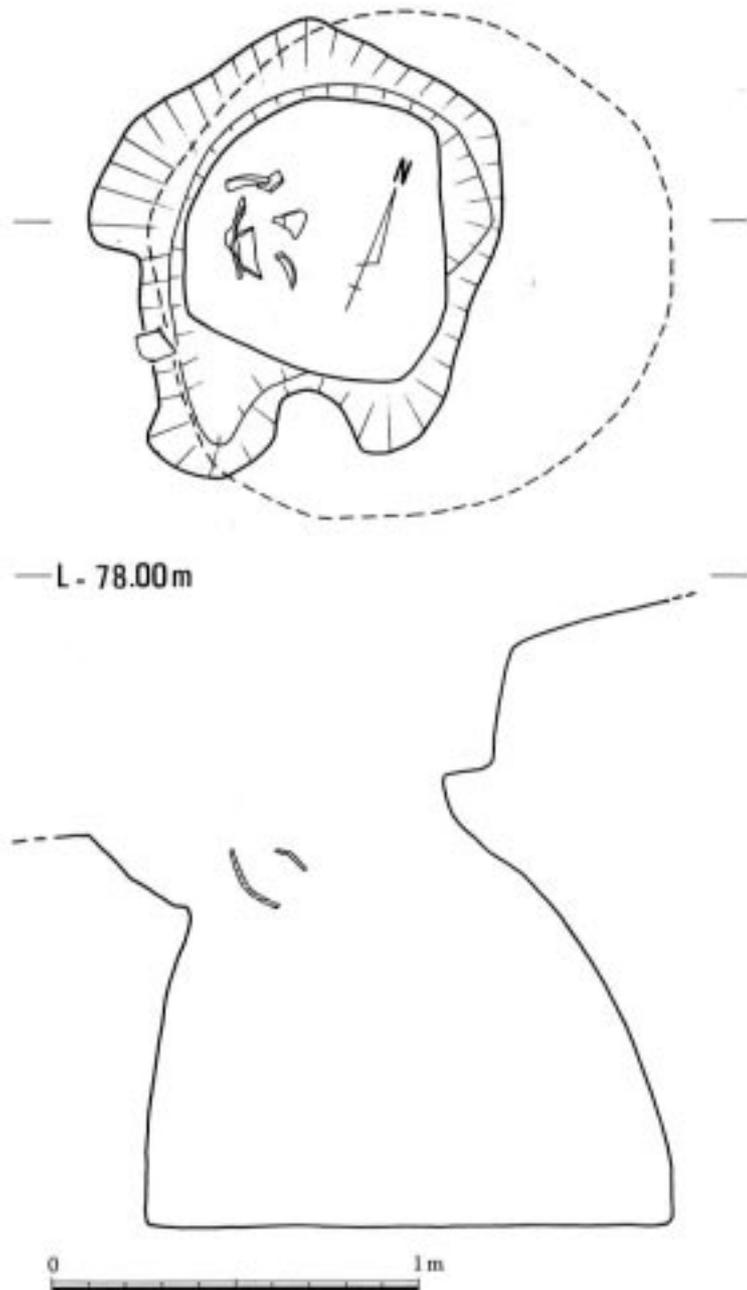
#### 遺物（第6・7図）

第1号住居跡内の床面からは、比較的多量の土器片が出土したが、そのうち器形を推定し得るものは7点である。そのほか、鉄製品1点も検出された。また、第1号土壙内からは少量の土器片が検出されたが、図示するには至らなかった。なお、土壙の埋土中から、高坏の一部と考えられる土器片が出土している。住居跡内出土7点の土器はいずれも破片であり、器形の内訳は土器1が壺形土器で、土器7が鉢形土器であるほかはすべて甕型土器である。甕型土器は、

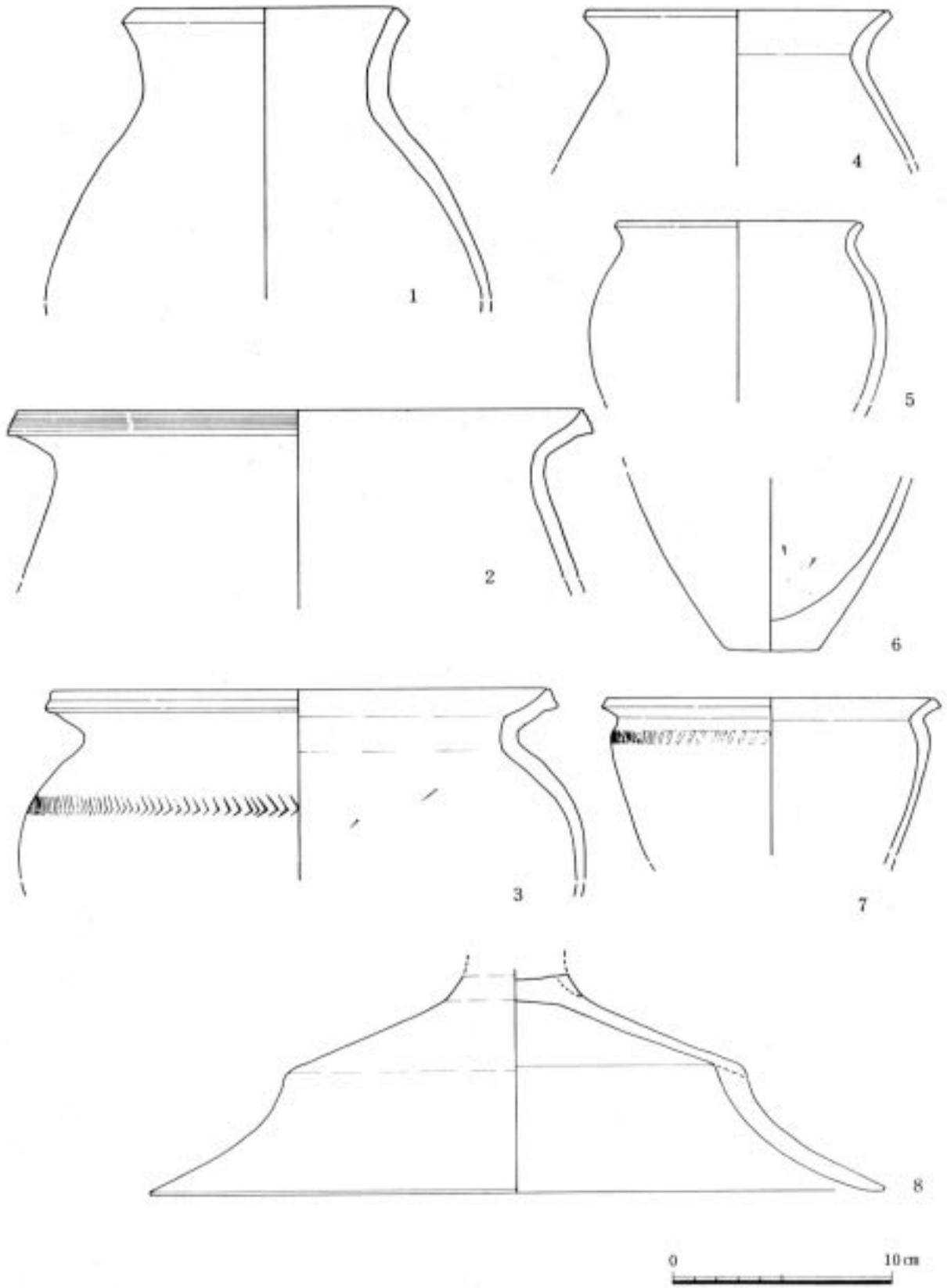
くの字状の口縁をもち、口縁端部に1～3条の凹線文をもつもの（土器2・3）と平坦なものがある。また頸部直下にヘラ状工具により、文様をめぐらしたもの（土器3）がみられる。調整方法については、胎土に砂粒を多く含み、器壁の内外面とも摩滅が著しく、詳細は不明である。底部については、形態の明瞭な土器5は平底を呈している。

壺形土器は口径11.8cm、外反しながら上方にのびる口縁の端部は平坦である。器壁の内外とも摩滅が著しく調整方法は明瞭でない。色調は赤褐色で、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。

鉢形土器は、口径14.9cmを測り、口縁部はくの字状に外反し、端部は平坦である。頸部直下には、ヘラ状工具による施文がみられ、調整方法は摩滅のため不明である。色調は明褐色で、胎土は砂粒を多く含み、



第5図 A地点第1号土壙実測図

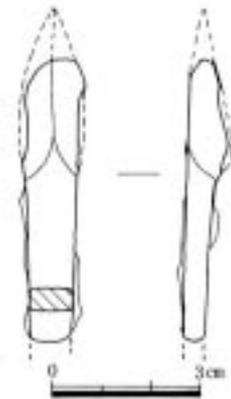


第6図 第1号住居跡・第1号土壙出土土器実測図

焼成は良好である。

高坏は、底径 33.5 cm を測る脚部で、貼り付け時の接合痕も認められる。器壁の内外とも摩滅が著しく、調整方法の詳細は不明である。色調は全体的に褐色を呈し、内面には黒色部分が多い。胎土は石英粒を含み、焼成はやや良好である。

鉄製品は、現行長 5.6 cm を測り、鉞の一部と考えられるもので、表にはわずかに鑄が認められる。(中村)



第 7 図 鉞実測図

## 2. 第 2 号 竪穴式住居跡

### 遺 構 (第 8 図)

第 1 号住居跡の北東 12 m、標高 80.4 m の場所に位置する住居跡は、径 4 m ほどの円形プランを呈するものである。尾根頂部に近い斜面に立地しているため、北東寄りの半分を最大 40 cm ほど掘り込んで床面とし、南西寄りの半分は盛土によって構築されていたものと思われる。現存している柱穴は 2 ケ所あり、径 40 ~ 50 cm、深さ 35 ~ 40 cm を測る。なお、床面の北東隅の一部に幅 5 cm、深さ 5 ~ 10 cm ほどの壁溝が見られた。

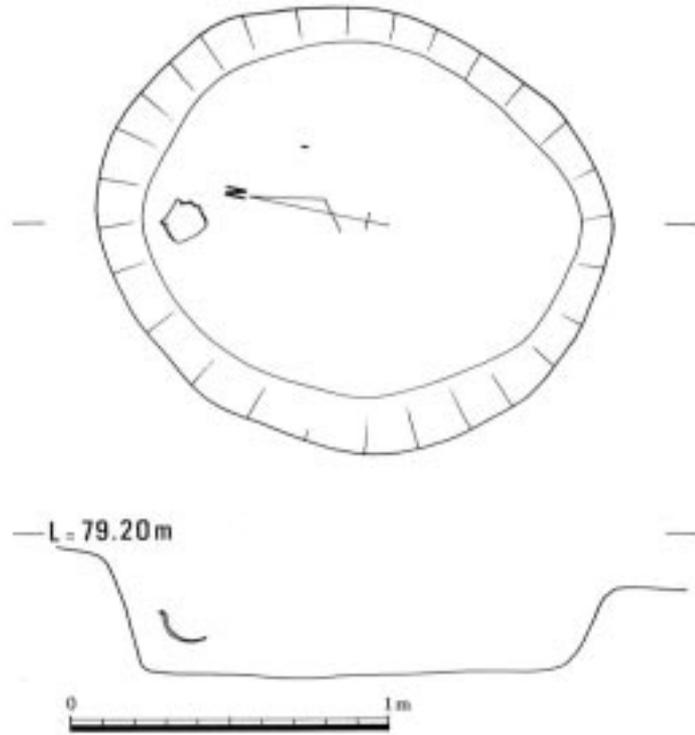
また、第 2 号住居跡の南西 5 m ほどの場所から第 2 号土壌が発見された。上縁径 160 × 140 cm、底径 140 × 120 cm の長円形のプランを呈しており、深さは 35 ~ 25 cm と浅く、底面は平坦である。本土壌はその位置からみて、第 2 号住居跡に伴うものである。(第 9 図)



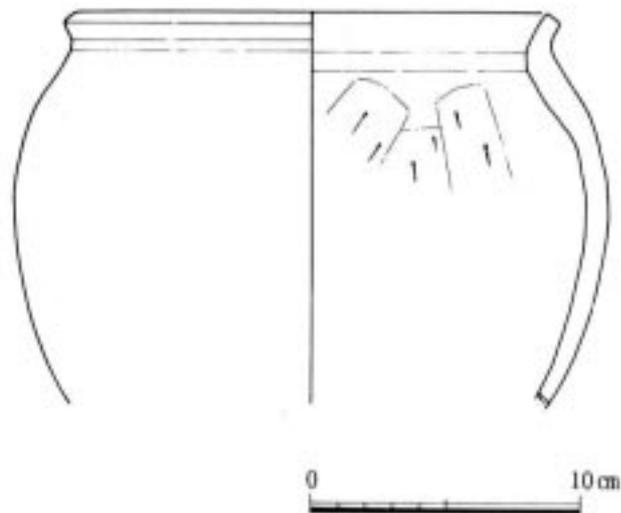
第 8 図 A 地点第 2 号住居跡・溝状遺構実測図

### 遺 物 (第 10 図)

第 2 号住居跡内からは、土器片が数片検出されたが、土器片は細片のため器形を判断するに至らなかった。また、住居跡に付属する貯蔵穴から土器片を数片検出した。この土器は、口縁部から胴部にかけての甕形土器の破片であり、口径 17.4 cm、最大胴径 22.0 cm を測るものである。口縁部は外反し、口縁端部は平たくおさめている。外面から頸部内面まではナデ調整を、頸部内面以下はヘラ削りを施している。色調は明褐色で、外面にはススの付着がみられ、胎土は若干の砂粒を含み、焼成は良好である。(橋本)



第9図 A地点第2号土壙実測図



第10図 第2号土壙内出土土器実測図

### 3. 溝状遺構

#### 遺 構 (第8図)

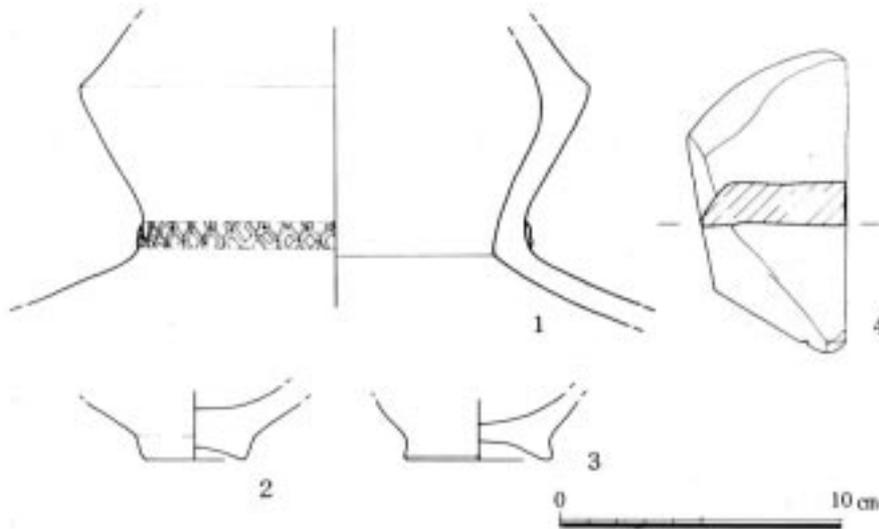
A-1地点の北東側崖面から、南西方向にのびる溝状の遺構であり、全長5.4m、上部幅90cm前後、底部幅20～30cm、深さ30～45cmを測る。

この溝状遺構に接する東西には、それぞれ平坦面がある。西側の平坦面からは、径2mほどの範囲で炭化物が検出され、東側の平坦面からは、ピットが2カ所検出されている。このうち北側のピットは径45cm、

深さ 63 cm, 南側のピットは径 35 cm, 深さ 31 cm を測る。これらが溝状遺構と関連をもっていた可能性もあるか, A-1 地点の北東側が, 現状では崖面となっているため, 遺構の全容は確認できなかった。

#### 遺物 (第 11 図)

溝状遺構内の南西寄りから若干の土器片が出土した。そのうち図示し得るものは, 口縁部から頸部にかけての壺型土器 (土器 1) である。また, すでに述べた炭化物の付近からは, 砥石とともに少量の土器片が出土しており, そのうち図示し得るものは 2 点 (土器 2・3) である。



第 11 図 溝状遺構周辺出土遺物実測図

壺形土器は, 複合口縁を呈し, 頸部には格子状の刻み目が施された貼り付けの突帯をもつ。また, 器壁の内外面には横ナデ調整が施されている。色調は明褐色で, 胎土は少量の砂粒を含み, 焼成は軟調である。

砥石は, 10 × 5 × 1.5 cm ほどの頁岩質のもので使用痕は上面と側面にみられる (第 11 図 4)

砥石付近から出土した土器は, いずれも底部のみの破片であるため, 器形は不明である。底部は凹底を呈し, 器壁は外上方にのびることが推測される。調整方法は, いずれも胎土に砂粒を多く含むため, 器壁の内外面の摩滅が著しく, 不明である。(中村)

## 4. 第 3 号土坑

#### 遺構 (第 12 図)

A-1 地点の南東部の斜面に位置するこの土坑は, 上縁は不整形で径 130 × 136 cm, 底面は平坦で径 130 × 134 cm の円形に近いプランを呈しており, 深さは最大 120 cm を測る。また, 土坑内の北寄りには, 厚さ 6 cm ほどのカキを主体とする貝層が黒褐色土をはさみ二層認められた。

#### 遺物 (第 13 図)

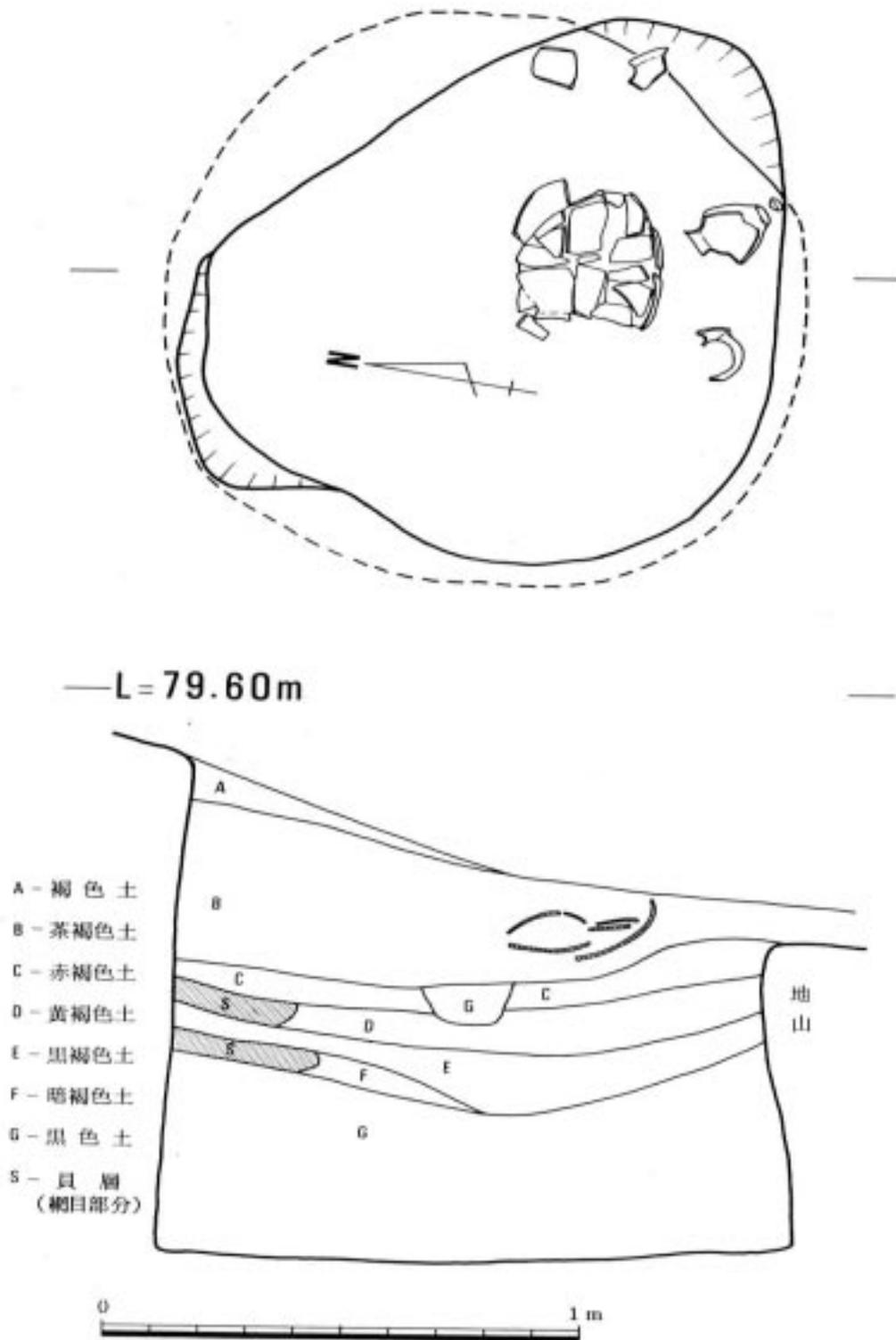
第 3 号土坑内からは, 壺形土器 (土器 1) と 2 点の甕形土器 (土器 2・3) を検出した。3 点とも摩滅が著しいため調整方法ははっきりしない。

土器 1 は, 壺形土器の破片で, 口縁部は複合口縁を呈しており, 口縁端部は丸くおさめている。色調は淡褐色で, 胎土は精選されており, 焼成は軟調である。

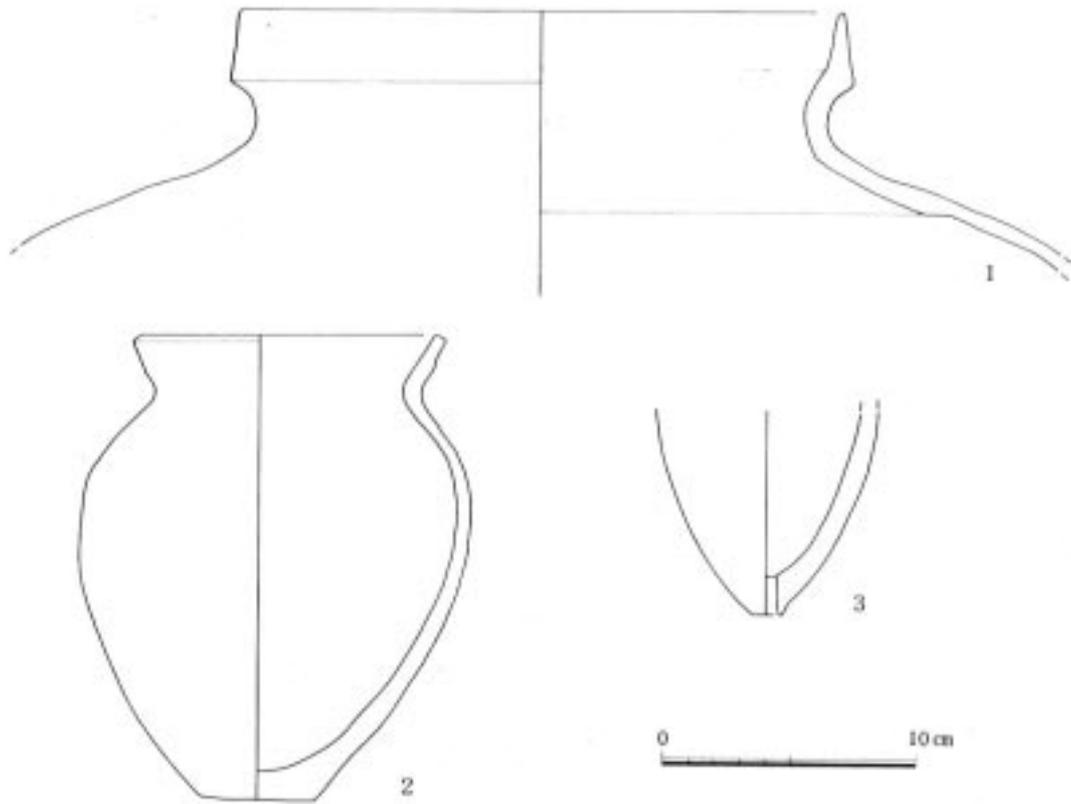
土器 2 は, 器高 18.4 cm, 口径 11.6 cm, 最大胴径は器高の上半部にあり径 15.2 cm, 底部は平底で径 4.4 cm を測る甕形土器である。口縁部はくの字に外反し, 口縁端部は平たくおさめている。色調は赤褐色で, 胎

土は細砂粒を含み、焼成は軟調である。

土器3は、甕形土器の下半で、第3号土壙の南寄りの斜面から出土したものである。底部には焼成前の穿孔がみられることから甑と考えられる。色調は褐色を呈し、胎土は精選されており、焼成は良好である。  
(橋本)



第12図 A地点第3号土壙実測図



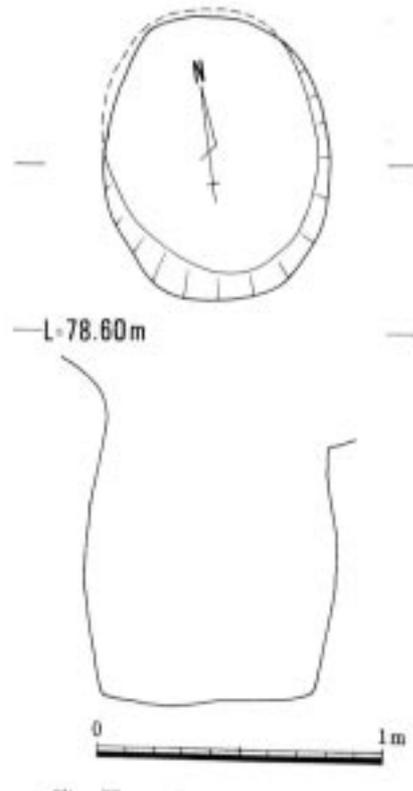
第13図 第3号土壙周辺出土土器実測図

## 5. 第4号土壙

### 遺構 (第14図)

第3号土壙の南東約4mの斜面から検出されたこの袋状土壙は、上縁径84×80cm、底径80×75cmの円形に近いプランを呈している。深さは90～75cmを測り、底面はわずかに丸みをもっている。

なお、土壙に伴う遺物は検出されなかった。(橋本)



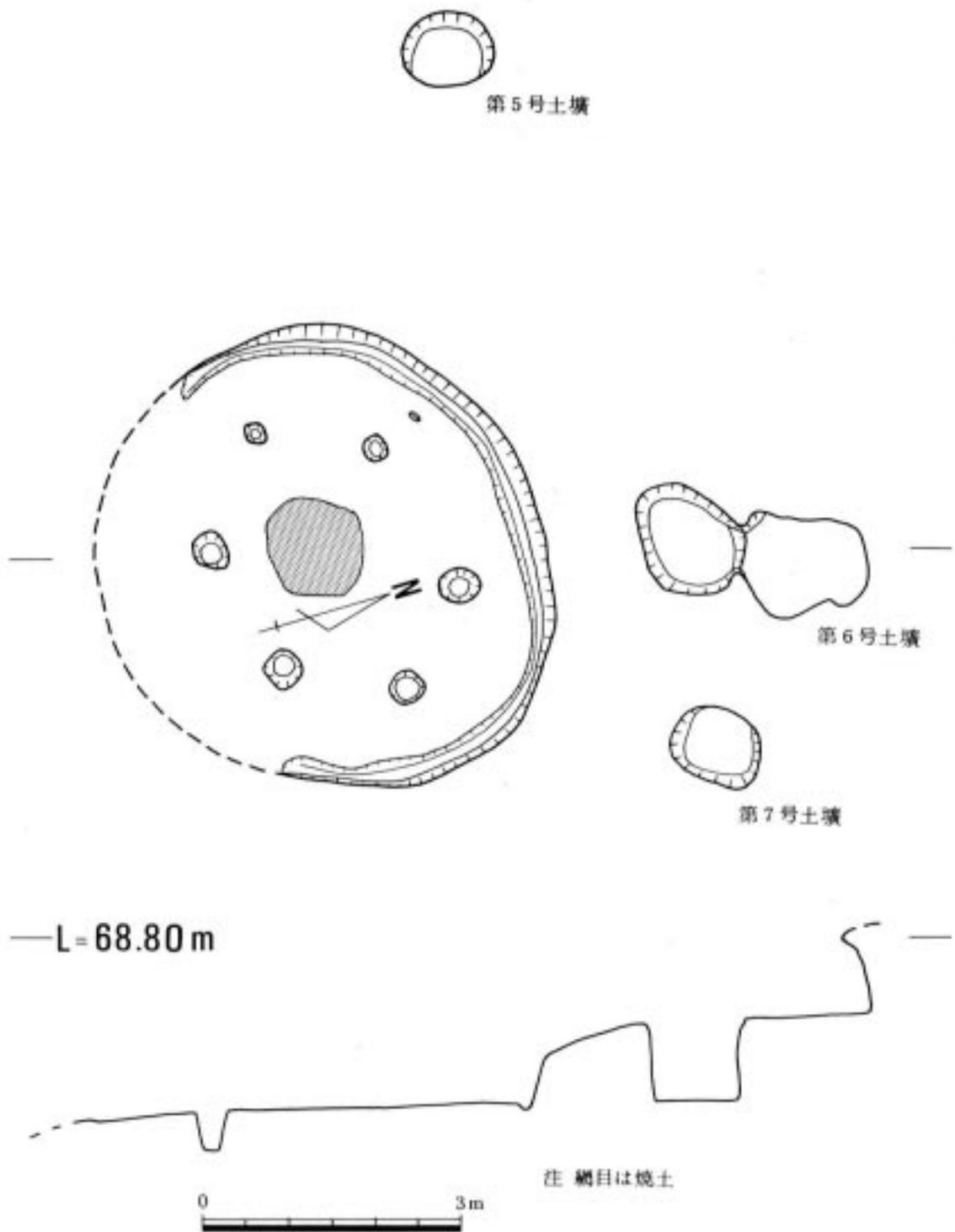
## 6. 第3号竪穴式住居跡

### 遺構 (第15図)

A-2地点の南側から検出されたこの住居跡は、地山を東西に5.6m、南北に約5.1m掘り込んだ円形に近いプランを有するものである。本住居跡は、斜面に立地しているため、壁の高さは不ぞろいで、最大壁高60cmを測る。また、ピットは6カ所見られ、径25～40cm、深さ35～70cmを測るもので、それらの規模、位置関係などからいずれのピットも柱穴と考えられる。なお、床面中央部からは径110cm

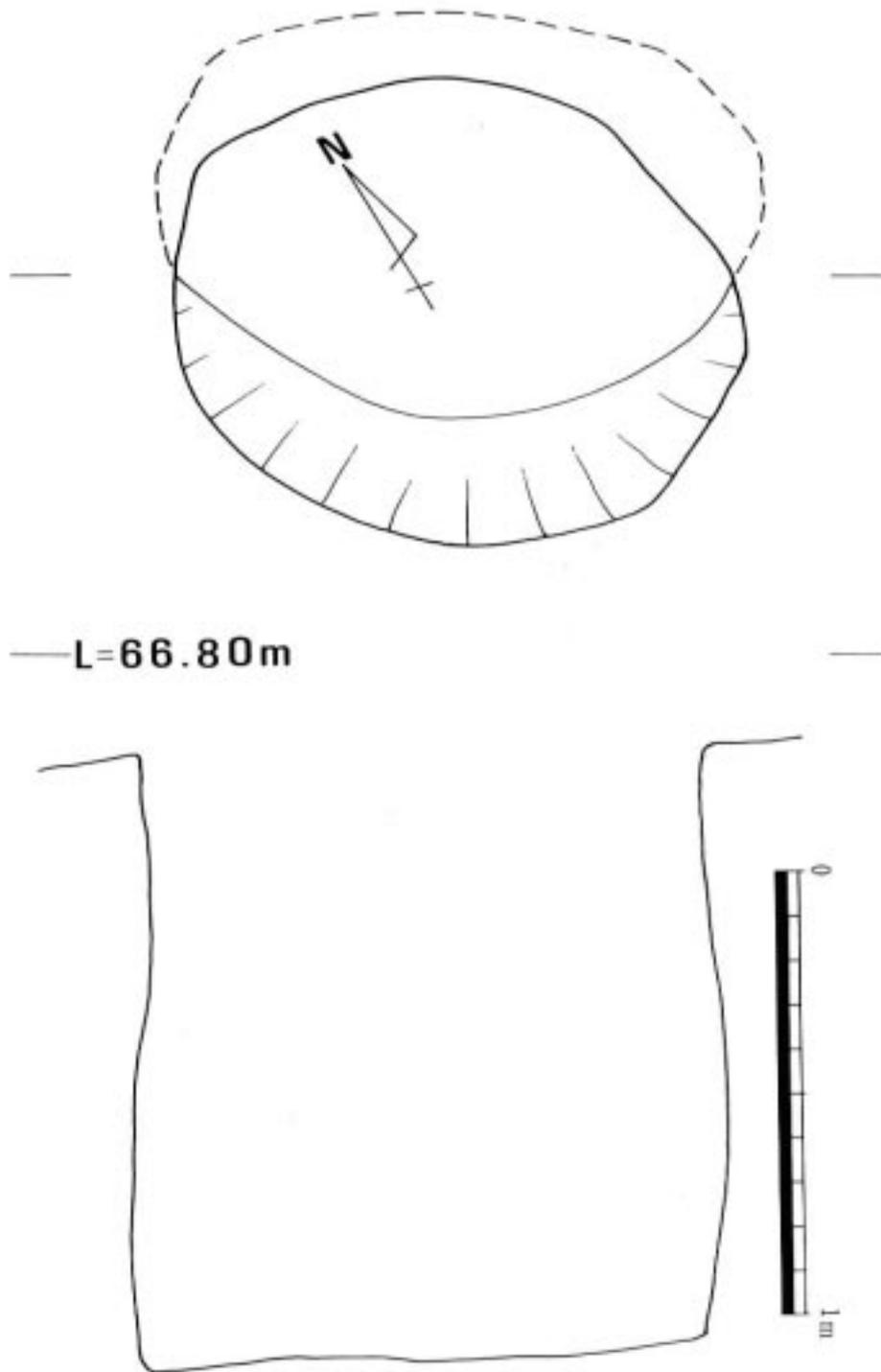
第14図 A地点第4号土壙実測図

の範囲で焼土が検出され、床面の周囲からは南側を除いて幅10～30cm、深さ5～10cmほどの壁溝が認められた。



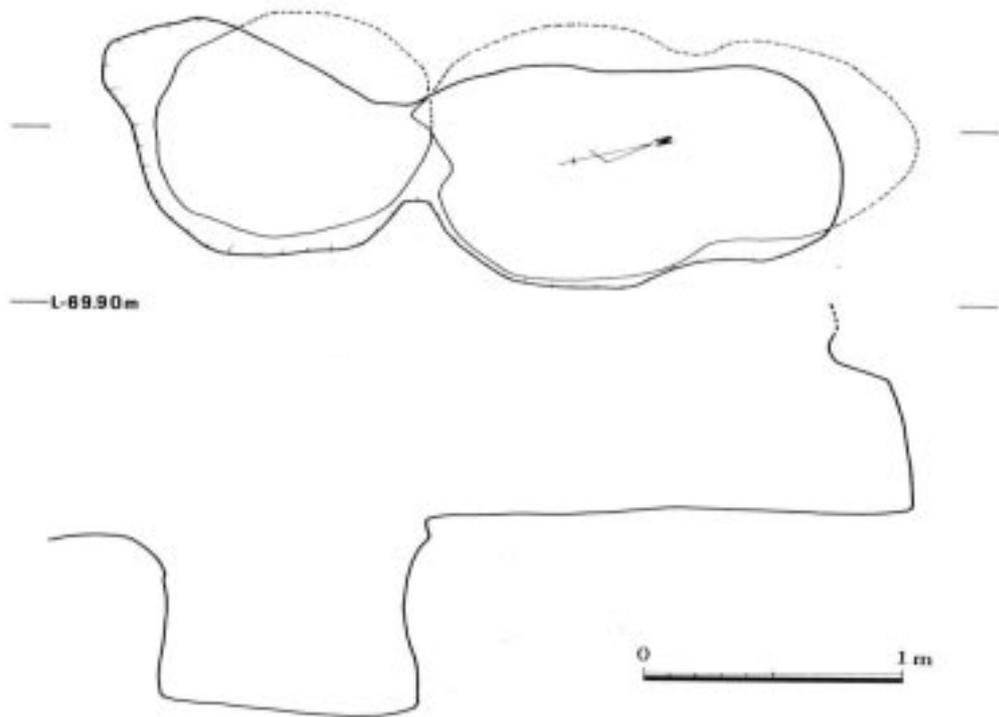
第15図 A地点第3号住居跡実測図

第3号住居跡周辺からは、第5・6・7号土壙が確認された。このうち、第5号土壙は、第3住居跡の北西約4mの斜面から検出されたもので、上縁径106×92cm、底径92×104cmの長円形のプランを呈し、深さ145～135cmを測るもので、底面はほぼ平坦である（第16図）。



第16図 A地点第5号土壙実測図

第6号土壙は、第3号住居跡の北約1.5mの斜面にあって、2基の土壙が重複してる。その切り合い関係からみて、初めに北側の土壙が造られ、後に南側の土壙が造られたことがわかる。北側の土壙の正確規模は定かではないが、上縁径160×115cm、底径200×130cm、深さは100～85cmを測る。南側の土壙は第3号住居跡の貯蔵穴と考えられ、上縁径115×105cm、底径100×115cm、深さ100～85cmを測り、底面は北に傾斜しつつわずかに丸みをもっている。なお、この土壙内には厚さ16cmのカキの堆積がみられ、貝層の上部より数片の土器片が出土した。(第17図)

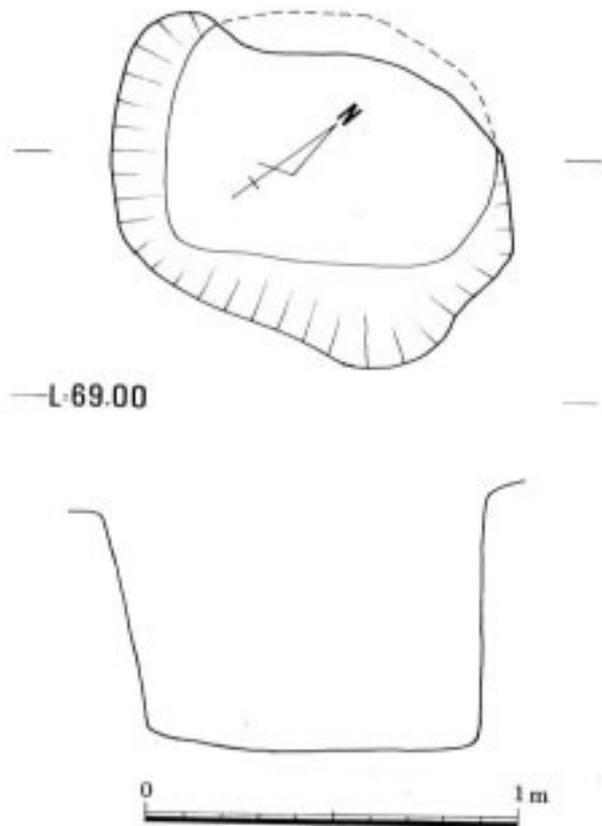


第17図 A地点第6号土壙実測図

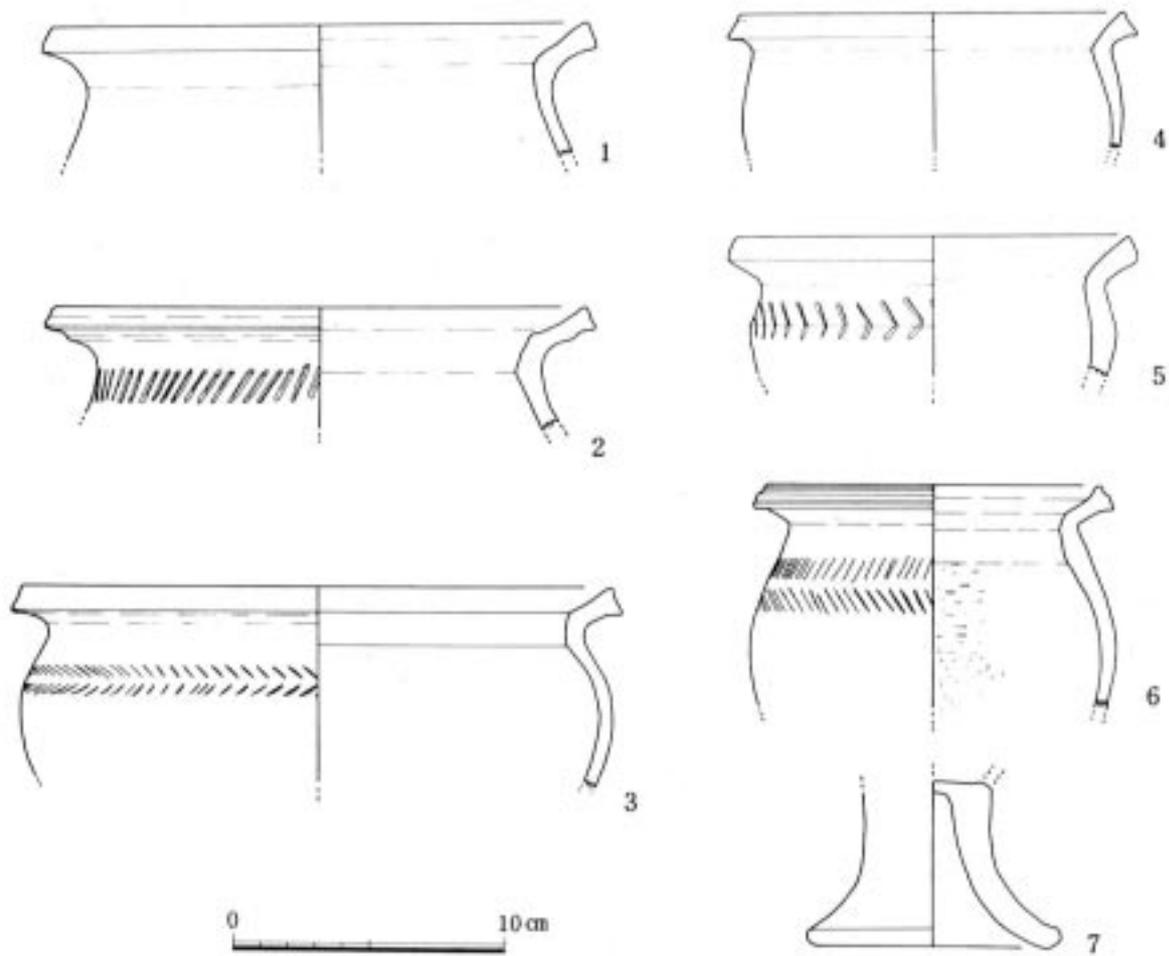
第7号土壙は、第6号土壙の東側約2mの斜面から検出されたもので、上縁径80×110cm、底径70×80cm、深さ70～65cmを測るもので、底面は南東に向かってわずかに傾斜しているが、ほぼ平坦である（第18図）。

**遺物**（第19～21図）

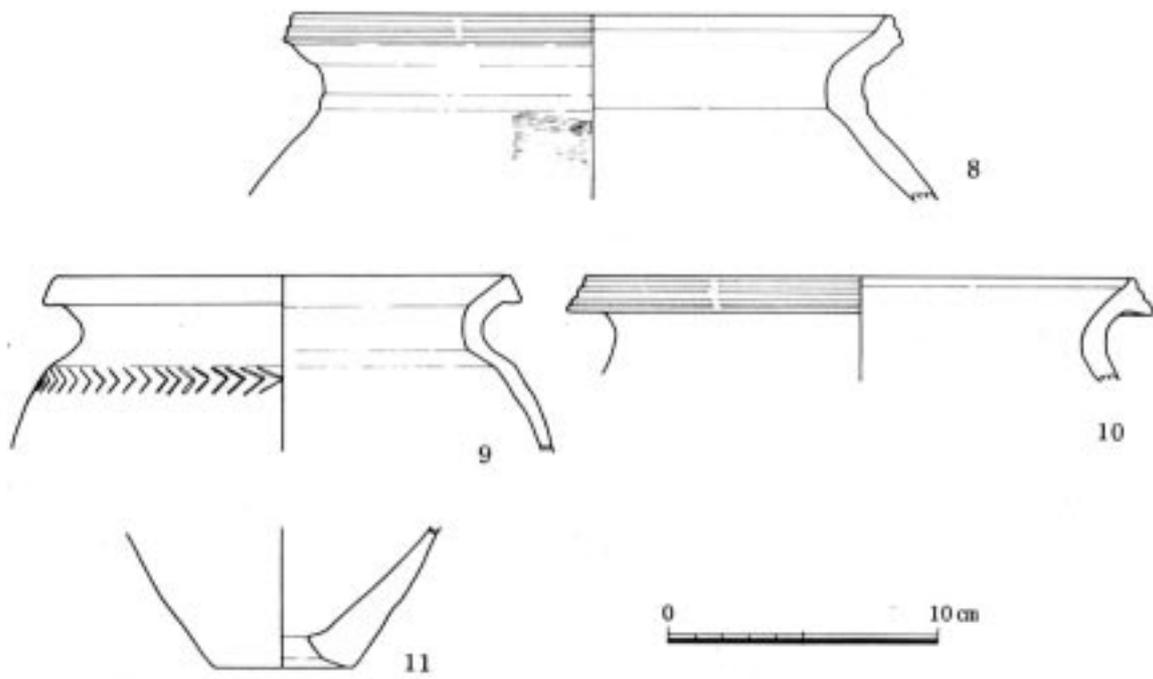
第3号住居跡に関連する遺物は、住居跡内より甕形土器4点（第19図1～4）、住居跡肩より鉄片1点、第5号土壙付近より高坏の脚部1点（第19図7）、第6号土壙内より甕型土器2点（第19図5・6）を検出した。このほか、第5号土壙の下辺から鉄斧1（第21図）、甕形土器4点（第20図8～11）を得た。甕形土器はすべて破片である。甕形土器の特徴としては、口縁部がくの字に外反し、口縁端部にいくに従って器壁を上下に肥厚させ、端部を平たくおさめているもの（土器1・3・5・9）と、1～3条の凹線をもつもの（土器2・4・6・8・10）がある。調整方法は胎土に砂粒を多く含むため内外面とも摩滅が著しく詳細は不明であるが、頸部直



第18図 A地点第7号土壙実測図



第19图 第3号住居跡関係出土土器実測図

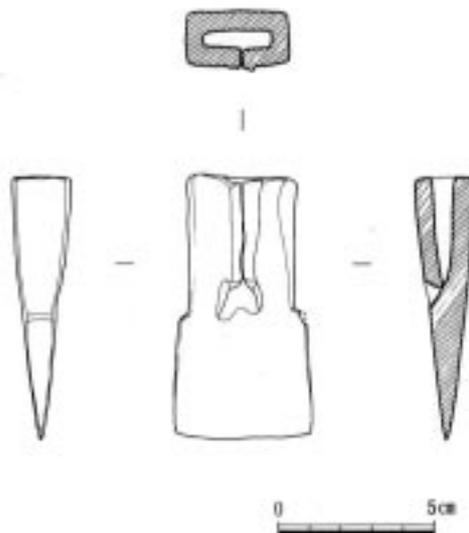


第20图 第3号住居跡周辺出土土器実測図

下にヘラ状工具による刻みを施したもの（土器2・3・5・9）、貝殻施文がみられるもの（土器6）がある。底部は、形態の明らかな土器11においては、焼成後穿孔されており甌と考えられる。

高坏は、脚部のみ出土で脚端部径9.3cmを測るもので、脚部はにぶく外皮し、脚端部にいくに従って器壁をわずかに減少させつつ丸くおさめている。また、調整方法は摩滅が著しく不明である。色調は赤褐色で、胎土は砂粒を多く含み、焼成は軟調である。

鉄斧は、鍛造の有袋鉄斧であり、全長7.2cm、刃部幅4.3cmを測る小型品である。刃部から3.2cmのところ明瞭な肩がつき、袋部は2.3×2.6cmの長方形を呈している。（橋本）

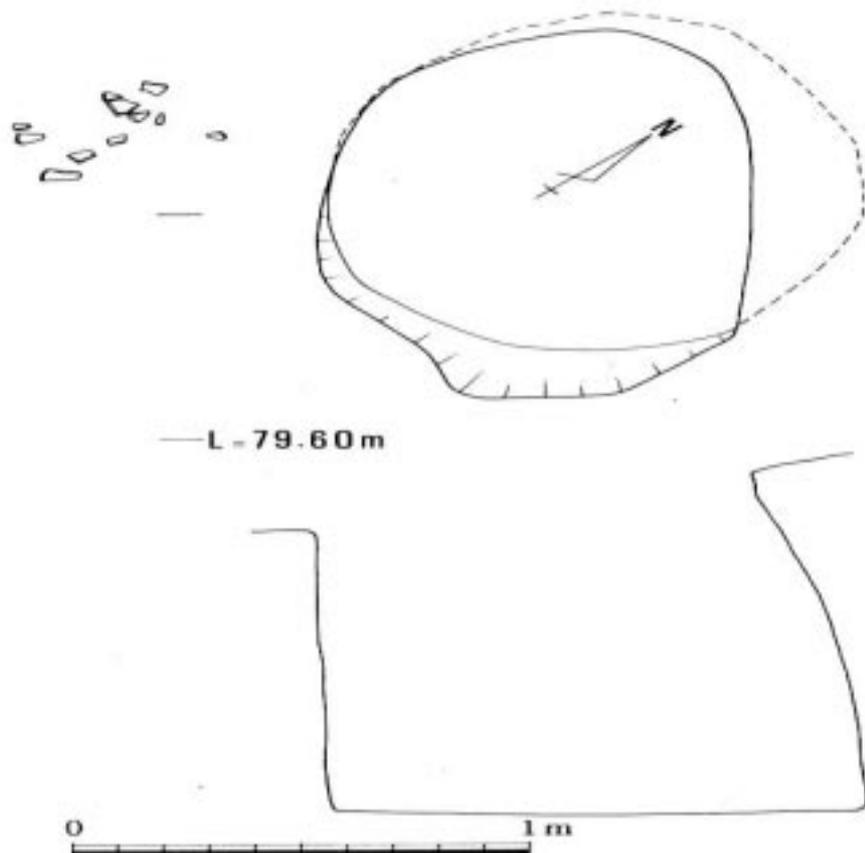


第21図 A地点出土鉄斧実測図

### 7. 第8号土壙 (第22図)

A-2地点の北東寄りの斜面から検出されたこの半袋状土壙は、上縁径130×95cmの不整形をなしている。底面はわずかに丸みを持ち、底径120×115cmの円形に近いプランを呈し、深さは120～100cmを測る。

なお、土壙外からは若干の土器小片を得たものの、土壙内から遺物は検出されなかった。（橋本）

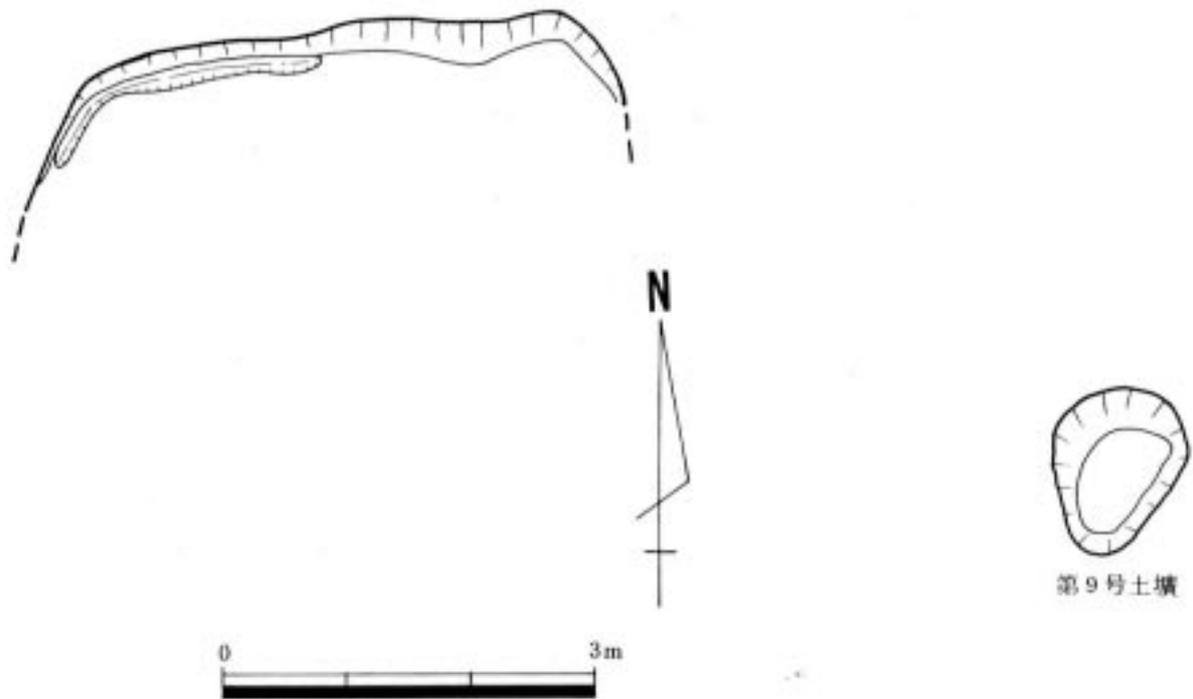


第22図 A地点第8号土壙実測図

## 8. 第4号竪穴式住居跡

### 遺構 (第23図)

A-2地点の北西側、標高71.6mの場所に位置するこの住居跡は、急傾斜に立地しているため部分的にしか確認できなかった。規模・柱穴などは明らかではないが、北寄りで最大壁高45cmを測るもので、床面の北西寄りには幅約15cm、深さ5cmほどの壁溝が見られた。南寄りについては北側で検出した床面と同一レベルで赤土層が検出されたため、盛土によって造られたものと考えられる。



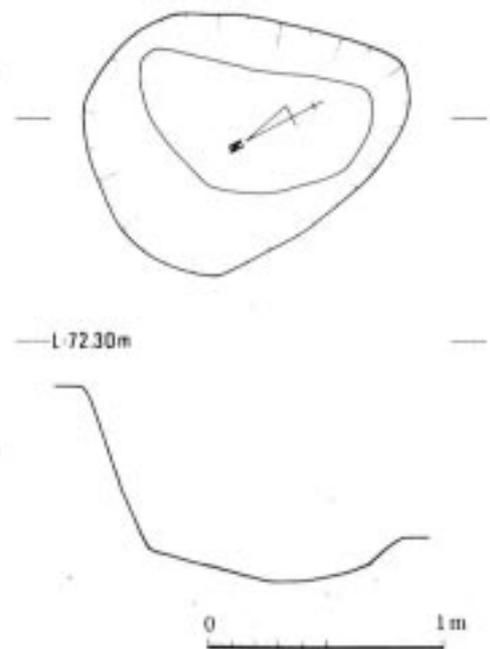
第23図 A地点第4号住居跡実測図

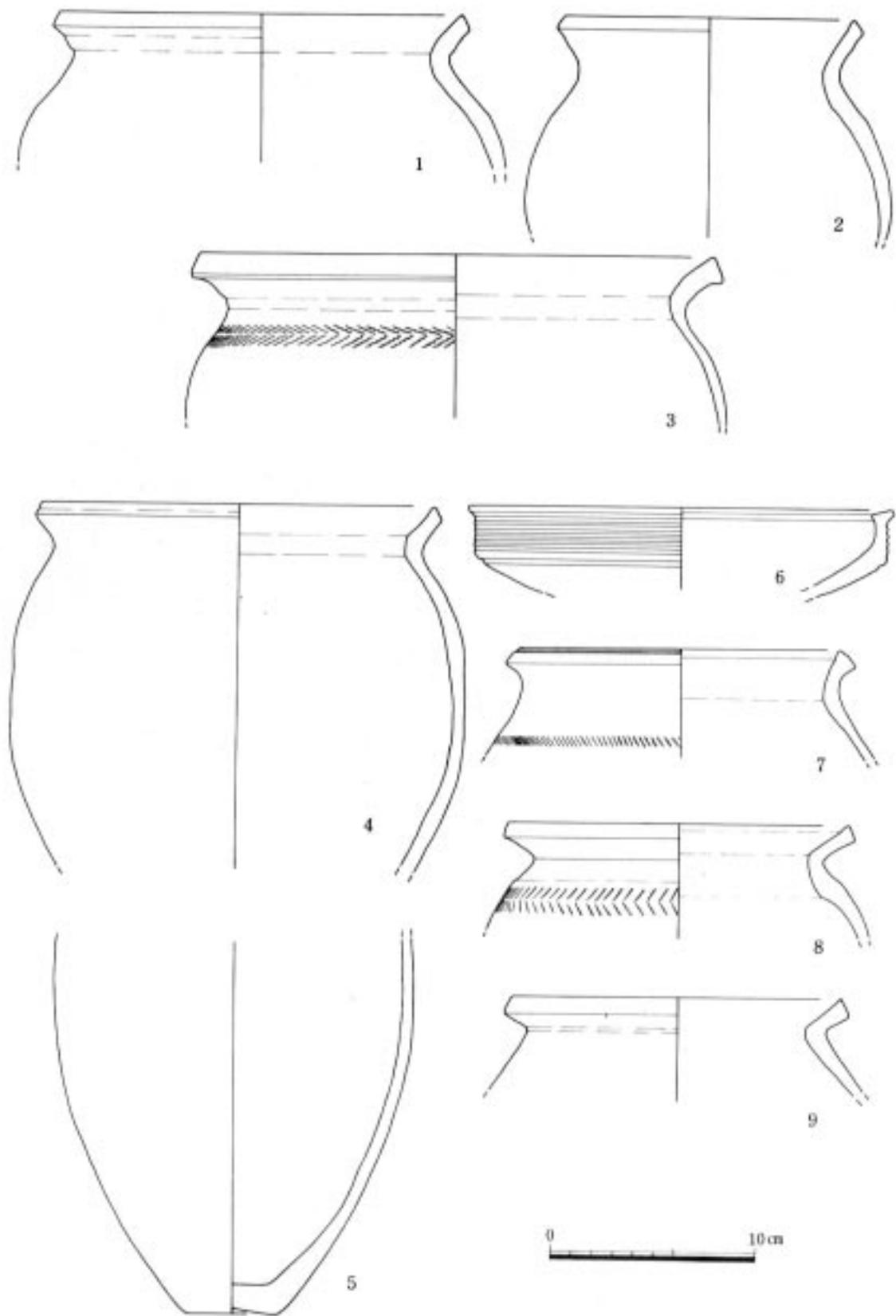
また、第4号住居跡の東約4mの斜面から、第4号住居跡に付属する貯蔵穴と考えられる第9号土坑が検出された。

土坑の上縁は径135×105cm、底面は南にわずかに傾斜しているがほぼ平坦で径100×50cm、深さは最大で60cmを測る。

### 遺物 (第25・26図)

第4号住居跡の床面及び第9号土坑付近から多量の土器片が出土した。このうち器形を推定し得るものは、住居跡内の2点(土器5・9)を含む10点である。10点の器形の内訳は、土器6が高坏であるほかは、すべて甕形土器である。甕形土器は、完形に近い土器10を除けば破片であり、くの字状の口縁をもち、口縁端部に1~2条の凹線をもつもの(土器4・7)と平坦なものがある。また頸部直下に、貝殻文またはへら状工具により施文をめぐらしたも(土器3・7・8)られる。調整方法 第24図 A地点第9号土坑実測図

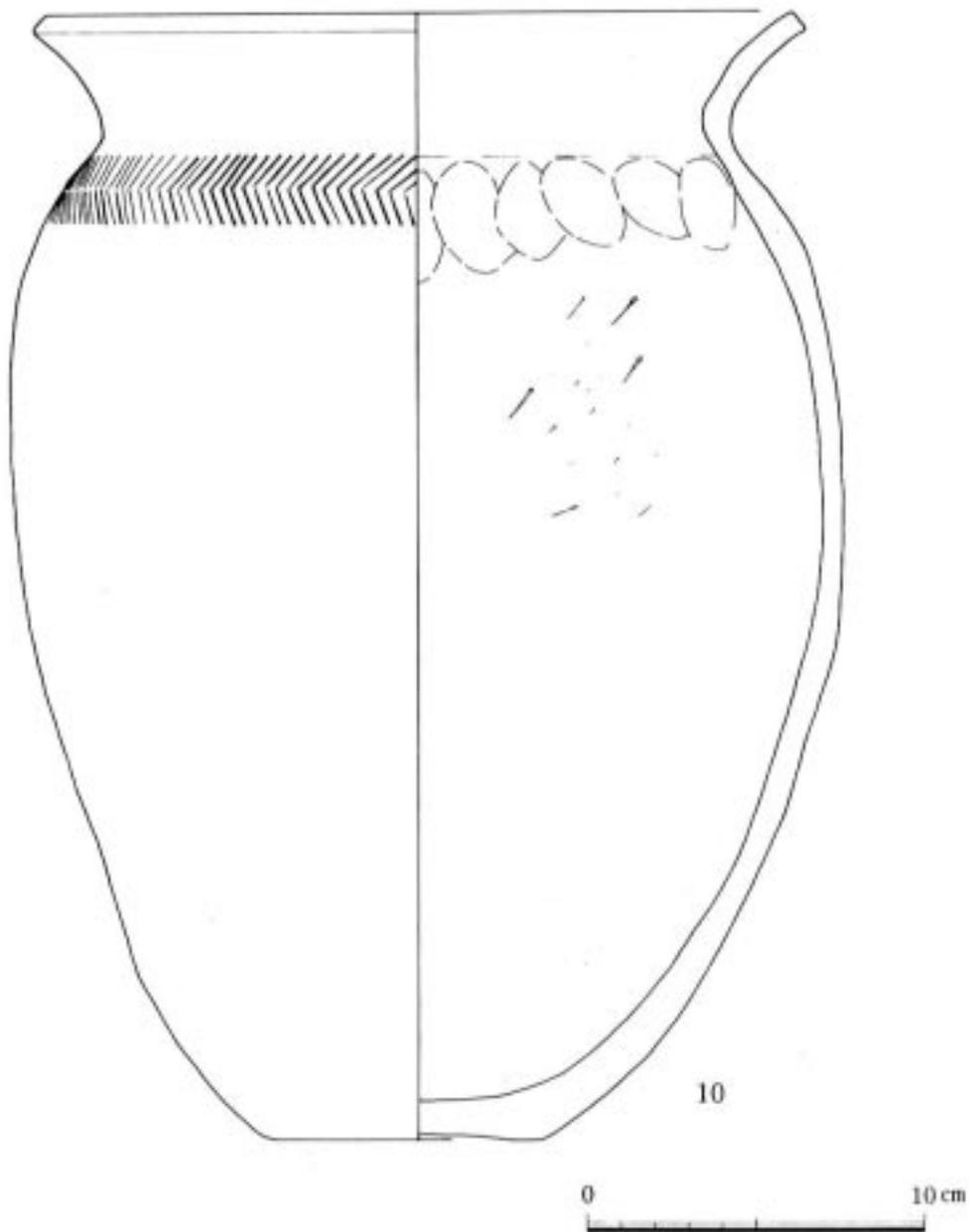




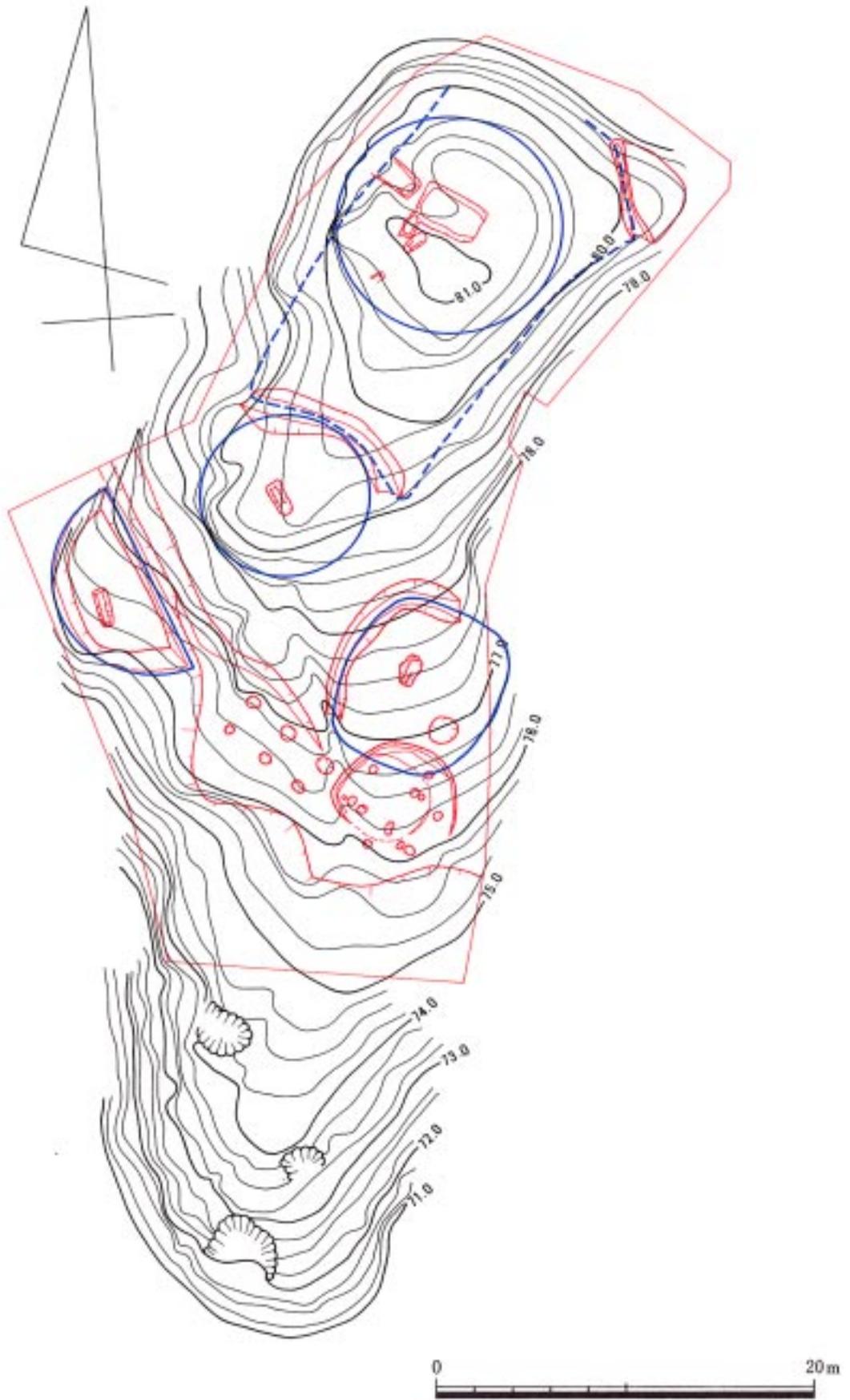
第25図 第4号住居跡及び第9号土壙周辺出土土器実測図

については、胎土に砂粒を多く含んでいるため、器壁の内外面とも摩滅の著しいものが多く、詳細は把握し得ない。しかしながら、全体的には口縁部の内外に横ナデ、胴部においては、外側にクシ歯状工具によるナデ、内側にヘラ削りを施したものと考えられる。底部は形態の明らかな土器5・10ともわずかに凹底を呈している。

高坏は、口径20.6cmを測る口縁部から坏部にかけての破片である。口縁部はまっすぐに立ちあがり、口縁端部は内外両面に肥厚し、平坦である。また、口縁部には5条の凹線がめぐらされている。器壁の内外面とも摩滅が著しいため、調整方法の詳細は不明である。色調は外面黄褐色、内面は桃色を呈し、胎土は石英・長石の細砂粒を含み、焼成は良好である。(中村・橋本)



第26図 第4号住居跡周辺出土土器実測図



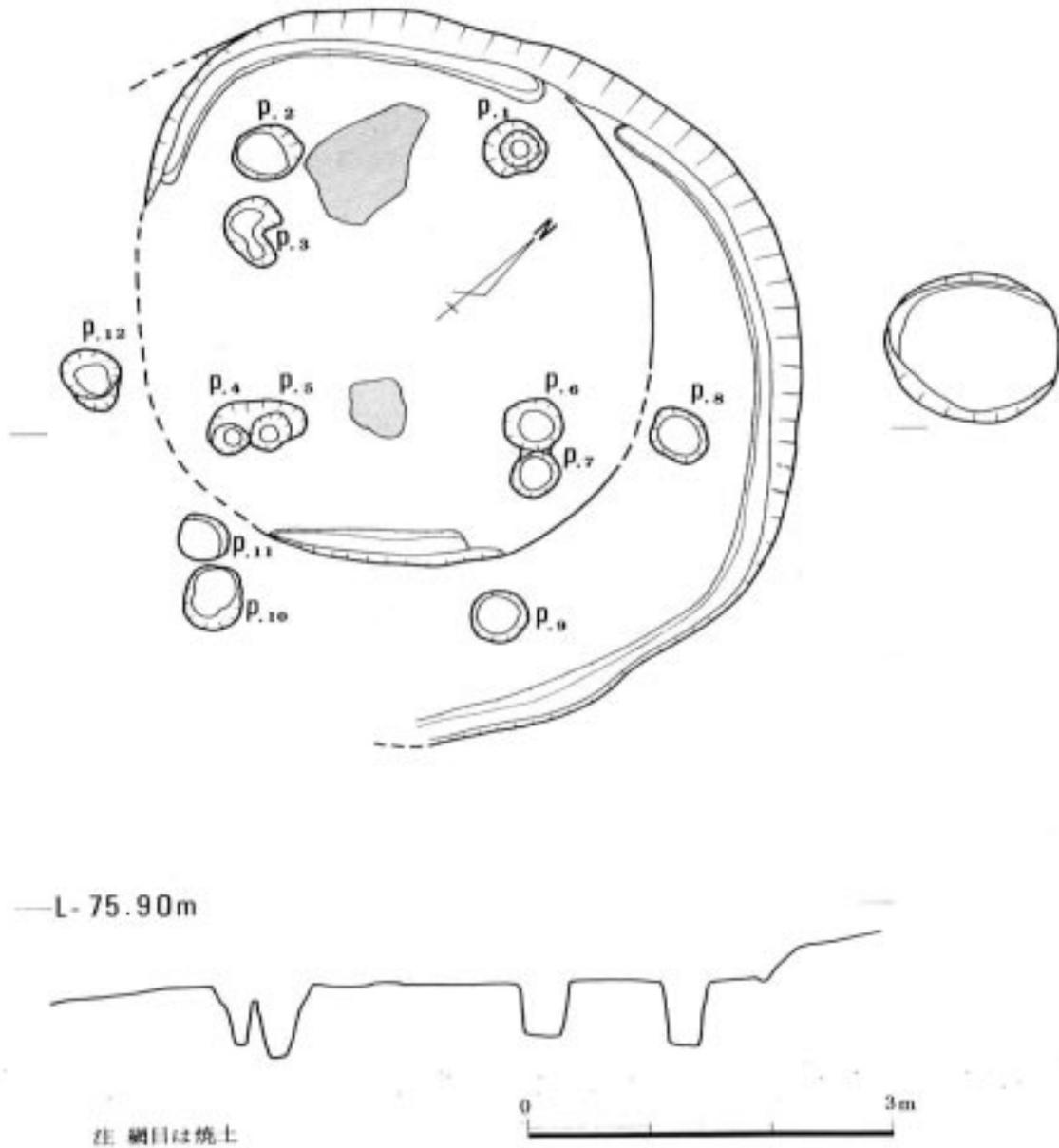
第 27 图 B 地点遺構配置図

## IV B地点遺跡の概要

B地点は試掘の結果、石棺の存在が確認されていた。現状観察により、尾根鞍部より先端部にかけて遺構が存在することが推定されたため、尾根線を中心に東西に分け、さらに各々6区の発掘区を設定し、必要に応じて拡張を行ない、最終的には全面排土を実施した。その結果、竪穴式住居跡2基、高床式住居跡1基、墳丘墓1基、古墳4基が検出された（第27図）。

### 1. 第1・2号竪穴式住居跡

遺 構（第28図）



第28図 B地点第1・2号住居跡実測図

第1・2号住居跡は、B地点の南側、南にのびる尾根の傾斜面に重複して位置している。このうち、第1号住居跡は、北西-南東方向5m、北東-南西方向推定4.2mの長円形のプランを呈する住居跡である。柱穴と考えられるピットが7カ所あり、北からP1~P7とした。P1・P2・P5・P6は径40~50cm、深さ55~70cmを測り、他の3個に比して一回り大きい柱穴である。これに加えて柱穴の配置から、第1号住居の上屋施設は、基本的には4本柱によって構築されていたものと考えられる。他の3本については、副柱として補なわれた可能性が強い。

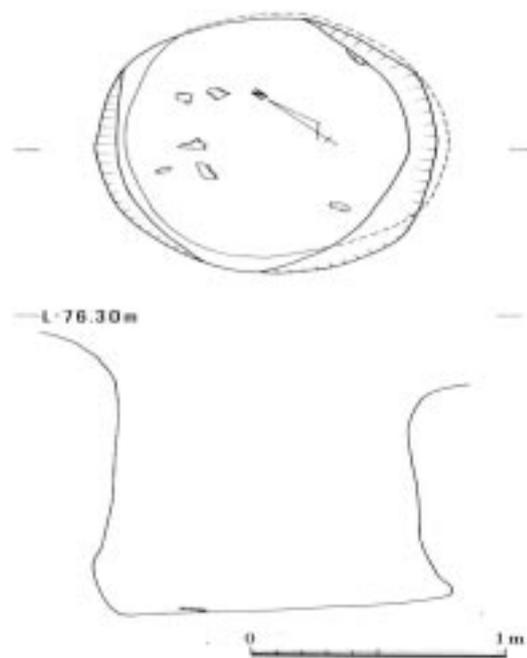
第2号住居跡は、北西-南東方向6.5m、北東-南西方向推定6.8mの円形のプランを呈する住居跡である。第1号住居跡外に、5個の柱穴と考えられるピットがあり、東からP8~P12とした。これらの柱穴の大きさは、第1号住居跡の4個の支柱とほぼ同一である。これに加えて柱穴の配置から、第2号住居の上屋施設は、P8・P9・P10・P12に、第1号住居跡内のP1・P2を加えた6本柱によって構築されていたものと考えられる。また、P11と第1号住居跡内の他の柱穴は、第2号住居の副柱として利用された可能性がある。

第1・2号住居跡の壁高は、北側で最高70cmを測るが、住居跡の立地の関係上、南に向うに従って低くなり、南側においてはまったく見られなくなる。また、第1・2号住居跡の北西側、第1号住居跡の南東側、第2号住居跡の北側から南側にかけて、幅10~20cm、深さ3~4cmの浅い壁溝がみられる。壁溝は、南東側で2重になっており、柱穴には双方に兼用されているものがあることから、第1号住居を建て替え、拡張して、第2号住居を構築したことがわかる。

住居跡内からは、多量の土器片が出土し、焼土も2ヶ所検出されている。なお、住居跡の北東側1mの場所から、第1号あるいは第2号住居跡に付属する貯蔵穴と考えられる第1号土壙が検出された。第1号土壙は、上縁径135×140cm、底径130×135cmのほぼ円形を呈しており、深さは150~115cmを測る(第29図)。

#### 遺物(第30図)

第1・2号住居跡内からは多量の土器片が検出されたが、小片が多く、器形を推定できるのは2点のみである。そのほか住居跡の埋土中から、土製品が1個検出されている。また、第1号土壙内からは若干の土器片が検出された。そのうち器形を推定できるものは3点である。これらはすべて甕形土器の破片である。住居跡内出土の土器の器形は、甕形土器(土器1)と壺形土器(土器2)であり、いずれも完形に近いものである。土器1は、口径11.1cm、器高14.6cmを測る。口縁部はくの字状に外反するが、上方においてはわずかに折り曲げており、口縁端部はまるくおさめられている。胴部はあまり張っておらず底部はわずかに凹底を呈している。

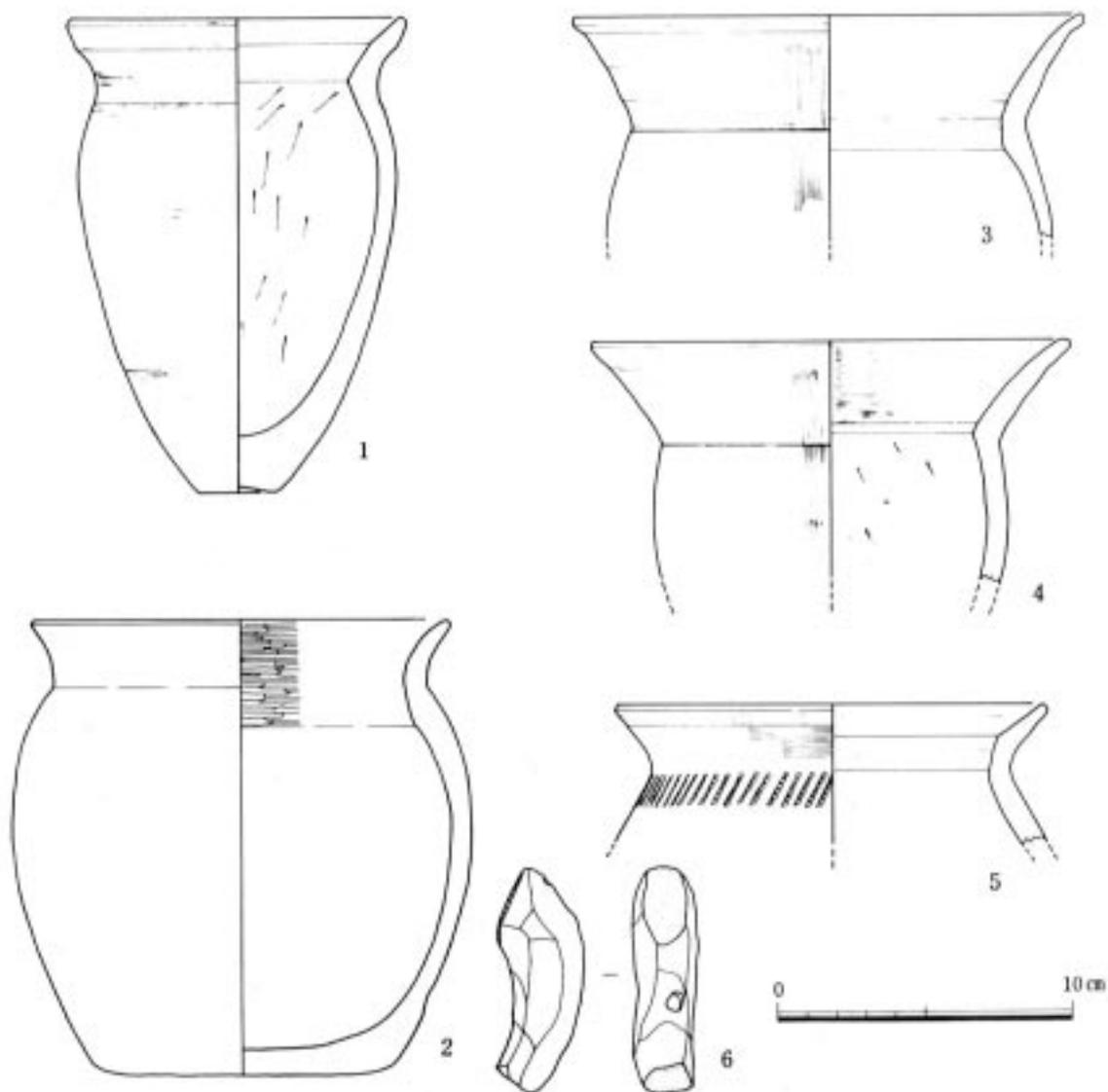


第29図 B地点第1号土壙実測図

胴部内面にはヘラ削り，口縁部内面から胴部外面にわたり，ナデ調整が施されている。色調は外面褐色，内面暗黒褐色で，胎土は砂粒を多く含み，焼成は良好である。土器2は，口径14.1cm，器高14.0cmを測る。口縁部はくの字状に外反し，口縁端部にいくに従って厚みは減少し，端部はまるくおさめられている。胴部はあまり張っておらず，底部は平坦である。口縁部には，ヘラ状工具によるナデが認められるが，内外面とも摩滅が著しいため調整の詳細は不明である。色調は黒灰色で外面はススが付着している。胎土は良好であり，焼成はやや軟調である。

土壙内出土の土器はいずれもくの字状の口縁をもち，口縁端部に行くに従って厚みは減少する。口縁端部がまるくおさめられているもの（土器3・4）と平坦なものがある。また，頸部直下にクシ歯状工具により施文をめぐらしたもの（土器5）がある。いずれも外面にハケ調整が施され，内面においては，口縁部に横ナデ調整がみられ，頸部以下にヘラ削り痕が認められるもの（土器4）がある。

土製品は，長さ6.3cm，幅1.4～2.6cmを測るもので，わずかに湾曲し，両端を欠しているため本来の形状，用途とも不明である。（中村）

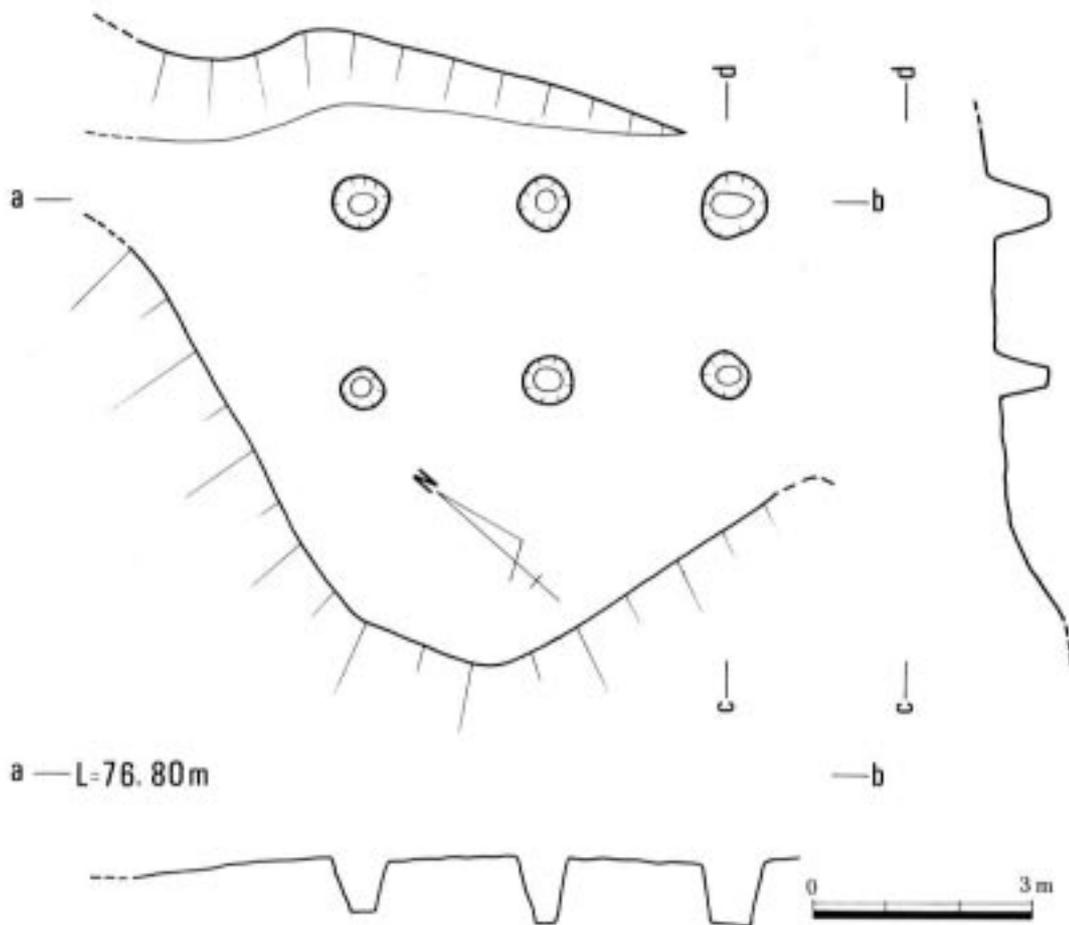


第30図 B地点第1・2号住居跡・第1号土壙内出土土器実測図

## 2. 第3号高床式住居跡

### 遺 構 (第31図)

竪穴式住居跡の西側平坦部から、6個のピットが検出された。このピットは、径57～85cm、深さ62～85cmを測り、かなり大きいものであることから柱穴と考えられる。この柱穴は、N41°Wの方向に3個つ2列に並んでおり、2列の柱穴は各々対応する。N41°W方向の柱穴間の間隔は約250cm、2列間の間隔は約200cmを保持している。このような柱穴の位置関係及び床面が竪穴式住居跡ほど平坦ではないことから、1間×2間の掘立柱系の高床式住居を想定することが可能である。



第31図 B地点第3号住居跡実測図

### 遺 物 (第32図)

本遺構に伴う遺物としては、北東の柱穴から少量の土器が出土している。そのうち器形を推定し得るものは甕形土器(土器1)と壺形土器(土器2)の2点である、甕形土器は、口縁部から胴部かけての破片である。口縁部はくの字状に外反し、口縁端部に行くに従って厚みは減少し、端部はまるくおさめられている。頸部直下には粗雑な波状文が施されている。波状文直下にはハケ目が施され、胴部内面にはヘラ削りの痕跡が認められる。口縁部内面から胴部の施文部にかけてナデ調整が施されている。壺形土器は口縁部のみ破片である。口縁部は、ほとんど直立気味に外上方へのび、端部はまるくおさめられている。外面には横ナデ調整が施され、内面にはヘラ削りの後、ヘラ磨きが施されている。(中村)

### 3. 墳丘墓

#### 外 観

この墳墓は、本丘陵の最高所、標高約81mの場所に位置し、尾根の前後をそれぞれ1条の溝状遺構で断ち切った20×12mほどの方形区画の墓域を占有している。

内部主体としては3カ所があり方形区画のほぼ中央に土壇1基と箱式石棺2基が認められる。また、溝状遺構のうち東寄りの1条は長さ6m、上部幅60cm、深さは最大で50cmを測り、南西寄りの1条は長さ10m、上部幅1.5m、深さは最大で80cmの規模をもつものである。これらの溝状遺構の底面および方形区画の東から南にかけての裾部からは、地山直下に弥生式土器が見出される。

#### 内部主体

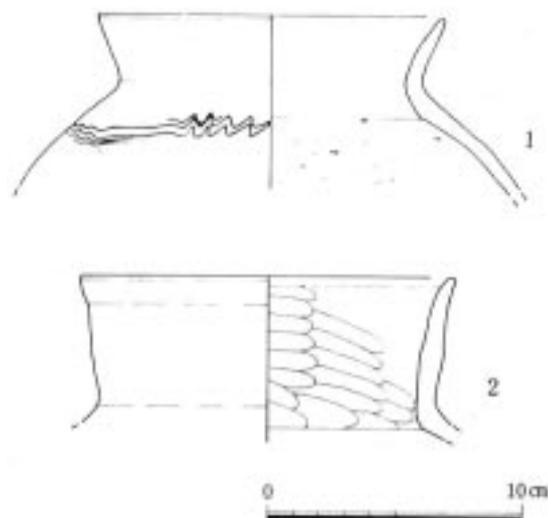
A主体は方形区画の中央やや北寄りから検出された土壇で、北東部を後述する粘土槨のために欠失している。本土壇は主軸をN40°Eに向けており、現存規模は長さ120cm、幅75cm、深さ約30cmを測るもので、その掘り方より構築当時は、箱式石棺が据えられていたものと思われる（第33図）。

B主体は土壇の南東に隣接して検出された箱式石棺で、本遺跡発見のきっかけになったものであるが、大半の石材を欠失しており、残存する石材は5個にすぎない。本石棺は、主軸をN62°Eに向けており、南側の内法の幅は25cm、深さ約20cmを測るが、他の部位は不明である。しかしながら、その掘り方から推測すると内法の長さ約90cm、北側の幅30cmほどの小型な石棺になる（第34図）。

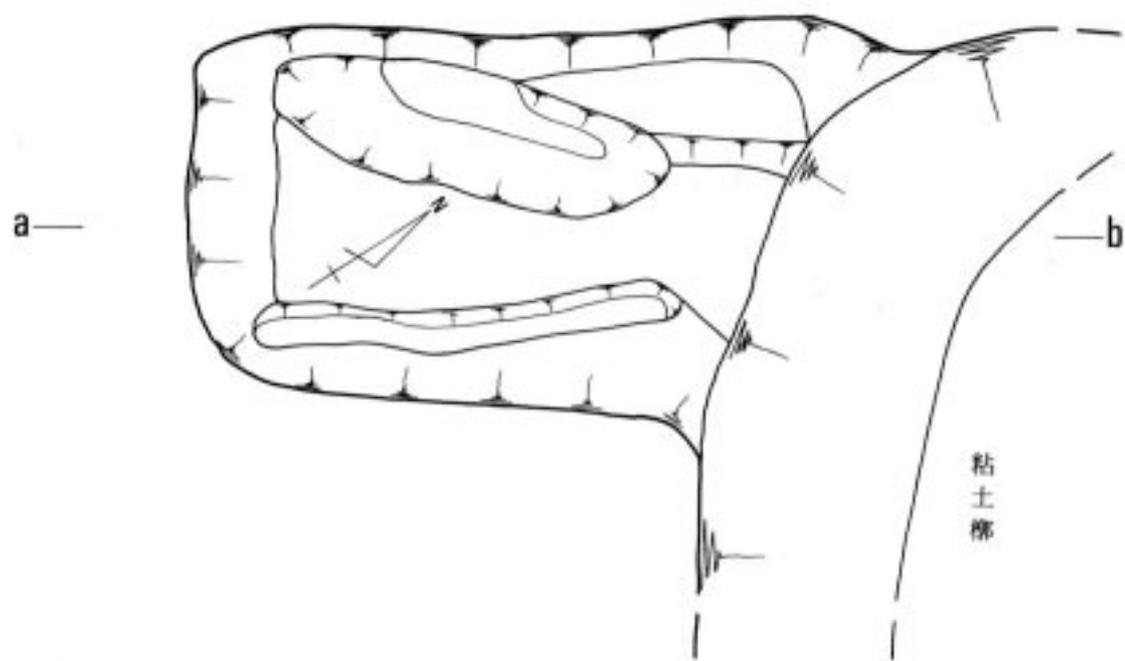
C主体はB主体の南西3mほどの場所から検出された箱式石棺で、B主体と同様、大半の石材を欠失しており、残存している石材は3個にすぎない。また、その掘り方も明瞭でないため、本石棺の規模の詳細は明らかでない（第35図）。

#### 遺 物（第36～38図）

本遺跡に伴う遺物は、既に述べたように周溝内より土器4点、墳丘の南から東にかけての裾部から土器15点と土製品1点が検出された。19点の土器の内訳は、土器15が鉢形土器、土器2・4・5・17が壺形土器であるほかは全て甕形土器で、土器15・17はほぼ完形であるが、残りは破片である。土器は複合口縁のもの（土器2・4・5）、口縁端部に凹線をもつもの（土器6～8・12・13）、平坦なもの（土器11・14・15・18）、丸いもの（土器1・9・10・17・19）がある。調整方法については、胎土に砂粒を多く含んでいるため摩滅がみられるものが多く、詳細は把握しがたいが、全体には、外面から頸部内面までは横方向にナデ調整、頸部内面以下はヘラ削りを施したものと考えられる。また、頸部直下にヘラ状工具又はクシ歯状工具によって施文したもの（土器2・8）、頸部に貼付突帯をもつもの（土器4・5）、胴部の一部にススの付着がみられるもの（土器15・17・20）、部分的に黒変のみられるもの（土器6・10・14）があり、底部についてみると、平底を呈するもの（土器3・15・17）、わずかに凹底を呈するもの（土器20）などがある。

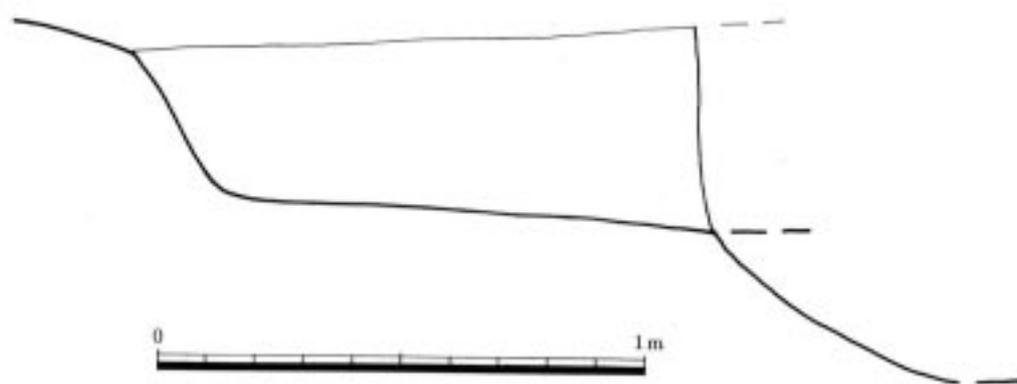


第32図 B地点第3号住居跡北東隅  
柱穴内出土土器実測図



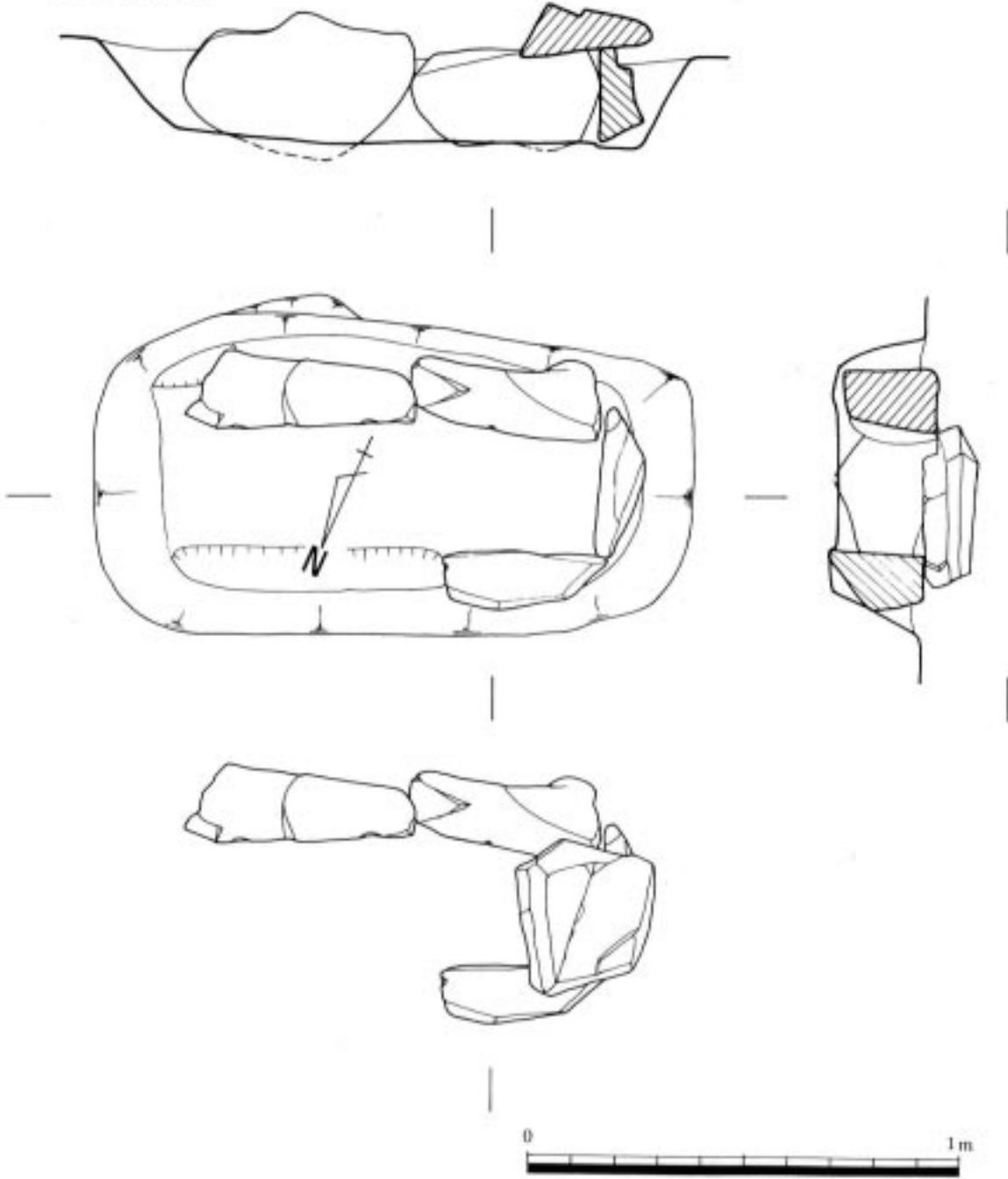
a—L=80.70 m

—b



第33图 B地点墳丘墓A主体实测图

—L=81.00m



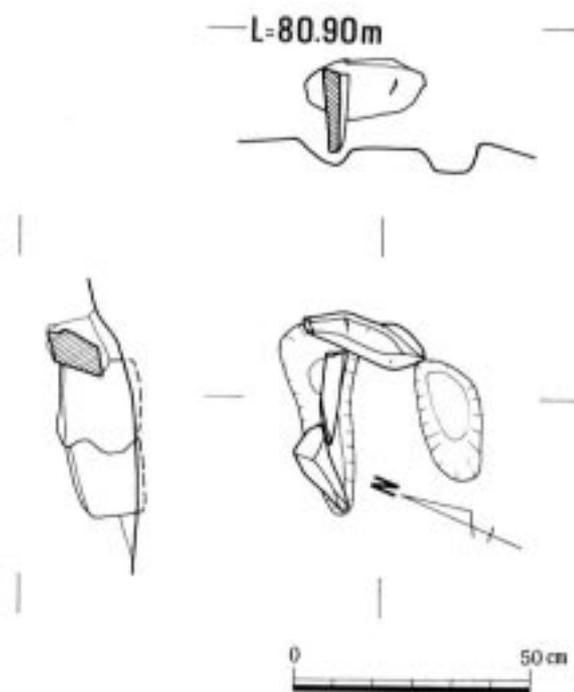
第34图 B地点墳丘墓B主体实测图

土器 15 は、器高 13.2 ~ 12.2 cm, 口径 16.6 cm, 底径 4.0 cm を測る鉢形土器である。口縁部は口縁端部にいくに従って器壁をわずかに減少させつつ、端部は平たくおさめている。調整方法は、胴部外面をヘラナデ調整、口縁部は内外面とも横方向のナデ調整、胴部内面はヘラ削りを施した後ナデ調整を行なっている。色調は赤褐色で、部分的にススの付着がみられ、胎土は若干の砂粒を含み、焼成は良好である。

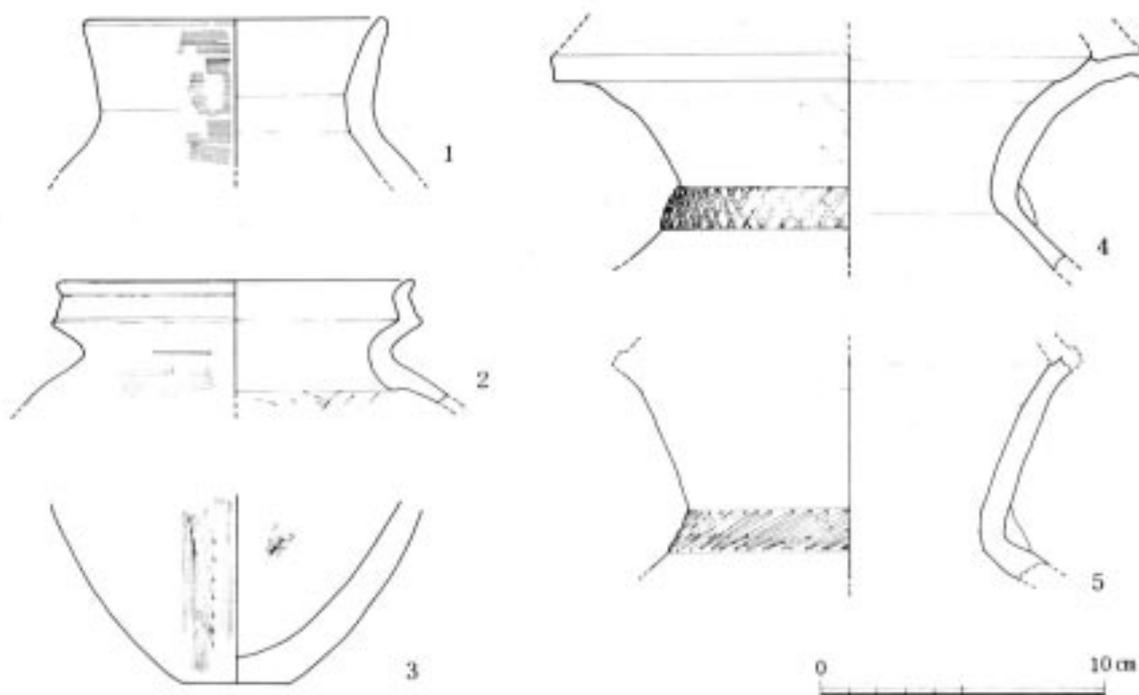
土器 17 は、器高 34.0 cm, 口径 14.7 cm, 器高の 1/2 で最大胴径 23.5 cm, 底径 5 ~ 2 cm を測る壺形土器である。口縁端部にいくに従って器壁をわずかに減少させつつ、端部は丸くおさめている。調整方法は、外面から頸部内面にかけて横方向のナデ調整、底部および頸部内面はヘラナデ調整、胴部内面の頸部以下はヘラ削りを施した後ナデ調整を行っている。また、頸部から

胴部内面にかけて幅 1.9 m のクシ歯状工具で縦方向に調整を施している。色調は淡明褐色で、部分的にススの付着がみられ、胎土は若干の砂粒を含み、焼成は良好である。

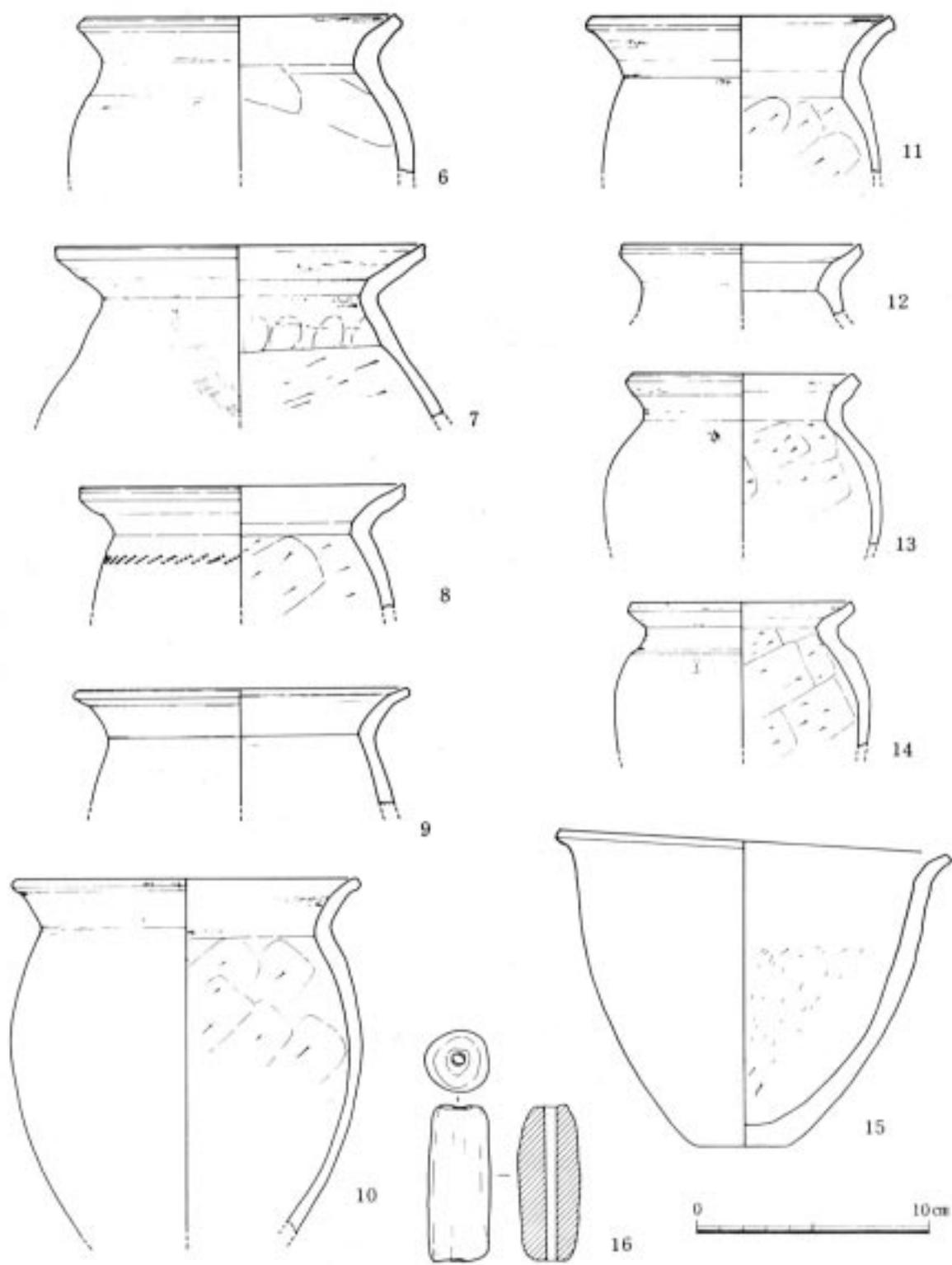
土製品は、長さ 6.5 cm, 最大径 2.6 cm, 孔径 0.5 cm を測る。色調は明褐色で、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。この土製品は、その形状等から土錘ないしは土製管玉と考えられる（第 38 図, 16）（橋本）



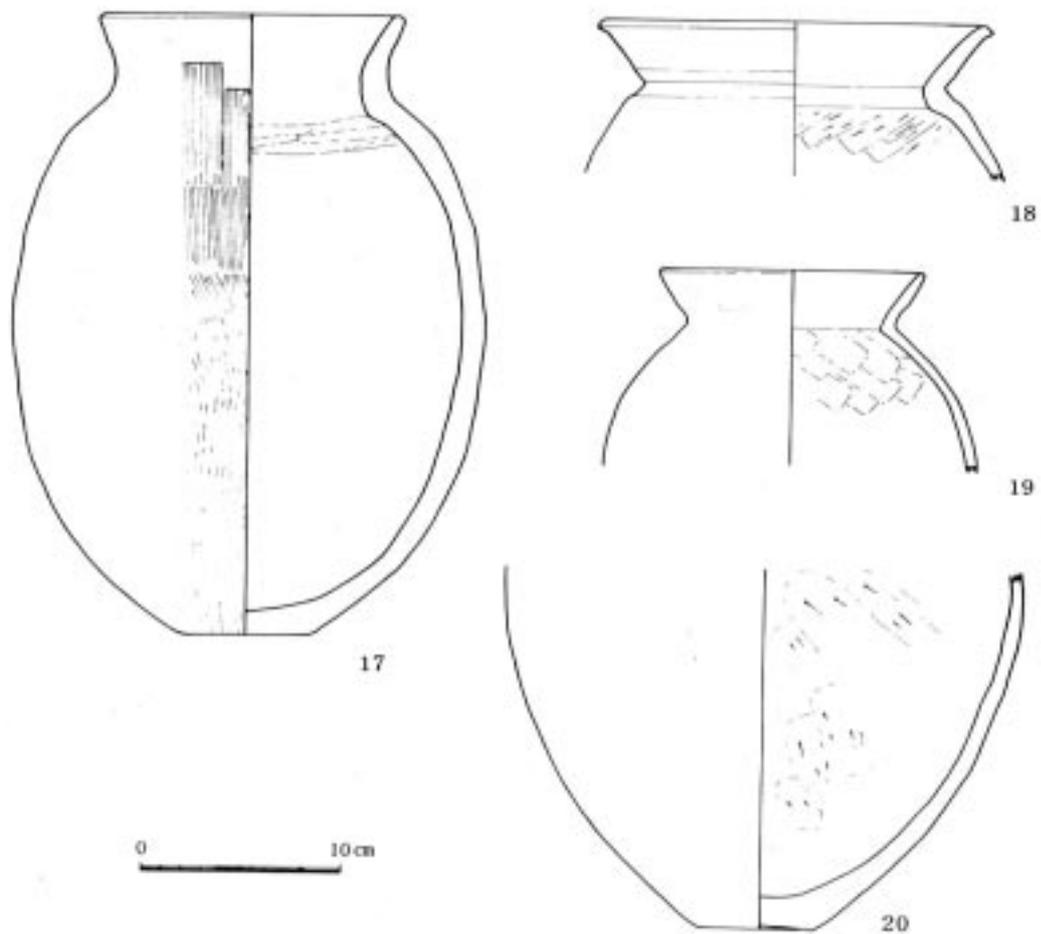
第 35 図 B 地点墳丘墓 C 主体実測図



第 36 図 墳丘墓東側墳丘裾出土土器実測図



第37图 墳丘墓南側墳丘裾出土土器実測図



第 38 図 墳丘墓溝状遺構出土土器実測図

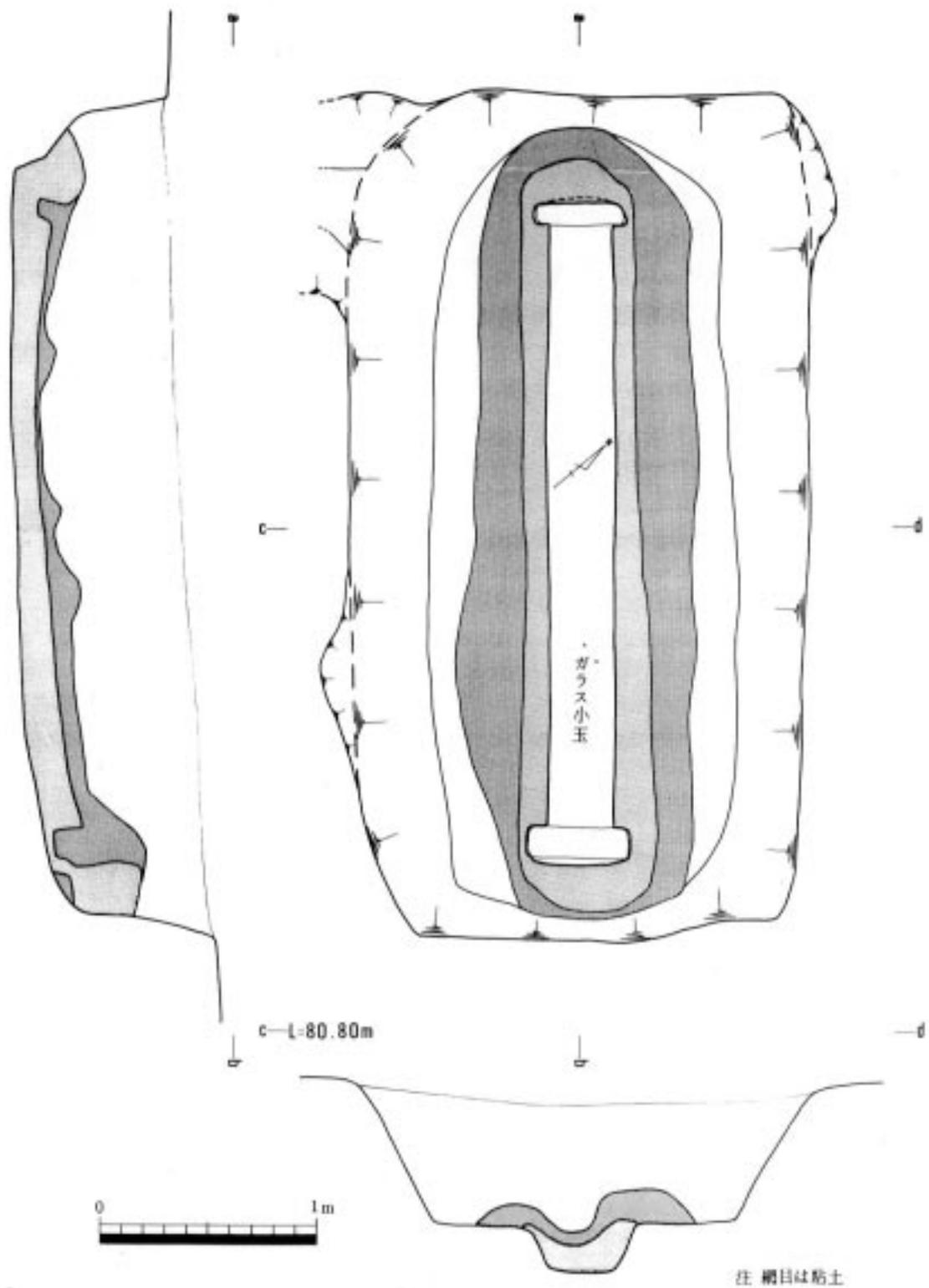
#### 4. 第 1 号古墳

##### 外 観

葺石・周溝等の外部施設が検出されなかったため、墳丘の規模・形状の詳細は不明である。しかし、弥生墳墓のほぼ中央付近に径 6 m ほどの円形に近い平坦面が認められることから、これが第 1 号古墳の範囲とも考えられる。調査時点での盛土の高さは、墳頂で約 30 cm と僅かしかなく、盛土の多くは流出してしまっただけであろう。内部主体は平坦面のやや北東寄りにある粘土槨 1 基のほか、粘土槨の北西に隣接した場所に土壙 1 基が認められた。

##### 内部主体

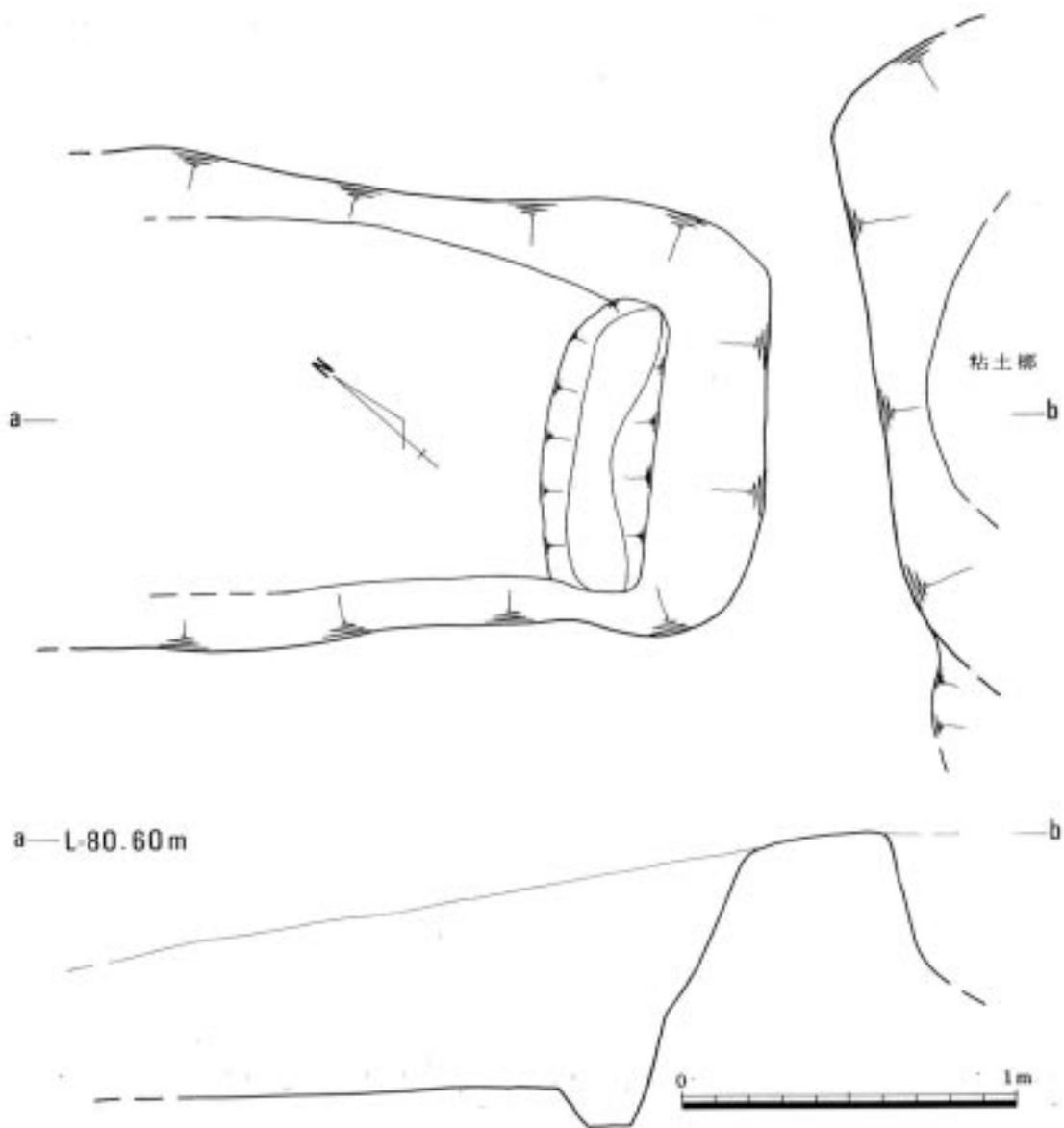
粘土槨は、方形区画のほぼ中央に位置する土壙の西側を破壊して、平坦面の中央に構築されたものである。本粘土槨の長軸方向は N 53° W で、頭位はその形状から南東寄りであろう。粘土槨を納めた土壙は二重土壙である。まず、350 × 210 cm、深さ 60 cm の土壙を掘り、さらに、310 × 60 cm、深さ 15 cm ほどの小土壙を掘り込み、その上に、砂粒の少ない緑灰色の粘土を敷いて棺床としている。棺床の厚さは、中央部で 12



第39図 B地点第1号古墳粘土槲実測図

cmを測り、両端には粘土塊を置いている。この棺床の断面は半円形を呈しており、割竹型木棺が据えられていたことを物語っている。また、棺床の両隅近くには、頭部15 cm、足部7 cmの掘り込みが見られ、割竹型木棺の両隅に小口板が添えられていたことを示唆している。上記のことから小口板を含めた木棺の規模は、長さ約275 cm、径50 cmほどの木棺と推測できる。棺床の上面には、若干の砂粒を含み、白灰色を呈する被覆粘土が見られ、その厚さは頭部8 cm、足部7 cmを測るが、中央部では2 cmとわずかしき見られない。なお、棺床からはガラス小玉2個を検出したが、赤色顔料の塗布はみられなかった（第39図）。

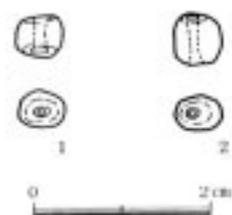
土壙は、粘土槨の北西に隣接した場所に位置し、長軸はN40°Wを示すものである。北西部は傾斜面にかかるため掘り方は定かではないが、現存する南東部は、長さ140 cm、幅200 cm、深さは最大で70 cmを測り、床面は平坦面である。また、床面の南東隅には、幅35 cm、深さ10 cmほどの掘り込みがみられた。粘土槨との切り合い関係はなく、築造の前後関係は不明である（第40図）。



第40図 B地点第1号古墳土壙実測図

## 遺物 (第41図)

第1号古墳に関する遺物は、内部主体である粘土槨の棺床上の頸部から胸部にかけてと考えられる部分からガラス小玉2点を検出したのみであった。このうち、ガラス小玉1は、長さ3.5mm、幅4.5mm、孔径1.3mm、ガラス小玉2は、長さ5.5mm、幅4.2mm、孔径1.0mmを測り、色調は1・2とも淡青緑色を呈している。いずれも孔の両端は紐擦れによって広がっている。



(橋本)

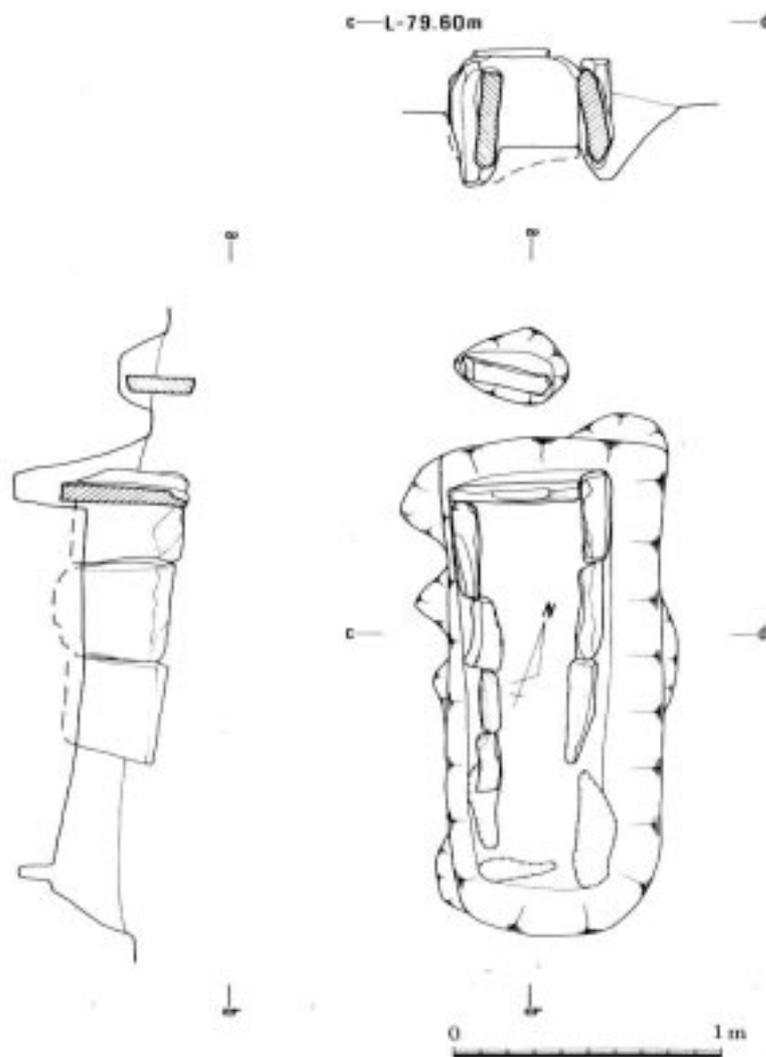
第41図 ガラス小玉実測図

## 5. 第2号古墳

### 外観

第1号古墳の南西18mの場所に構築されたもので、墳丘の北東部は弥生墳墓の南西寄りにある溝状遺構で区切られている。墳丘は径約9m、高さ2mほどの円形に近いプランを呈しており、墳頂の中央やや南西寄りに主体部をもっている。盛土は墳頂中央で20cmほどしか認められず、その多くを流失してしまったものと考えられる。

### 内部主体 (第42図)



第42図 B地点第2号古墳内部主体実測図

第2号古墳の内部主体は、主軸をN17°Wに向けている箱式石棺である。本石棺は地山を長さ220cm、幅85cm、深さ25cmにわたって掘り込んだ土壇内に据えられている。現存する石棺は、8枚の板石を横位置の広口積みで構成しており。棺蓋と側壁の一部を欠失している。石棺の規模は、その掘り方から、内法長160cm、幅は北側40cm、南側35cm、深さ35cm程度と考えられる。また、墳丘内の埋土中より、石材4個が見つかっており、その形状および大きさからこの石棺のものと思われる。なお、石棺の北約40cm離れた場所から、この石棺と関連をもつと思われる石材が1個検出されたが、この石材の性質については不明である。

### 遺物

古墳に伴う遺物は、主体部のやや南西から土器片が数片検出されたのみであるが、細片であるために器形を判断するには至らなかった。(橋本)

## 6. 第3号古墳

### 外観

第3号古墳は、第2号古墳の南東に隣接したところにあり、南側においては、第1・2号住居跡と接している。

後世の地形変更が著しいため、調査前には顕著な墳丘は認められなかった。しかし調査の結果、墳丘の北側から西側にかけて幅80～150cm、深さは最深部で50cmを測る屈曲した周溝が設けられており、その一部は第2号古墳の墳丘裾を削っていることが確認された。

第3号古墳は、その立地および周溝の形状・規模などから、まず南向き及び東向きの斜面を削平して平坦面を造り出し、さらに北側から西側にかけて周溝を設けることにより、10×9m程度の隅丸方形に近い墓域を設定したものと考えられる。

### 内部主体 (第43図)

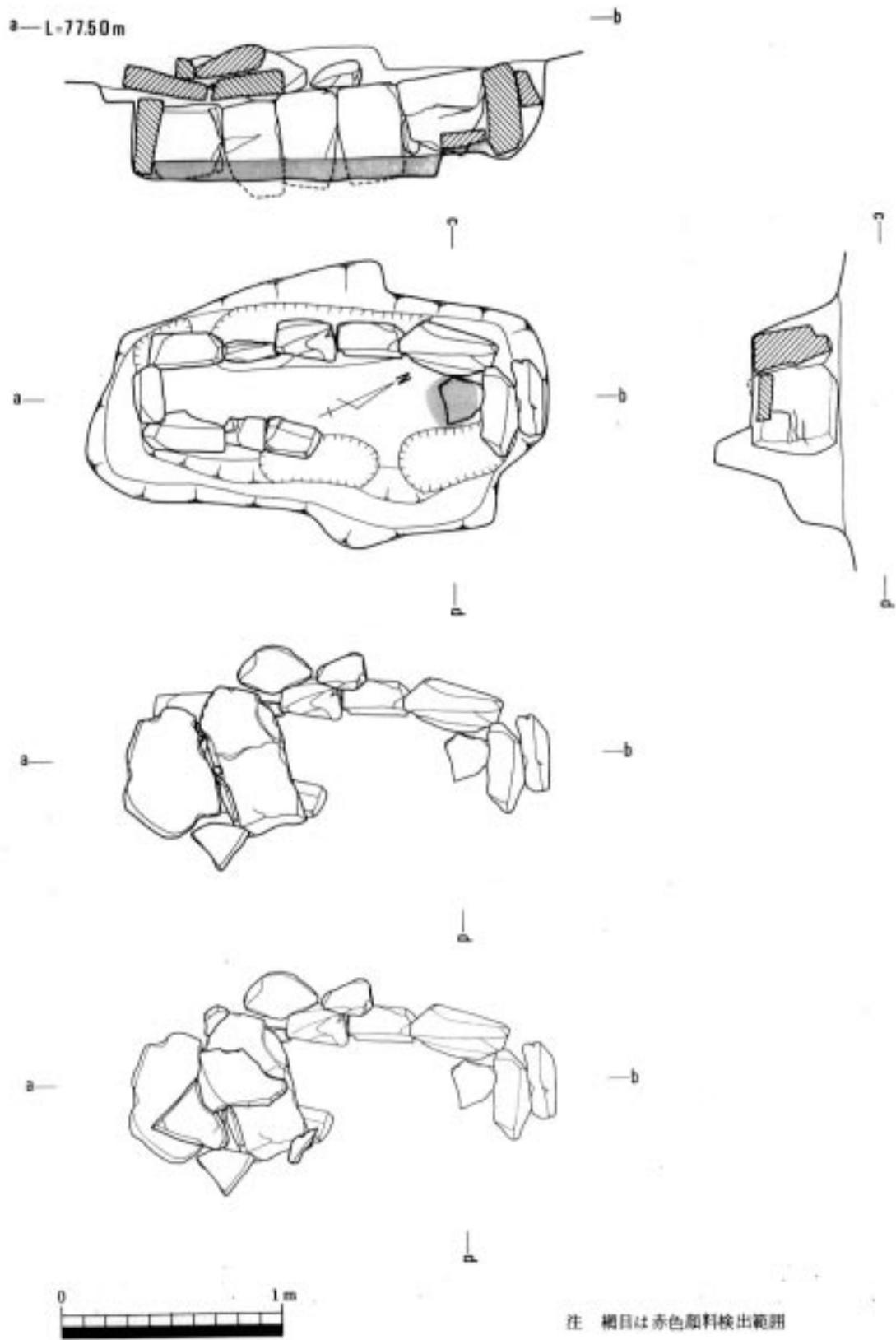
主体部は、主軸をN24°Eにもつ箱式石棺であり、墳丘のほぼ中央に位置する。この箱式石棺は、発見時において、すでに南側の蓋石と東側北部分の側壁を欠いていた。その規模は、内法で全長151cm、幅は南側22cm、現存最大幅36cm、北側推定32cm、高さは25～30cmを測り、やや小型のものである。

石棺の頭位は、全体の形状からみて北寄りと考えられ、この部分には20×20mmほどの扁平な石材が置かれていた。これは他の古墳の例からみて、枕石と考えられる。また、この枕石及びその周辺には、微量ながら赤色顔料の付着がみられた。

この箱式石棺は、200×100cm、深さ45cm程度の不整な長方形の土壇をいったん地山に掘り込み、さらに棺材の形状に合わせて掘り方を調整した後に、埋置されたものである。なお、石棺埋置後、約10cmの埋土により棺床を構成している。石棺の四壁は板石からなり、現存するものはすべて縦方向の広口積みである。蓋石は現存するものは2枚であるが、本来は4～5枚あったものと推測される。北側の小口部分は石材を安定させるために、背後から板石によって支えられている。また、蓋石の上面及び縁辺には大小の割石が置かれており、これは棺内への土砂の流入を防ぐためのものであろう。

以上のような特徴はこの箱式石棺が小振りながらも比較的丁寧に造られていることを示すものである。

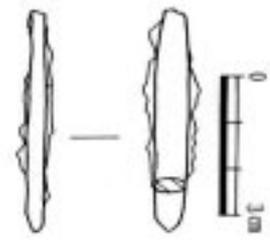
なお、この箱式石棺の東5mのところ、板石や割石が積んであった。これらはその大きさ、形状、数量からみて、この石棺から抜き取られたものと考えられる。



第43图 B地点第3号古墳内部主体实测图

## 遺物（第44図）

石棺内からは遺物はまったく検出されなかった。棺外遺物としては、周溝内北側から少量の土器片と鉄製品1個が検出されたが、土器片は小片のため図示するには至らなかった。鉄製品は、長さ4.75 cm、幅0.50 cm、厚さ0.25 cmを測るものであり、鉄鏃の可能性が強い。（中村）

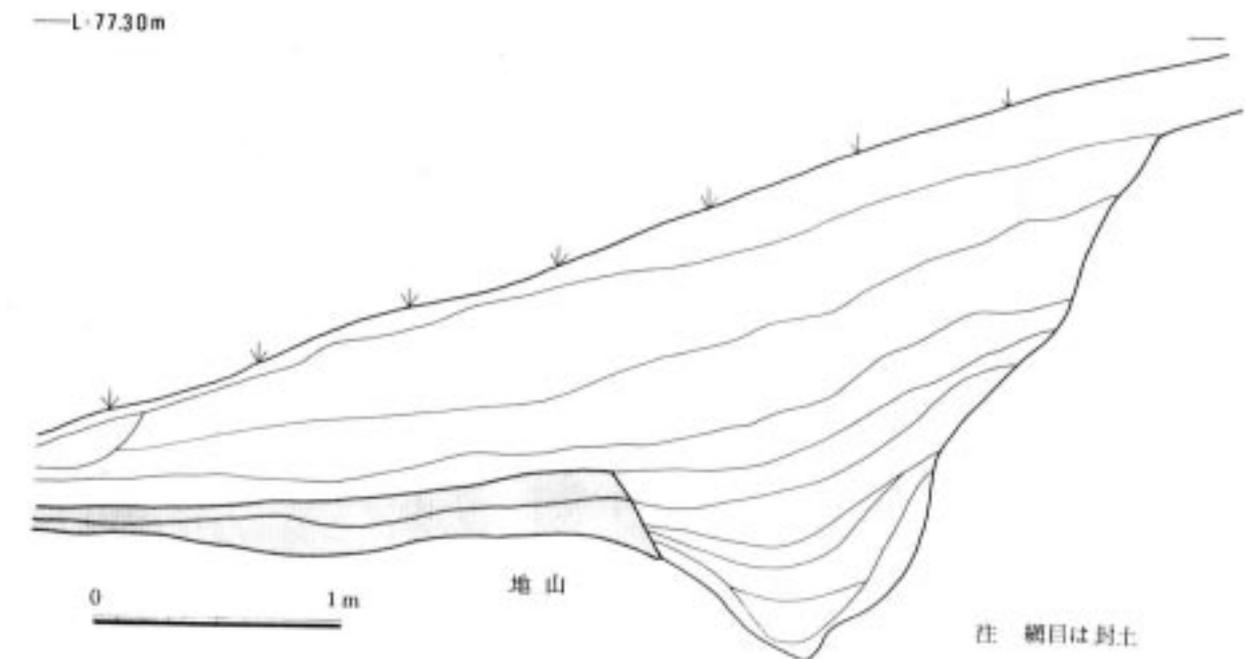


第44図 鉄製品実測図

## 7. 第4号古墳

### 外観

第4号古墳は、第3号古墳の西約11 mの西向き斜面に位置するものであり、調査前の地形観察では、明瞭な墳丘は確認できなかった。しかし調査の結果、南北11 m、東西の最大幅5 m、高さ1 m程度の規模を有する半月形の墳丘を検出することができた。第45図に示すように、墳丘上には若干の封土があったものと考えられるが、傾斜面に位置していることから、土砂の流出入が著しいため、当初の封土の高さは確認することができなかった。この墳丘の東側には、幅130 cm、深さ50 cmほどの周溝が設けられている。墳丘の立地・形状などからみて、第4号古墳は、尾根の西側斜面を削平して、平坦面を造り出し、さらに東側に周溝を設けることにより、墓域を設定したものと考えられる。



第45図 B地点第4号古墳周溝断面実測図

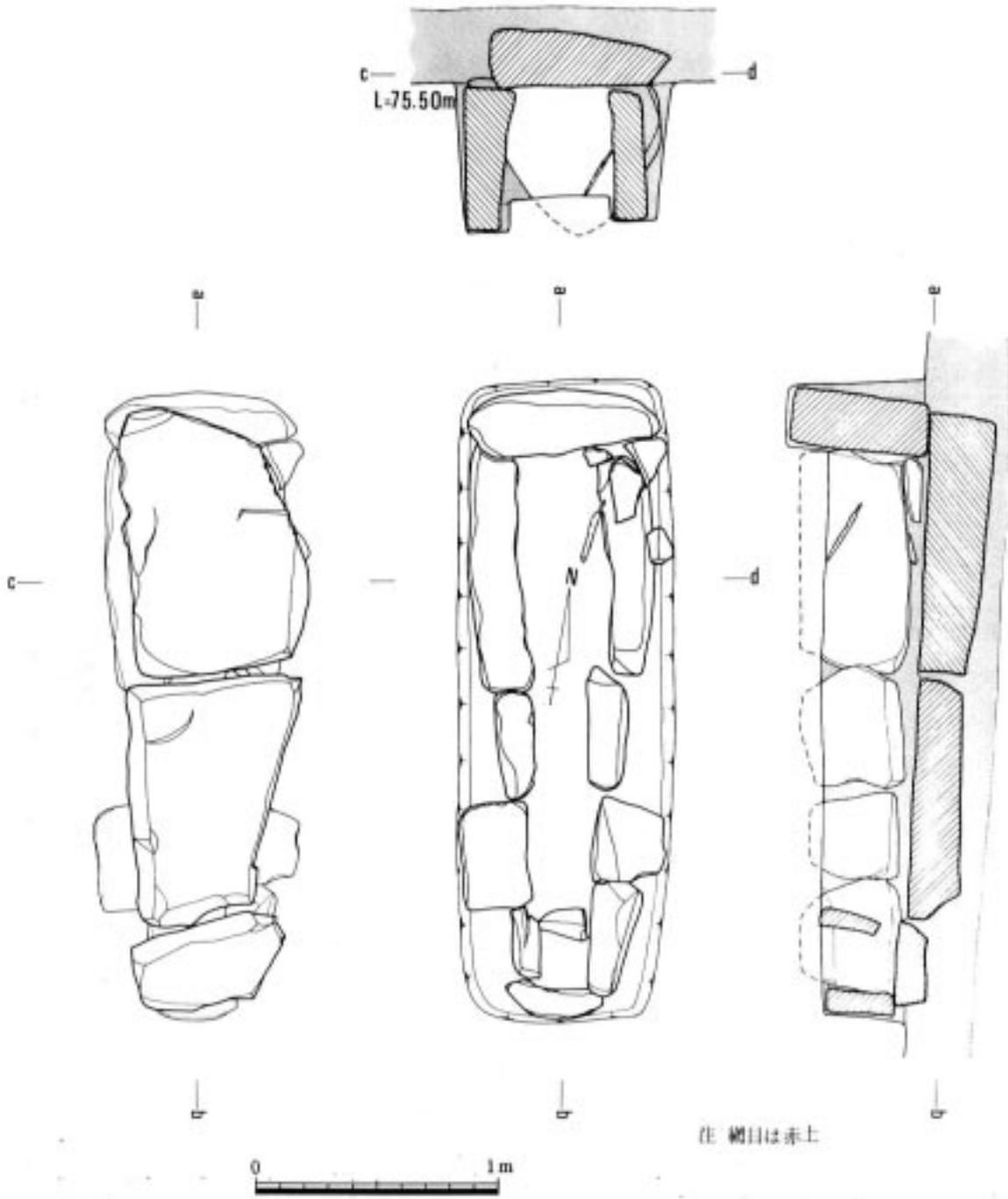
### 内部主体（第46図）

主体部は墳丘のほぼ中央に位置し、主軸をN 9° Wにとる箱式石棺である。その規模は内法で、全長199 cm、幅は北側41 cm、南側26 cm、最大48 cm、高さは北側41 cm、南側30 cmを測るかなり大型のものである。石棺の頭位は、全体の形状からみて北寄りと考えられ、足元にあたる部分には21×26 cmの副室が設けられている。

この箱式石棺は、240×90 cm、深さ40 cm程度の長方形の土嚢をいったん地山に掘り込み、さらに棺材の形状に合わせて掘り方を調整した後に埋置されたものである。石棺の四壁には10枚の板石が用いられており、横位置の広口積みの傾向がみられる。北側小口部分の石材と西側壁北端の石材とは、内側の下方で組

合わせてあり，この部分には堅固な造作が施されている。蓋石は3枚の板石で構成され，その最大のものは，100×73 cmを測る。また，側壁の高さは土壌の上面とほぼ一致している。なお，石棺はほぼその全体を厚さ10 cmほどの赤土によって覆われている。

墳丘上，箱式石棺の東約70 cmの地点から，径40 cm，深さ50 cmほどのピットが検出されたが，遺物は出土せず，その性格は不明である。



第46図 B地点第4号古墳内部主体実測図

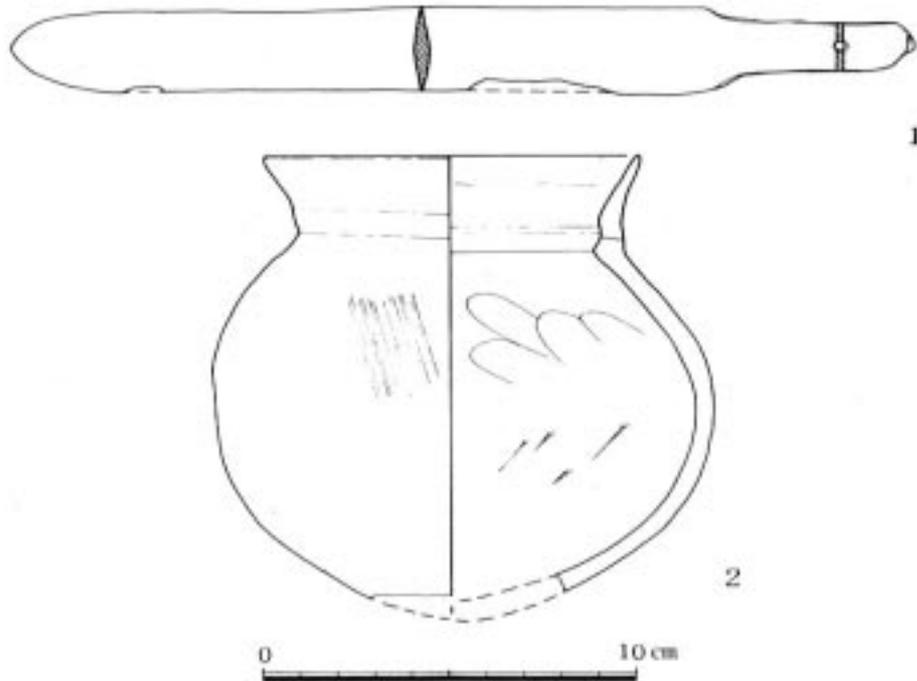
遺物 (第47図)

石棺内の遺物としては鉄剣1本が出土し、棺外遺物としては、東側周溝内南寄りから小型の壺形土器が検出された。

鉄剣は、全長24.1cmを測り、鋒を下に向けて、北東寄りの壁面に立て掛けた状態で出土した。刃部をわずかに欠損するが、ほぼ完形であり、保存状態は良好である。また、茎尻から1.8cmの茎の中心線あたりに、直径3mmの目釘孔が1カ所認められるが、明瞭な鏝はみられない。なお、鉄剣の各部の計測値は次のとおりである。

刃部		茎部	
長さ	18.8cm	長さ	5.3 cm
幅		幅	
関部	2.6 cm	関部	1.9 cm
中央	2.7 cm	中央	1.5 cm
厚さ		厚さ	
関部	0.35 cm	関部	0.28 cm
中央	0.4 cm	中央	0.2 cm

土器は、口径10cm、器高14.9cmを測る供献用の小型丸底壺であり、口縁部をわずかに欠くが、ほぼ完形を呈している。くの字状の口縁部は、口縁端部にいくに従って厚みが減少し、端部はまるくおさめられている。胴部は丸くふくらみ、底部は焼成後に穿孔されている。器表には、縦あるいは斜方向のハケ目がみられ、胴部内面には、指による圧痕及びヘラ削りの痕跡が認められた。色調は全体的には、黄褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや軟調である。(中村)



第47図 第4号古墳出土遺物実測図

# V ま と め

## A 地点遺跡

A地点遺跡は、矢口川をのぞむ丘陵の南向き緩斜面に位置する弥生時代の集落跡であり、竪穴式住居跡4基、土壙9基及び溝状遺構などが検出された。住居跡のうち明瞭なプランを確認できたものは、第1・3号住居跡の2基である。第1号住居跡は、隅丸方形のプランをもつ4本柱のものであり、第3号住居跡は円形に近いプランをもつ6本柱のものである。住居跡はいずれも1～3基の土壙を伴っている。

9基の土壙のうち、第3・4・8号土壙を除く6基は、住居跡に伴うものであり、その位置関係から貯蔵穴としての用途が考えられる。第3号土壙と第6号土壙においては、カキを主体とする貝殻や若干の土器片の廃棄がみられ、同様の例は高陽町内では、真亀E地点遺跡（注1）・城前遺跡（注2）においてもみられる。

なお、溝状遺構については、すでに述べたようにA-1地点の北東側が、現在では崖面となっているため、遺構の全容は確認できなかつた。しかし、溝状遺構の東側の平坦面からは柱穴とも考えられるピットが検出されており、この周辺に住居跡が存在した可能性がある。この場合、第3号土壙及び第4号土壙はこの住居跡に伴う貯蔵穴と考えられよう。

北寄りの2基の住居跡のプランが不明瞭なこともあって、住居跡内から出土した土器のうち器形を推定し得るものは少ない。しかし、土壙内及びその周辺から出土した土器を加えると、住居跡関係の土器は29点を数える。そのうち約8割を占める甕形土器を口縁の特徴によって分類すると以下2類に大別できる。

- 1類 口縁部がくの字状に外反し、口縁端部が上下に肥厚して、凹線が入るもの。
- 2類 口縁部がくの字状に外反し、口縁端部には顕著な肥厚はみられず平坦で、凹線が入らないもの。

1類は上深川Ⅰ式、2類は上深川Ⅱ式に近い特徴をもっているようである。（注3）なおこれらの土器の検出状況は表1のとおりである。

表1 A地点甕形土器検出状況比較表  
（+記号は検出量の多少関係を示す）

遺構 検出土器	第1号住居跡関係		第2号住居跡関係		第3号住居跡関係		第4号住居跡関係		第3号土壙
	住居跡	貯蔵穴	住居跡	貯蔵穴	住居跡	貯蔵穴	住居跡	貯蔵穴	
1類	+	-	-	-	+	+	-	+	-
2類	+	-	-	+	+	+	+	++	+

2類の十蛛は・A地点の遺構の大部分にみられ、A地点の遺構は、1類の土器を含みながらも2類の土器に主体を置いたものであることが指摘される。各遺構の時期差は、良好な土器の出土が少ないため明瞭ではないが、いずれにしてもA地点の集落跡は、弥生時代後期中葉あたりを最盛期として営まれたものと考えることができよう。

また、後世の地形変更のためA地点の集落跡の全容は必ずしも明瞭ではないが、その立地は、周辺で発見されている弥生時代から古墳時代の集落跡のあり方と同様の傾向を示している（注4）。このことから、この集落跡の構成も周辺の集落跡と大差なく、住居跡4基を大きく上回る可能性は少ないものと考えられる。（中村）

## B 地点遺跡

B地点遺跡は、眼前に矢口の市街地を臨む丘陵上にあつて、弥生時代の住居跡・墳墓及び古墳が重複混在した遺跡である。

そのうち住居跡は3基が確認されたが、第1号住居跡と第2号住居跡は重複しており、その切り合い関係か

表2 広島県内出土粘土槨一覽

No.	古墳名	所在地	規模	時 期	棺 内 遺 物	備 考
			(cm)		棺 外 遺 物	
1	高陽台B地点 道川第1号古墳	広島市安佐北 区高陽町矢口	350× 210	5 C代	ガラス小玉	今回報告
2	植松第1号古墳	双三郡三良坂 町皆瀬	—	6 C前	須恵器の蓋付坏, 刀子 土製小玉	河瀬正利・向田祐始 『芸備』第3集「双三郡三良坂町 植松第1号古墳発掘調査告」 1975
3	大久保第5号古 墳	三次市酒屋町 大久保	260× 50	5 C代	鉄剣, 刀子, 滑石製琴柱形 石製品, 他 土師器	広島県教育委員会 『中国縦貫自動車道建設に伴う埋 蔵文化財発掘調査報告』(2)1979
4	国成古墳	深安郡神辺町 西中条本谷	—	〃	製の珠文鏡, 匂玉, 滑石 製有孔円板, 鉄刀, 他	村上正名 『国成古墳』1965
5	月貞寺第21号古 墳	庄原市本村町 月貞寺	312× 230	〃	鉄器, 鉄斧	広島県教育委員会 『中国縦貫自動車道建設に伴う埋 蔵文化財発掘調査報告』(1)1978
6	才谷第4号古墳	福山市駅家町 中島	375× 160	5 C後	刀子, 針, 滑石製匂玉, 棗玉	広島県教育委員会 『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵 文化財発掘調査報告』1976
7	四捨貫小原第1 号古墳(B主体)	三次市四捨貫 小原	250× 50	5 C代	鉄刀, 刀子, 匂玉, そろば ん玉, 碧玉製小玉, 他 土師器, 須恵器	四捨貫小原発掘調査団 『四捨貫小原』1968
8	〃 (C主体)	〃	190× 100	〃	鉄剣, 鉞, 鉄斧, 鉄鏃 No.7と同じ	同 上
9	四捨貫小原第8 号古墳	〃	330× 130	5 C前	鉄刀 土師器の高坏, 壺	三次市教育委員会 『三次市四捨貫小原八号墳発掘調 査概報』1974
10	四捨貫太郎丸第 9古墳	三次市四捨貫 町	318× 100	5 C代	乳文鏡, 匂玉, 管玉, ガラ ス小玉, 鉄器片	広島県双三郡・三次市史料総覧編 集委員会『広島県双三郡・三次市 史料総覧』第5編 1974
11	四捨貫日南第39 号古墳	〃	344× 210	5 C前	鉄剣, 鉄鏃, 鉞 土師器	同 上
12	浄楽寺第12号古 墳	三次市高須町 浄楽寺	250× 50	5 C代	鉄鏃, 鉄刀子, 鉞 匂玉, ガラス小玉	松崎寿和, 潮見浩 『広島大学文学部紀要』第6号 「三次市浄楽寺古墳群発掘調査概 報」1954
13	善法寺第1号古 墳	三次市酒屋町	270× 45	5 C中	鉄鏃, 鉄斧, 鉄鎌, 鉄剣, 鉄刀	No.10と同じ
14	田尻山第16号古 墳	庄原市山内町 国武	266× 132	5 C後		No.5と同じ
15	鳩岡古墳	三原市沼田東 町納所	—	5 C代	土師器の高坏 円筒埴輪, 葺石	三原市 『三原市史』第1巻 1977
16	福礼古墳	三原市沼田西 町松江	225× 55	6 C以 前	鉄刀, 刀子 円筒埴輪	広島県教育委員会 『福礼古墳発掘調査報告』1977
17	宗祐西第2号古 墳	三原市南島敷 町	—	5 C代		No.10と同じ
18	勇免第5号古墳	三次市大田幸 町勇面	190× 55	6 C前	刀子, 鉄鏃, 鉞, 碧玉製管 玉, 水晶製匂玉, 他 須恵器の杯蓋, 甕, 土師器 の壺	No.10と同じ
参 考	真亀第1号古墳	広島市安佐北 区高陽町真亀	470× 95	5 C代	鉄鏃, 刀子, 鉞鉄刀 鉄鏃, 土師器	広島県教育委員会 『高陽新住宅市街地開発事業地内 埋蔵文化財発掘報告』1977

表3 広島市域の大型箱式石棺

番号	古墳名	所在地	規模 (m)	備考
1	高陽台B地点 道川第4号古墳	広島市安佐北区 高陽町矢口	長さ 1.99 幅 0.48 (内法)	今回報告
2	土ガ原古墳群 E支群 E-1号墳	広島市安佐北区 可部町土ガ町	長さ 2.0 幅 0.4 (内法)	福谷昭二 「歴史のあけぼの」 『可部町史』
3	〃 E-2号墳	〃	長さ 2.0 幅 0.6 (内法)	〃
4	宇那木山 第1号古墳	広島市安佐南区 佐東町緑井	長さ 1.8 幅 0.4 (内法)	福谷昭二 「佐東町のあけぼの」 『佐東町史』1980
5	西崎古墳 第2号石棺	広島市安芸区矢 野町西崎	長さ 2.1 外 0.6 (内法)	矢野町史編纂委員会 編 『広島県矢野町史』 上巻 1958
6	〃 第3号石棺	〃	長さ 1.8 幅 0.7 (外法)	〃
7	白山第2号古墳	広島市安佐南区 安古市町白山	長さ 1.85 幅 0.3~0.4 (推定)	広島県教育委員会 『白山城跡発掘調査概 報』 1973

らみて、第1号住居跡が先に構築されたことがわかる。住居跡の形態からみると、第1・2号住居跡は竪穴式住居跡で円形ないし長円形プランを呈しているのに対して、第3号住居跡は高床式住居跡であり、第1・2号住居跡とは異なった様相を呈している。出土遺物についてみると、第1・2号住居跡内から出土した土器と第3号住居跡内から出土した土器は、口縁部を肥厚させず、くの字状に大きく屈曲する口縁をもつ上深川Ⅲ式(注5)に近い特徴をもっており、いずれの住居跡とも弥生時代後期後半の頃に位置づけられよう。なお、これまで広島市域で弥生時代

の高床式住居跡の検出例はなく、構造・集落内での位置づけ等については、今後の調査例をまちたい。

墳丘墓は丘陵の最高所に位置しており、自然地形を利用し、2条の溝状遺構によって区画された墳丘の中に複数の内部主体をもっている。溝状遺構及び墳丘の裾部からは、器壁を減少させ気味にくの字に大きく屈曲する口縁をもつ弥生時代後期後半の土器片が多数検出されている。しかし、一部には球形に近い胴部をもつ傾向のものもみられることから弥生時代終末期に近い頃の集団墓と考えられよう。

最後に古墳は4基が確認された。第1号古墳は墳丘墓を再利用し、尾根上の最も良好な地点に位置している。中心となる内部主体は粘土槨であり、太田川流域では初見である。また、遺物もガラス小玉2点であったために築造時期の判断は困難をきわめるが、表2に示すように他の類例を考え合わせるならば5世紀代の頃のものと考えたい。第2号古墳は、前述した墳丘墓の溝状遺構を周溝として利用した可能性をもつもので、内部主体は箱式石棺である。第2号古墳の築造年代は遺物が少量であったため定かではないが、第3号古墳との切り合い関係からみて、第3号古墳に先行する可能性が強い。また、第3号古墳からの出土遺物も少量であったため、築造年代は明らかではない。しかし、内部主体が箱式石棺で、石棺内には枕石をもち(注6)、赤色顔料の塗布もある。さらに蓋石上の縁辺には割石が認められるなど前半期の古墳の特徴がみられる。第4号古墳は、B地点の古墳中ただ1基尾根線上から離れて、最も地形的条件の悪い地点に立地し、その地形的制約から墳丘は半月形という変則的なものになっている。しかしながら内部主体は表3に示すとおり広島市域では最大級の箱式石棺であり、石棺を構成する石材も大型で棺の全体を赤土

によって包むなど全体的に丁寧な造作である。また、石棺内からの副葬品は鉄剣に限られることや周溝内には土師器が供献されていることから、前半期に属する古墳と考えることができよう。

以上のことより考えて、地形的制約を受けている第4号古墳は、以上の一連の古墳のうちでも後出のものと考えられるが、第4号古墳においても墳丘内外に須恵器は検出されておらず、古墳群が古墳時代前半、それも5世紀代を中心とする頃に連続して営まれたものと考えられよう。

なお、最後に高陽台土地区画整理組合の御厚意により、第4号古墳は団地内の墓地の一角に移転・復元されていることを記しておきたい。(橋本)

注1 広島県教育委員会「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」1977

注2 未報告ではあるが昭和55年に城前遺跡発掘調査団によって確認されている。

注3 松崎寿和・潮見浩「先史時代の広島地方」『新修広島市史第1巻』1961

注4 注1に同じ。河瀬正利「歴史のあけぼの」『高陽町史』1979

注5 注3に同じ

注6 本村豪章「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」『広島考古研究2』1960

圖

版



a. A地点全景（調査前 南から）



b. 同 上（調査後 南から）

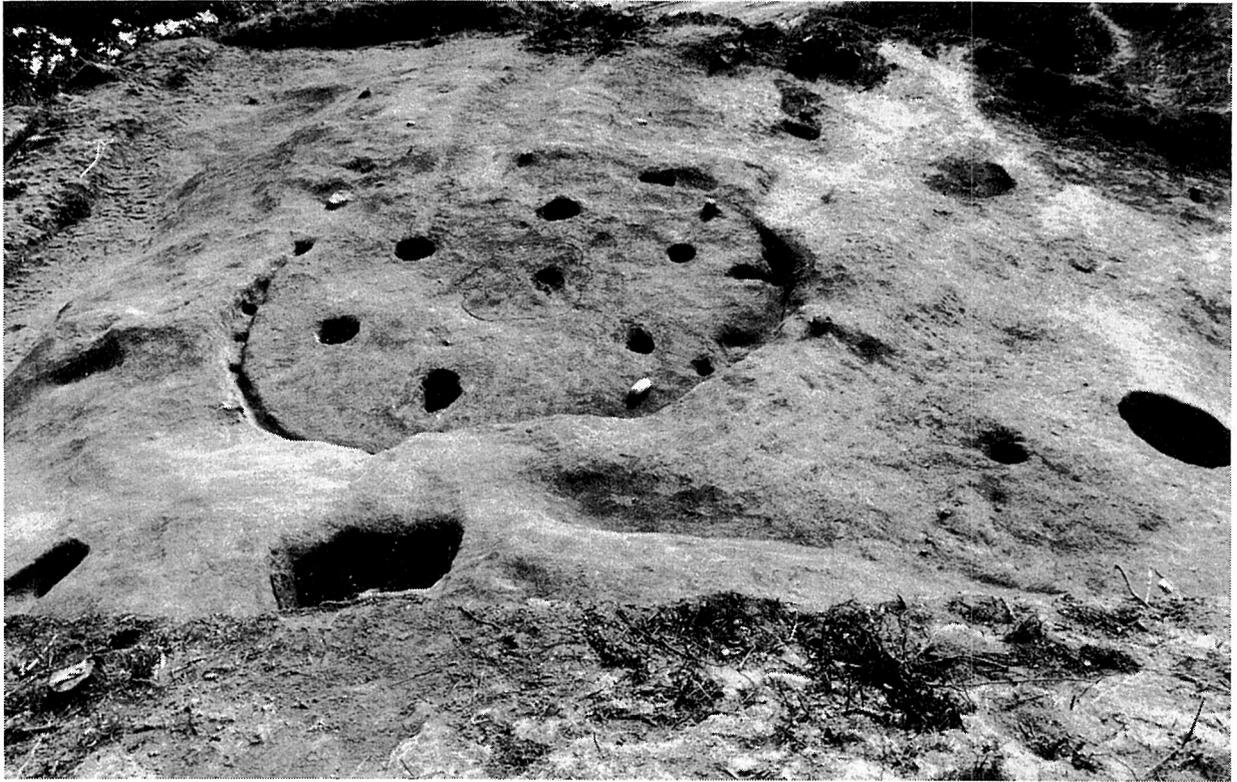
Plate 2



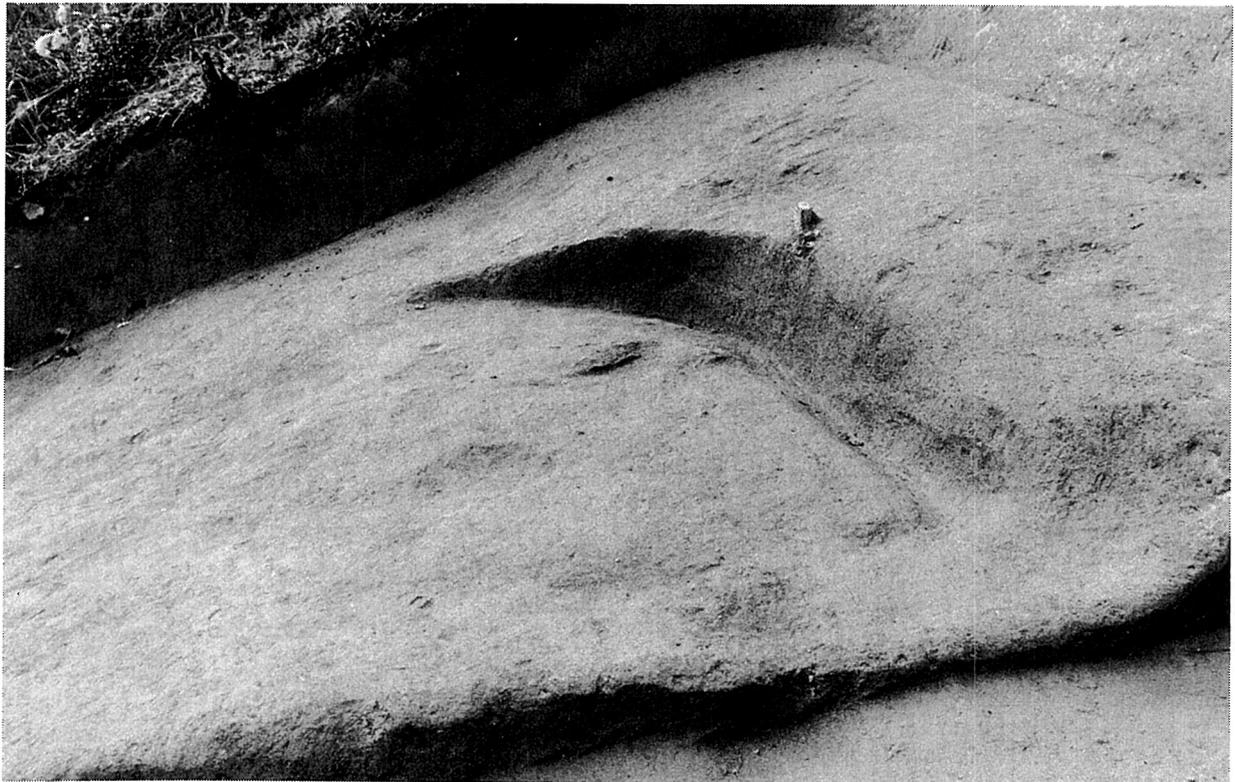
a. A地点第1号住居跡(北東から)



b. A地点第2号住居跡(北東から)



a. A地点第3号住居跡(北から)



b. A地点第4号住居跡(南東から)



a. A地点第1号土壙



b. 同上(完掘後)



a. A地点第2号土坑



b. A地点溝状遺構（南から）



a. A地点第3号土壤



b. 同上(完掘後)



a. A地点第4号土壤



b. A地点第5号土壤



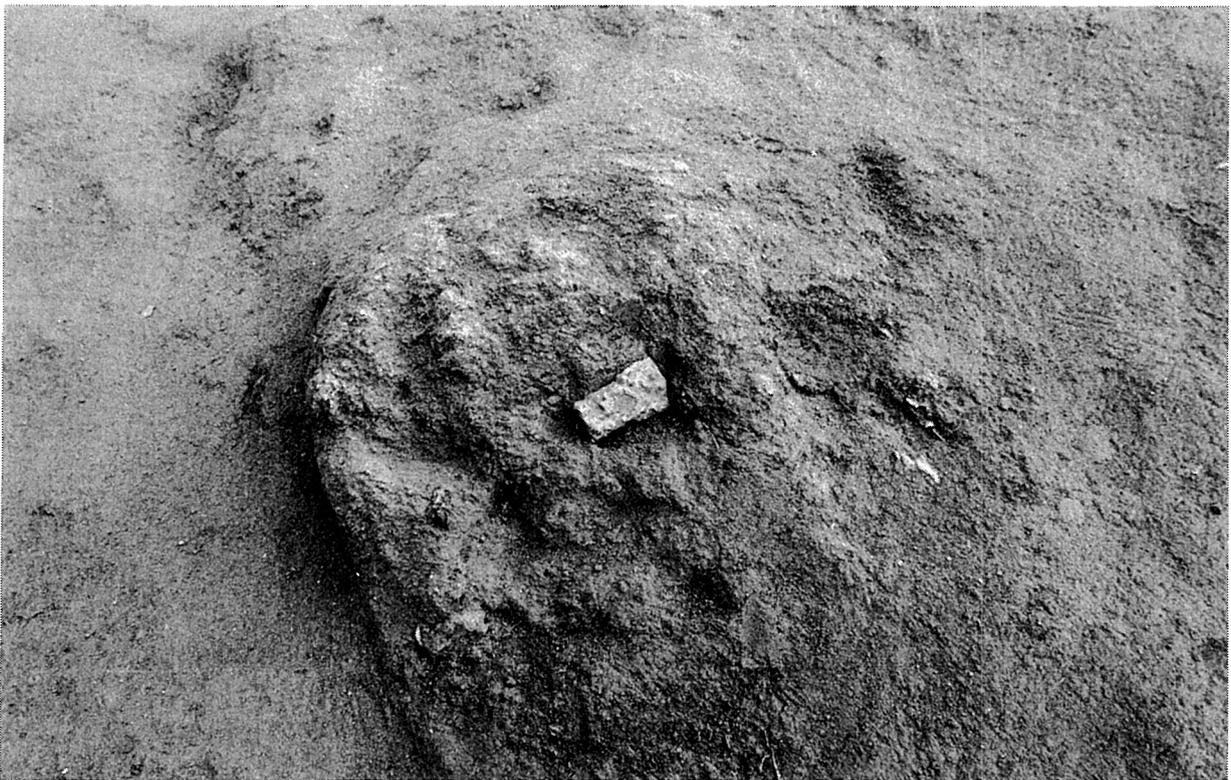
a. A地点第6号土壙



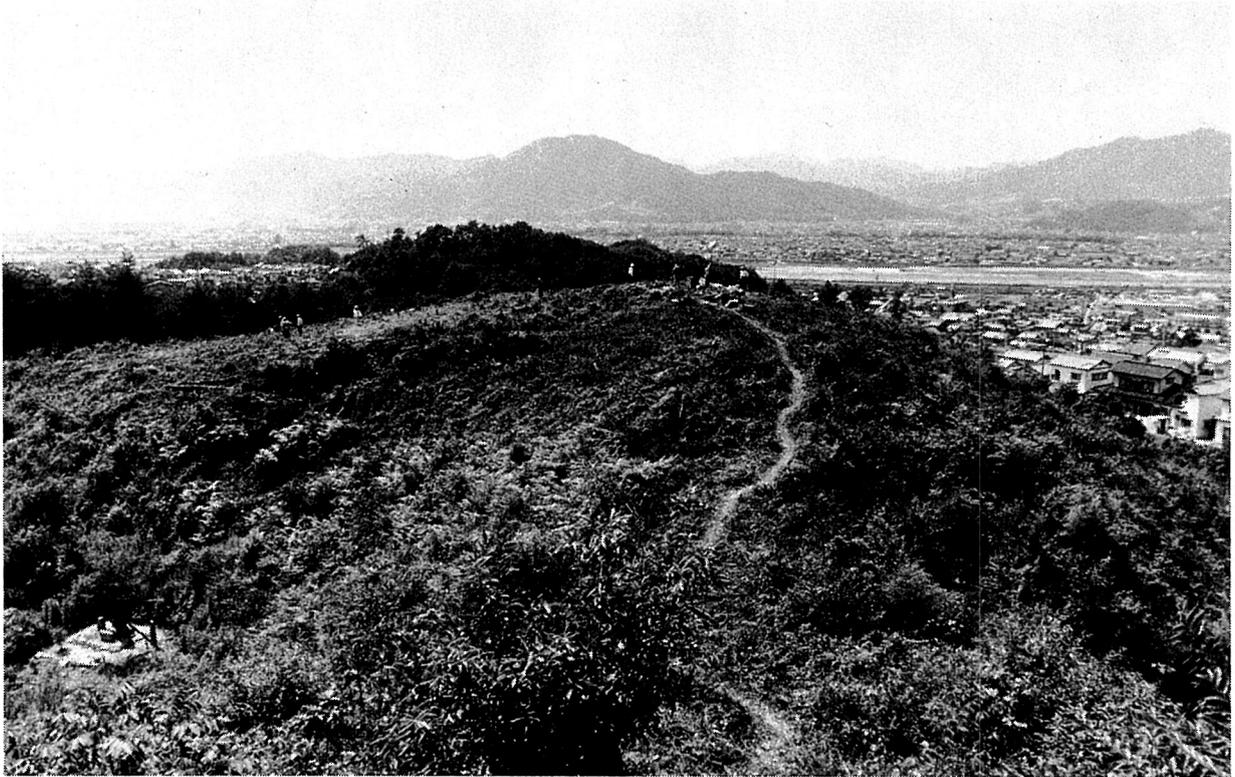
b. A地点第6号土壙内



a. A地点第9号土壙（南から）



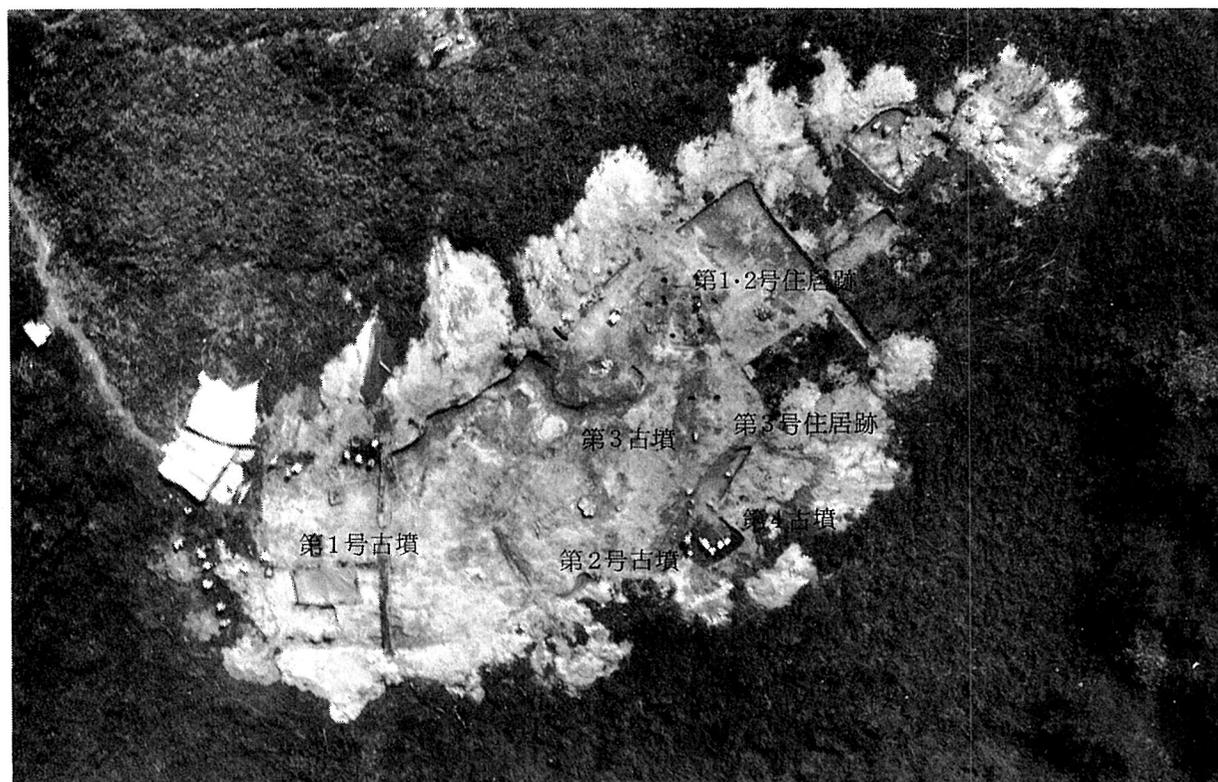
b. A地点鉄斧出土状態



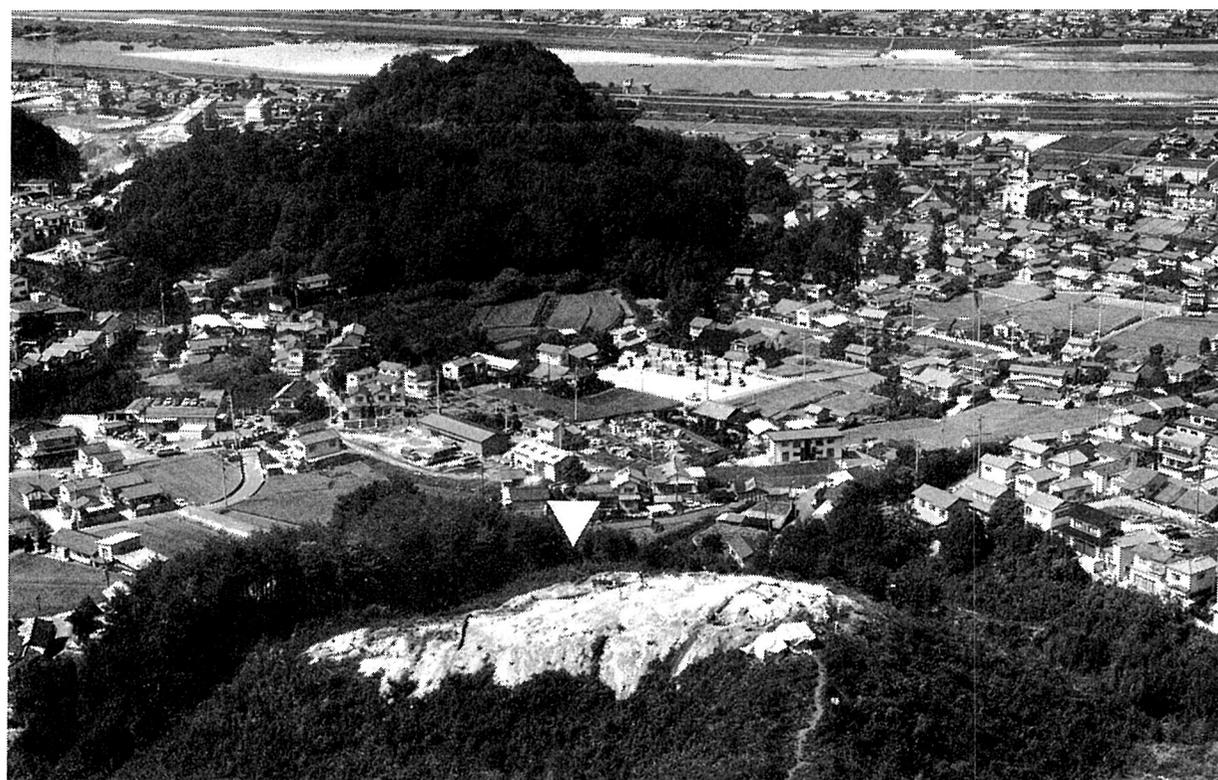
a. B地点近景（調査前 東から）



b. 同 上（調査後 東から）



a . B地点全景（航空写真）



b . B地点遠景（航空写真一東から）



a. B地点第1・2号住居跡(北から)



b. B地点第1号土壇



a. B地点第3号住居跡(北東から)



b. 同上 柱穴内遺物出土状態



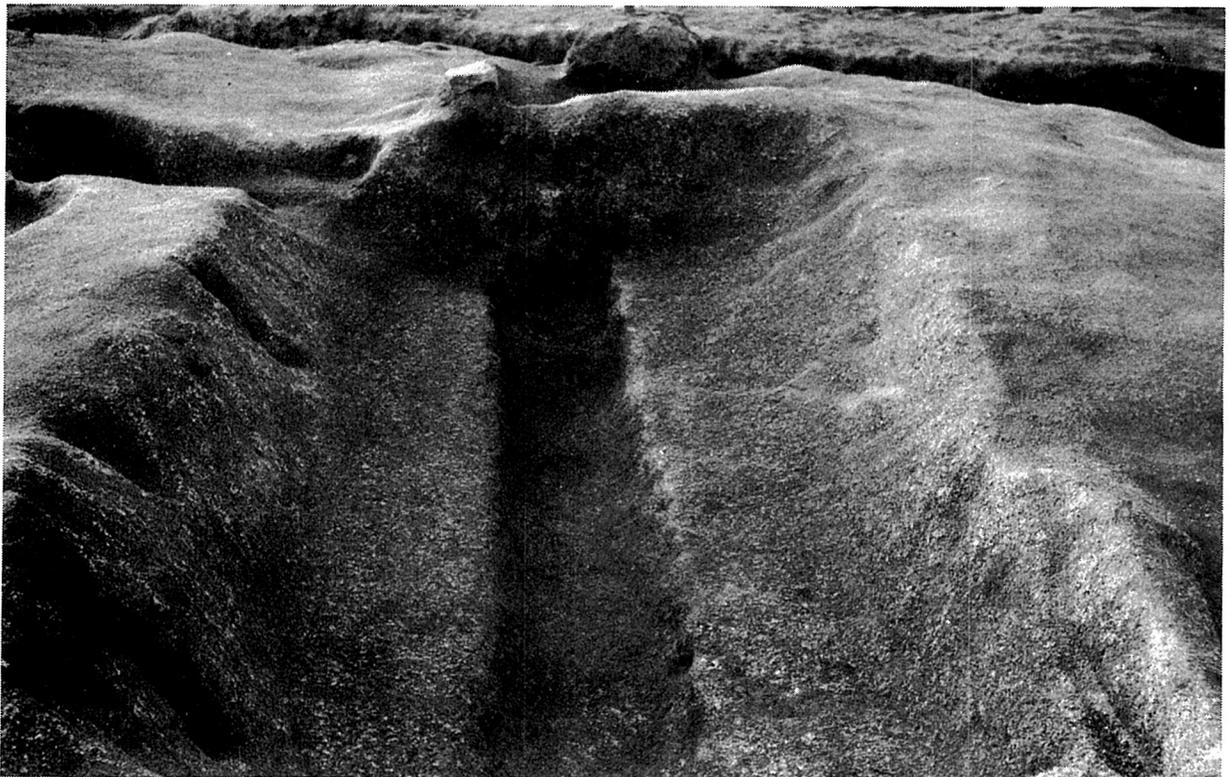
a. B地点墳丘墓及び第1号古墳主体部（南西から）



b. B地点墳丘墓内部主体  
（上 A主体, 下 B主体）



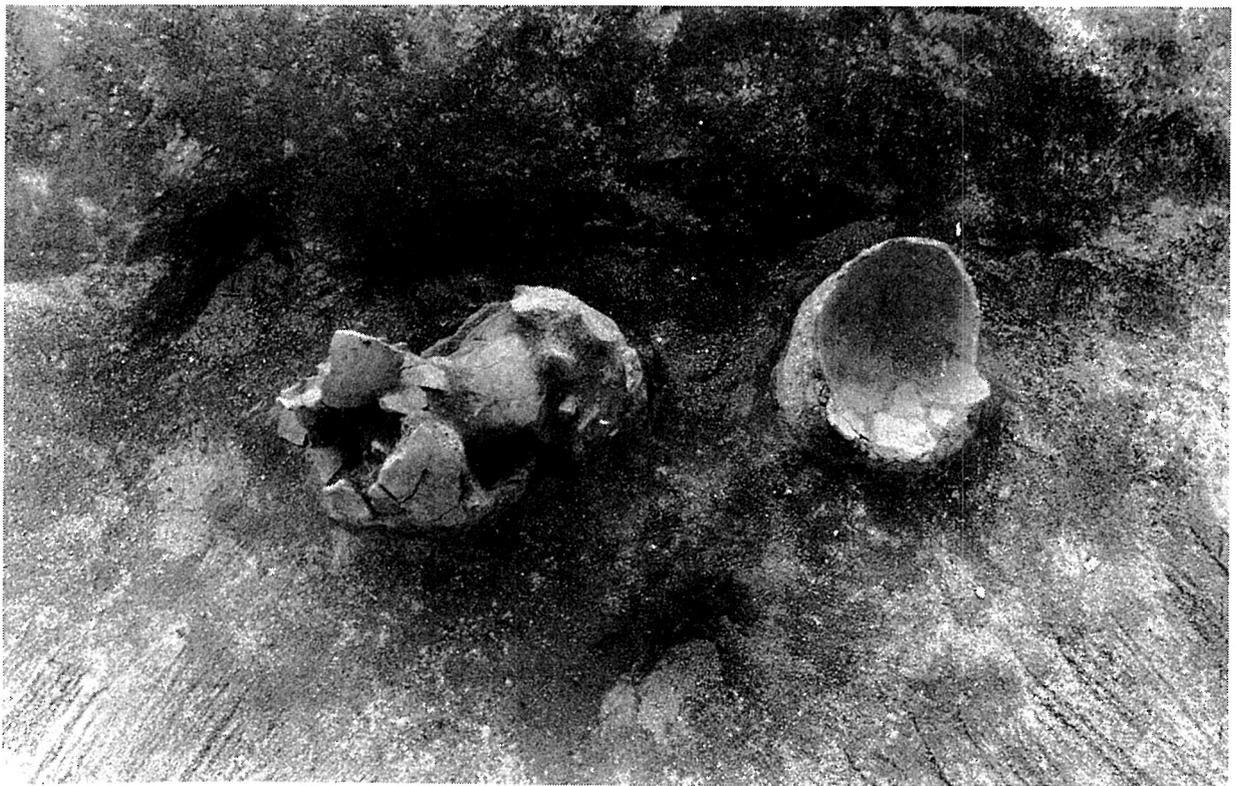
a. B地点第1号古墳内部主体（粘土郭）



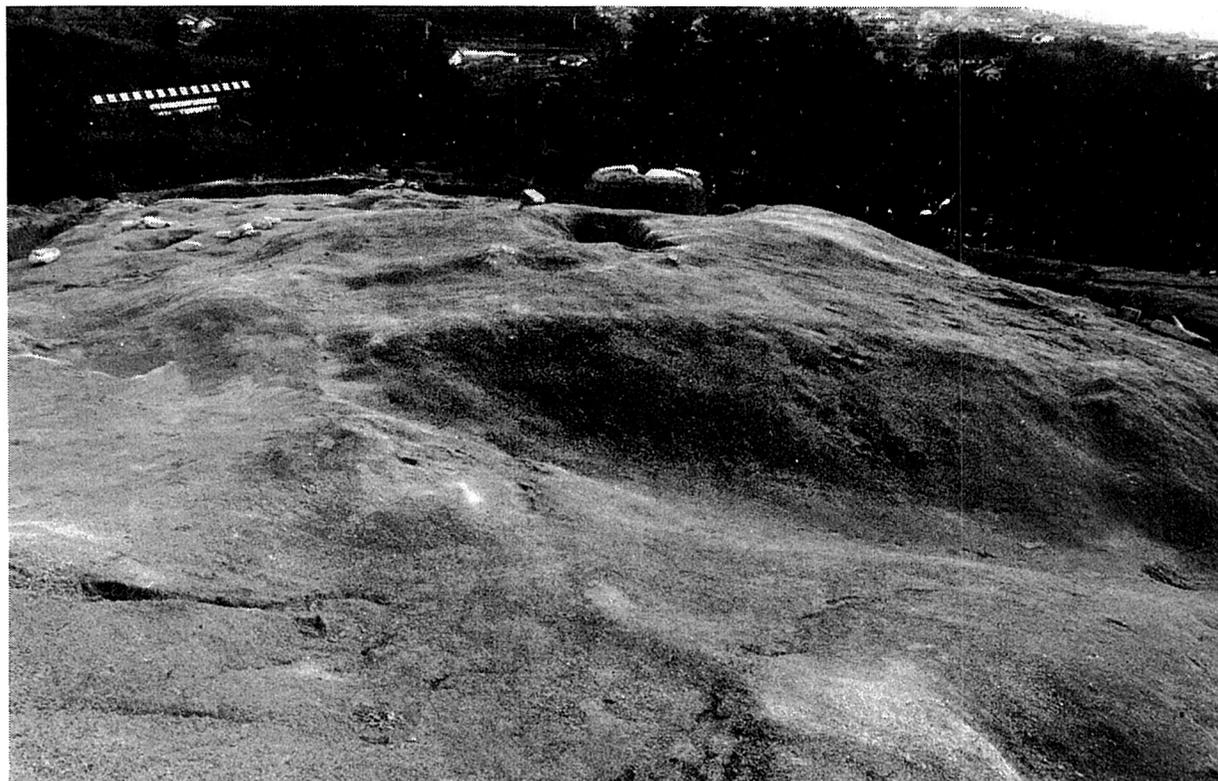
b. 同上（完掘後）



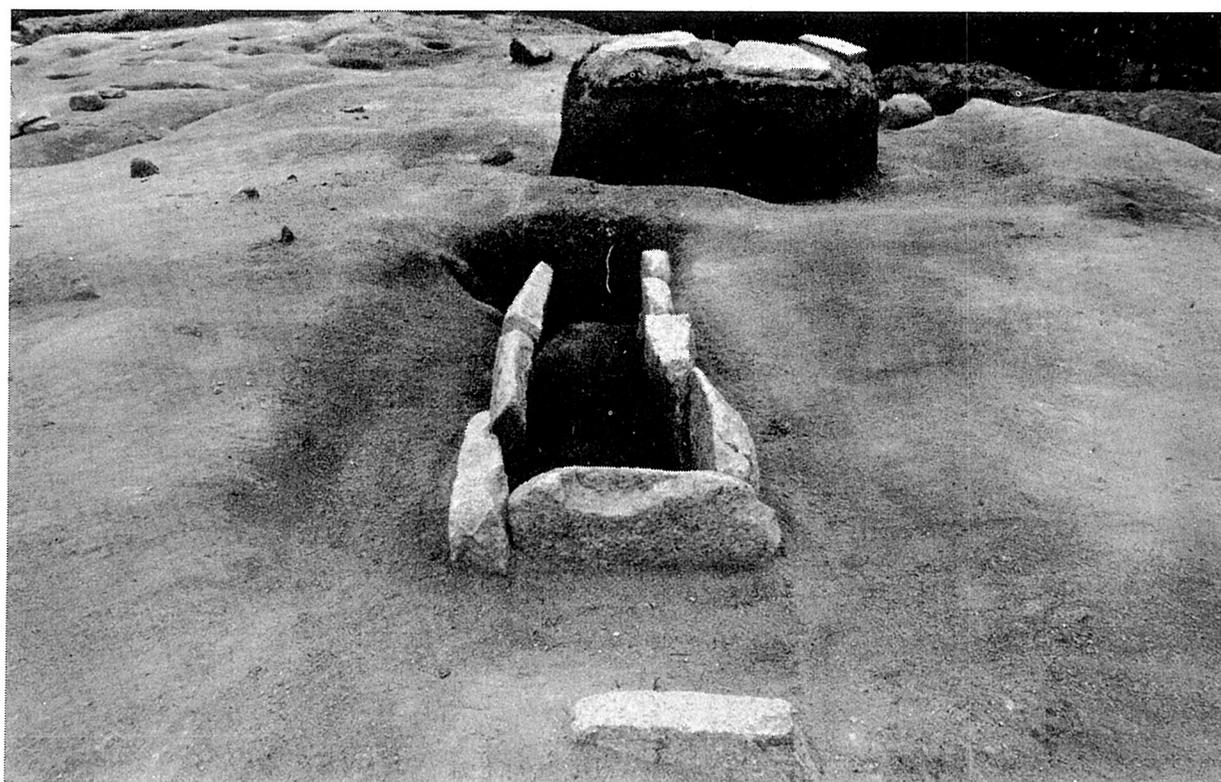
a. B地点墳丘墓近景（東から）



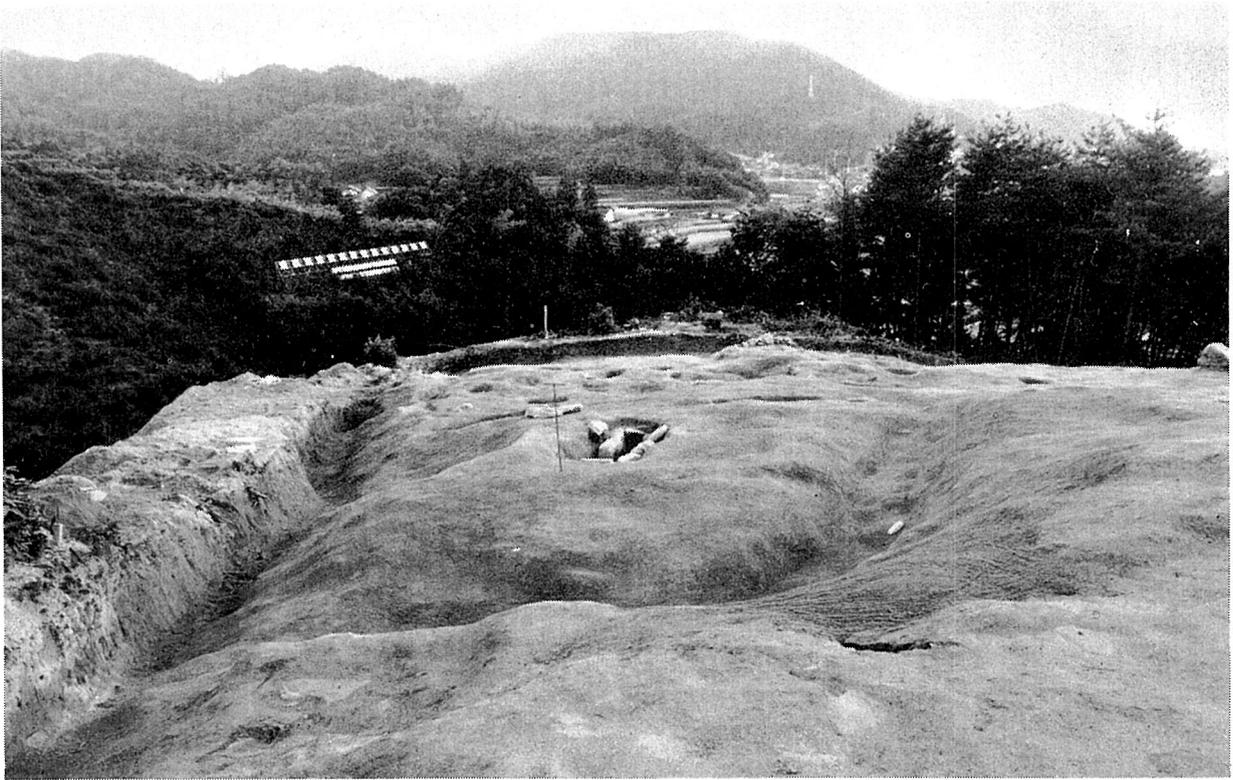
b. B地点墳丘墓東側溝状遺構遺物出土状態



a. B地点第2号古墳（北西から）



b. 同上 内部主体（北西から）



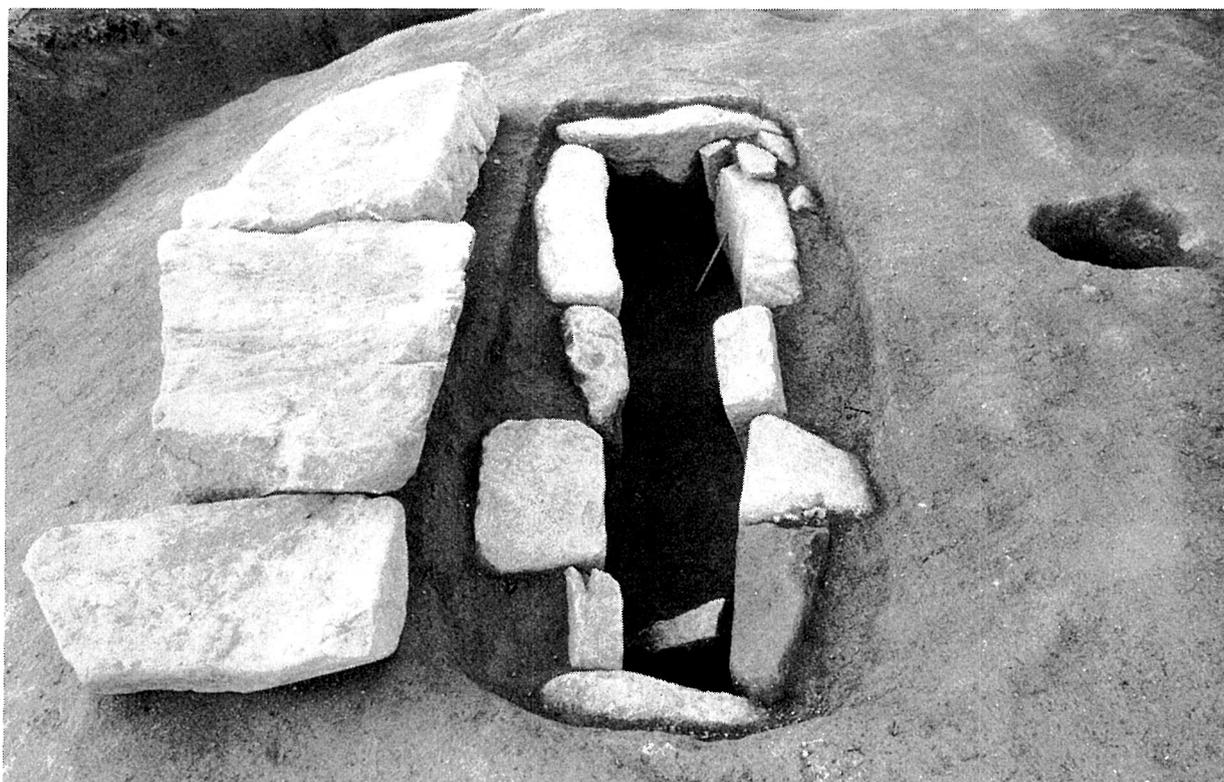
a. B地点第3号古墳（北から）



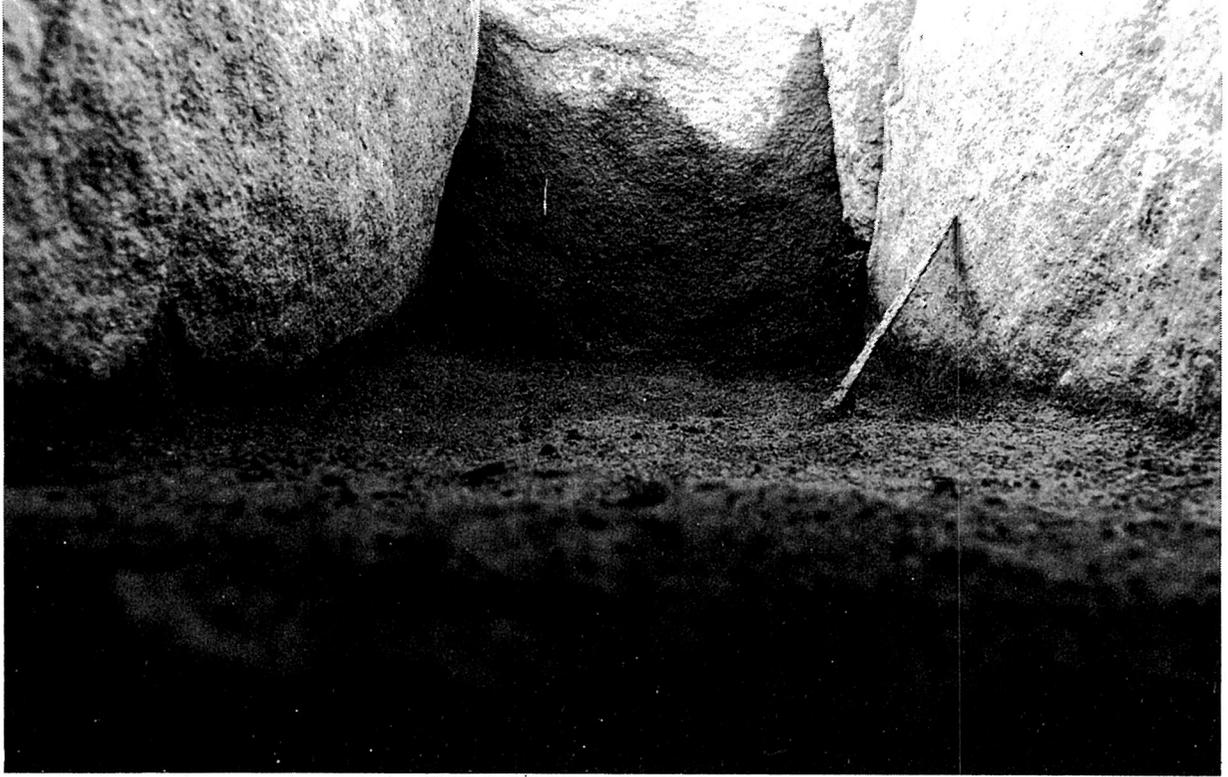
b. 同上 内部主体（西から）



a. B地点第4号古墳（東から）



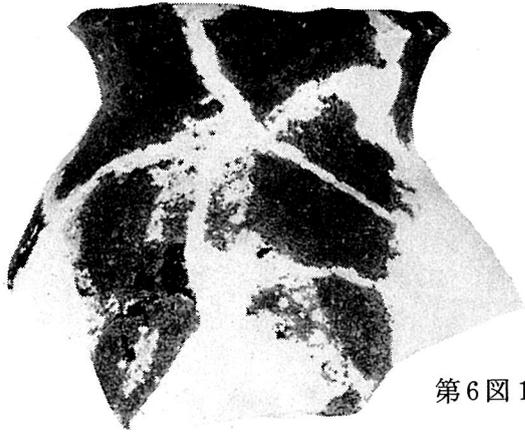
b. 同上 内部主体（南から）



a. B地点第4号古墳遺物出土状態



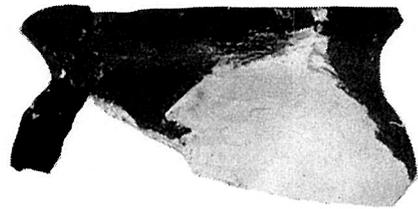
b. B地点第4号古墳周溝内遺物出土状態



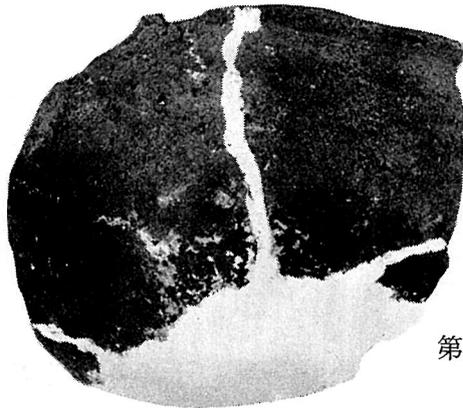
第6图1



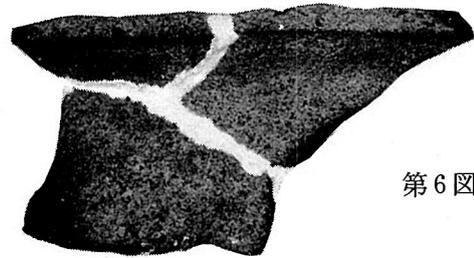
第6图4



第6图3



第10图



第6图2



第13图2



第6图8

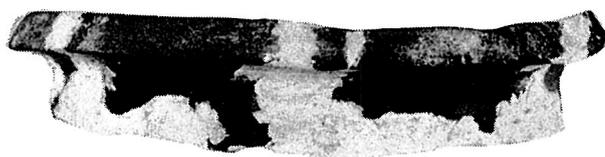


第6图6

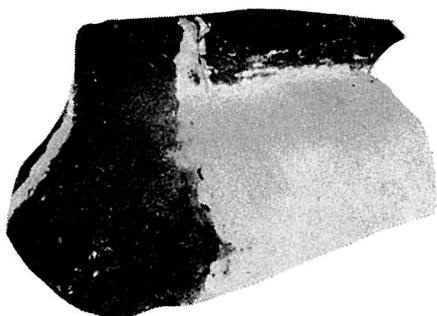
A地点出土土器



第25图1



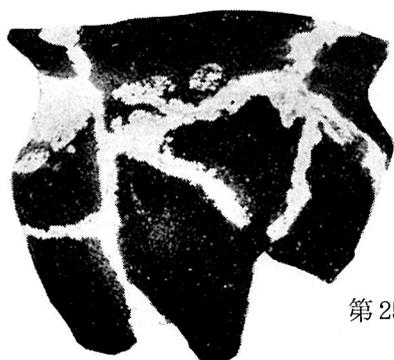
第19图1



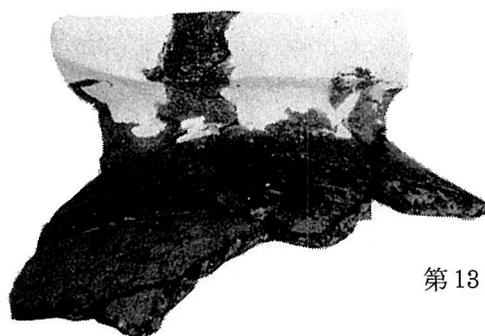
第25图4



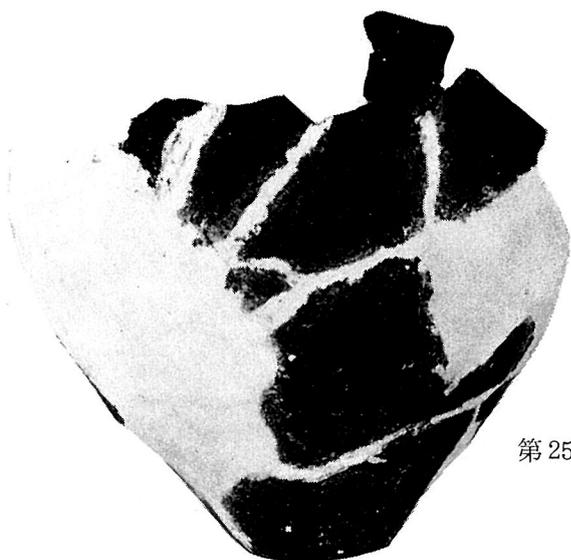
第19图3



第25图2



第13图1



第25图5



第26图

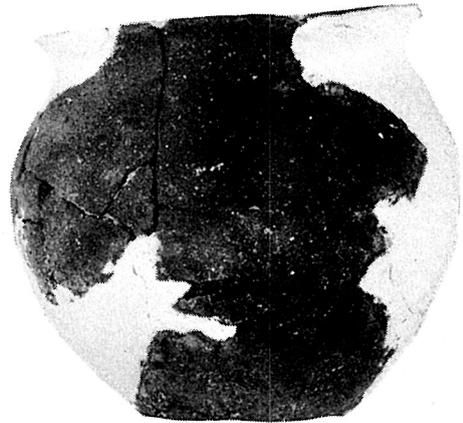


第19图7

A地点出土土器



第47图2



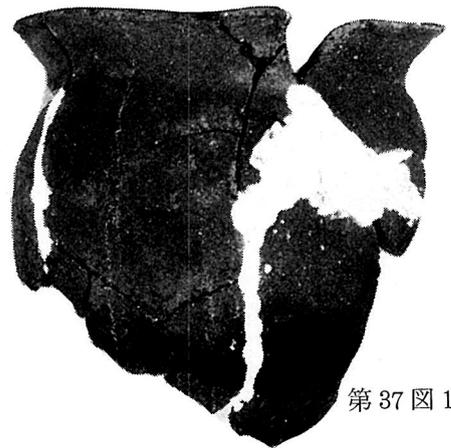
第30图2



第30图1



第38图17



第37图10



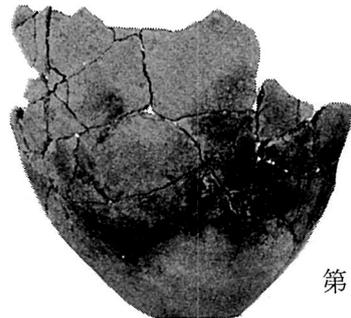
第38图19



第37图15

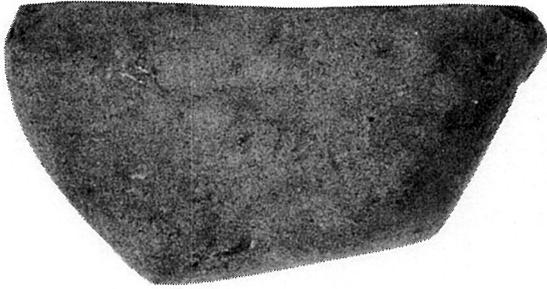


第38图18



第38图20

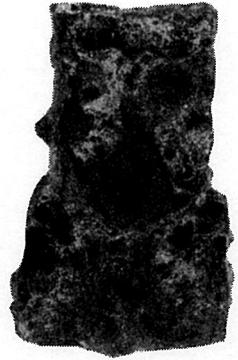
B地点出土土器



第 11 图 4



第 7 图



第 21 图



第 30 图 6



第 37 图 16



第 44 图



第 47 图 1

B 地点出土遺物

広島市の文化財 第 21 集

広島市安佐北区高陽町所在

**高陽台遺跡群発掘調査報告**

1982年3月

編 集 行 広島市教育委員会  
(社会教育部社会教育課)  
広島市中区国泰寺町一丁目4番21号  
TEL (082) 245-2111 (代)

印刷所 有限会社 創 元 社  
広島市中区国泰寺町一丁目8番1号  
TEL (082) 243-1745